2025年度

# 教育に新聞を

## NIE 実践報告書

Newspaper in Education

北海道NIE推進協議会編

# 2025NIE 実践指定校

# 実践報告書

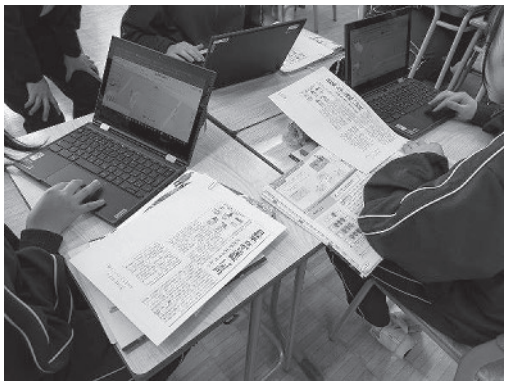
## 「生きる力」を育むために

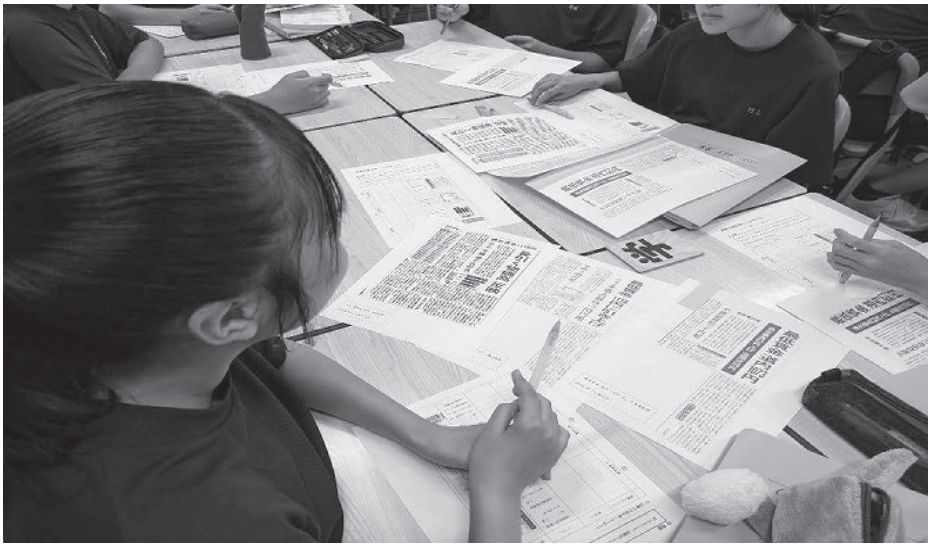
○主体的・対話的で深い学び

○体験的な活動

○言語能力の育成

○地域・家庭との連携





北海道ＮＩＥ推進協議会編

# ２０２５年度「北海道 NIE 実践報告書」の発刊に寄せて

北海道 NIE 推進協議会
会　長　菊　池　安　吉
（日本 NIE 学会　会員）

ＮＩＥ実践報告書「第２９集」を刊行することになりました。

今年度の実践校３４校の先生方が、全道各地において地域や学校の立地条件、児童・生徒・学生の実態などを考慮し、創意工夫したＮＩＥの実践の成果と課題がまとめられています。報告書には、２０２０年、小学校から順次実施された学習指導要領の改訂を踏まえて、「主体的・対話的で深い学び」や「個別最適な学びと協働的な学び」の実現に向けた NIE の取組が多数掲載されています。また、GIGA スクール構想により１人１台端末が配備され、精力的な授業改善が行われてきました。しかし、一方では、学ぶ意義を十分に見いだせず、主体的に学びに向かうことができていない子供の増加や、不登校や外国人児童生徒への支援が不十分な現状、習得した知識を現実の事象と関連づけて理解することが弱いなど、課題として顕在化してきたこともあります。学校で身につけるべき力を「実社会でも通用する力」とし、学力観も転換期を迎えていますが、学習指導要領の理念や趣旨の浸透は道半ばです。そんな中で、次期改訂に向けての論点整理も進められています。

今回の実践報告の中には、日本新聞協会が実施した NIE 学習効果調査の結果と同様に、児童生徒の「聞く力・話す力」「読む力」「書く力」「理解力・考えを深める力」「主体性」で伸びたと評価する声が上げられています。一方、全校を巻き込んでの実践や実践頻度を増やすことが今後の課題とする報告もあります。これまで複数の実践校が学校司書や司書教諭との連携・協力の大切さに触れています。全校上げての継続的な取組が学力向上に結びつき、学校全体で実践することの効果と有用性は言うまでもありません。さらに、小・中学校のつながりや家庭・地域との連携を強化したり、児童生徒会の委員会活動と連動した取組も増えてきました。特別支援学級や特別支援学校・高等支援学校での実践も増え、その有効性も徐々に見えてきました。

２０２５年夏に開催された第３０回 NIE 全国大会神戸大会のスローガンは、「時代を読み解きいのちを守る NIE」。大会では、インターネット上で真偽不明の不確かな情報が飛び交う時代に、ＮＩＥ活動によって「時代を読み解く力」「メディアリテラシー」をどのように育てていくかが話題となりました。秋の新聞週間の代表標語は「ネット社会　それでも頼る　この一面」でした。

新聞の発行部数は、十年前と比較するとおよそ４割減です。今後は、紙媒体とデジタルの活用をどのように進めるか、対話型生成 AI（人工知能）をどのように活用していくか、偽情報の拡散をどうやって見抜く力を身につけるか、課題はたくさんありますが、実践の成果と課題を全道で共有しながら一歩ずつ前に進めていきたいと考えます。速報性があり、記事の鮮度は高いが玉石混淆のネット記事のみに振り回されることなく、メディアリテラシーを身につけさせ、批判的な思考を育て、新聞の持つ信頼性や一覧性のよさ、新聞の魅力を再確認したいと思います。新聞を開いたときの思いがけない記事との出会いは、フィルターバブルのネット記事検索では遭遇できません。ＮＩＥの裾野を広げ、「ＮＩＥの種蒔き」に今後とも継続的に取り組んでいきます。

最後に「実践報告書」の発刊に当たったＮＩＥ事務局をはじめ、ＮＩＥ実践校の先生方、新聞関係者の皆さんに大変お世話になりましたことを報告しお礼申し上げます。

# 目　　次

**巻頭言**　2025年度「北海道NIE実践報告書」の発刊に寄せて …… 2
北海道NIE推進協議会　会長　菊池　安吉（日本NIE学会理事）

## 日本新聞協会認定・NIE 実践指定校

### 小 学 校

●「新聞活用による語彙力・読解力・表現力の育成」…… 6
豊頃町立豊頃小学校（新規校）　近藤　正晃、森田　昌宏

●「低学年における新聞活用年間カリキュラム」…… 10
札幌市立八軒西小学校（新規校）　宮崎　世司

●「主体的に学び、互いに考えを伝え合う児童の育成」…… 14
浦幌町立上浦幌中央小学校（継続校2年目）　丸矢　進

●「簡単に取り入れられるNIE」…… 18
札幌市立百合が原小学校（継続校3年目）　藤部　萌

●「メディアと共に、かわるWatashi」…… 22
田中学園立命館慶祥小学校（継続校3年目）　北　風太

●「学校図書館での新聞の活用」…… 26
旭川市立永山小学校（継続校4年目）　澤井　俊博、中島　環

●「NIEが学校にもたらしたもの」…… 30
岩見沢市立中央小学校（継続校7年目）　冨樫いずみ

### 中 学 校

●「新聞記事をもとに、社会的事象への関心を高めよう」…… 34
旭川市立春光台中学校（新規校）　庭瀬奈穂美

●「実践指定校の取組を校内外へ広げるための実践」…… 38
新ひだか町立三石中学校（新規校）　川上　知子

●「「時事を知り、意見をもつ」ための新聞の活用
～より多様な方法で情報を得るために～」…… 42
札幌市立宮の森中学校（継続校2年目）　桑山美由紀

●「高齢者と災害をテーマとする新聞作り」 …… 46
函館市立南茅部中学校（継続校2年目）　中川　証子
北海道教育大学函館校　講師　野嵜　雄太

●「新聞の活用と対話・協働学習」 …… 50
北広島市立西部中学校（継続校2年目）　野田朝日那

●「社会認識の深化を促す新聞活用」 …… 54
北海道教育大学附属旭川中学校（継続校2年目）
吉田　雅風

●「図書館と連携した新聞活用」 …… 58
札幌市立屯田北中学校（継続校3年目）　福井　剛史

●「「情報」と「情報」の関係性と妥当性」 …… 62
札幌市立真栄中学校（継続校4年目）　遠藤　翔太

●「戦争と未来についての学びを深める新聞活用の実践」
～新聞でつながる、教科横断的な平和についての学び～ …… 66
芽室町立芽室西中学校（継続校4年目）　掛水　成幸

●「紙媒体・デジタル媒体の活用の実践」 …… 70
浦幌町立上浦幌中学校（継続校5年目）　中村　宏喜

●「読解力、表現力を高めるための新聞活用」 …… 74
小樽市立北陵中学校（継続校9年目）　井浦　敦士

## 義務教育学校

●「世の中と子どもたちをつなぐ新聞学習
～「教室での学び」をイメージ化する「新聞での学び」～」 …… 78
安平町立早来学園（継続校2年目）　片岡　鉄也

●「義務教育学校における新聞の活用
～発達段階を考えたデジタルとアナログの融合を目指して～」 …… 82
札幌市立義務教育学校福移学園（継続校4年目）
福本　勇太

●「朝活動の時間を利用したNIE活動」 …… 86
富良野市立樹海学校（継続校7年目）　佐藤　一博

## 高等学校

●「日常的な新聞への親しみを通して」 …… 90
北海道小樽水産高等学校（新規校）　阿部　淳一

●「「知識」から「自分事」へ昇華するNIE実践」 …… 94
市立札幌清田高等学校（新規校）　藤井　靖香、町田　一也

●「「新聞ノート」の進化を目指して～ラーニングコモンズでの挑戦～」 …… 98
旭川志峯高等学校（新規校）　井上　陽介

●「本校における新聞活用」 …… 102
市立札幌大通高等学校（継続校2年目）　石山　俊央、内田　大資

●「新聞ことはじめ」 …… 106
北海道札幌白陵高等学校（継続校2年目）　土永　敬子

●「新聞を読む、活かす（5年目の取組）」 …… 110
北海道富良野高等学校（継続校5年目）
北村　智裕、坂　大祐、小森　猛

●「「新聞を活用した学びの実践」～ SHRでの新聞記事の活用と新聞コーナーの設置を通した生徒の日常に新聞を取り入れた実践報告～」 …… 114
北海道科学大学高等学校（継続校5年目）　山下　卓

●「「日常的・継続的」な新聞活用の取り組み」 …… 118
北海道札幌手稲高等学校（継続校7年目）
嶋崎　俊樹、野﨑　大三、倉部英利子

●「新聞記事を利用した授業づくり」 …… 122
星槎国際高等学校帯広学習センター（継続校7年目）
高橋　知行

●「NIEワークシートを活用した小論文作成」 …… 126
札幌新陽高等学校（継続校8年目）　櫻庭　彩寧

## 独自認定校

●「離島・小規模校の課題を基に読解力を伸ばすNIE」 …… 130
礼文町立礼文小学校（新規校）　加藤　育海

●「社会的な事象に対する関心と課題意識の醸成」 …… 134
釧路市立清明小学校（新規校）　橋本　雄介

## 編集後記

北海道NIE推進協議会　NIEコーディネーター　上村　尚生 …… 138

２０２５年度　NIE 実践報告

# 新聞活用による語彙力・読解力・表現力の育成

豊頃町立豊頃小学校　教諭　近藤正晃　森田昌宏

## １．はじめに

本校は十勝管内東部、「ハルニレの木」で有名な豊頃町の自然に囲まれた地域の小規模校である。

「ふるさと豊頃に誇りを持ち、夢と希望に向かって挑戦する子どもの育成」をスローガンに、全校児童９７名という少人数ならではの児童一人一人の個性を大切にした教育を行っている。また、二宮尊徳の「報徳の教え」を基盤とした人間形成に力を入れている。

## ２．児童の様子

素直で人の話をよく聞き、のびのびとした雰囲気の中で学校生活を送っている児童が多い。学習や行事に一生懸命取り組み、分からないことにも積極的に挑戦する姿が見られる。一方で、文章表現においては書く力が弱いという課題も見られ、校内研修では「書く力の育成」をメインテーマとしている。書く力を伸ばすためには、良質なテキストを題材にした読解力、語彙力の育成が不可欠であり、その一つとして新聞記事の活用が有効であると考える。しかし、新聞を購読している家庭が減少しているため、学校に多くの新聞が届くようNIE 実践校に参加することとした。

## ３．実践の内容

### ①　NIE コーナーの設置

本校では、９月から２月にかけて２紙ずつ届くことにしている。読売 KODOMO 新聞と朝日小学生新聞、まなぶんは低学年が見やすいように１階ホール、他の新聞（一般紙）は高学年がよく通る２階ホールに置くことにした。また、新聞に関心をもち親しんでもらうために、担当者が子どもたちに読ませたい記

事を選び、掲示した。６年生は昨年度知床半島の携帯基地局設置の問題について調べており、その続報の記事に興味を持って読む姿が見られた。

② ３年算数「大きい数のしくみ」での新聞活用

３年算数では、「大きい数のしくみ」の学習において、新聞の中から「一番大きな数」を見つける活動に取り組んだ。それぞれ１冊の新聞を手に取り、記事の中から大きな数を見つけていた。実生活の中の１００００より大きい数を実感することができた。

③ ５年国語「世界遺産白神山地からの提言ー意見文を書こう」

身近な話題をテーマにするという点から、単元を「北海道釧路湿原からの提言」として教材化した。毎日届く北海道新聞をたどり、状況をリアルタイムで理解し、ソーラーパネル設置についてや自然保護の取組などを多角的に捉え、根拠に基づいた主張を意見文に書く力がついた。今現在の社会事象に興味をもつきっかけにもなった。

④ ５年　朝の会でのスピーチ活動

５年生は朝の会でスピーチ活動に取り組んでいる。２学期は、より社会に目を向けようと、NIE コーナーにある新聞記事を選び、それを紹介し自分の考えをみんなに伝えることとした。記事を読み込み、要約して話し、自分の感想を付け加えて伝える力を付けることができた。

⑤　５年社会「情報化した社会と産業の発展」

５年特別支援学級では社会科で情報メディアの学習の際に、新聞から情報を得る体験に取り組んだ。１時間の中で１冊の新聞を読むという授業で、普段は新聞にあまり関心を示さない児童が１時間もの間、真剣に新聞を読む姿が見られた。

⑥　５年　「あなたが選ぶ十勝の１０大ニュース」投票の取組み

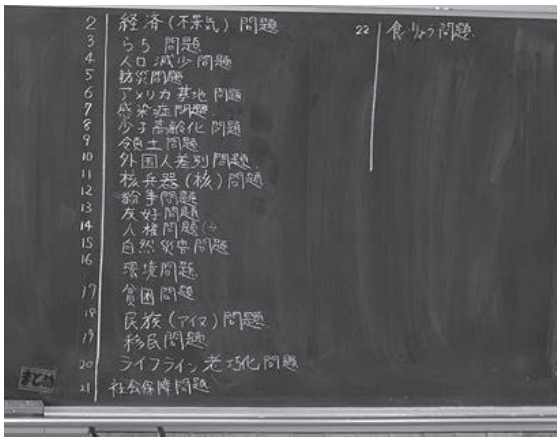
５年生では、十勝毎日新聞社が行っている、「あなたが選ぶ十勝の１０大ニュース」に投票した。十勝毎日新聞社の候補記事２０項目から５点を選び投票するもので、子どもたちは、真剣に記事を読み、友達と意見交流しながら、タブレットを使い、投票していた。より社会の出来事に関心をもつことができた。

⑦　６年　新聞スクラップの取組み

６年生は昨年度より新聞スクラップに取り組んでいる。しかし、新聞を取っている家庭が少ないため、学校にある新聞を活用する児童が多く、時期が大きくずれてしまう場面も見られた。今年度は、学校に多くの新聞が届けられていることもあり、その時その時に応じた新聞記事を選ぶことが増えてきている。

また、社会科の授業の中で、「日本が抱える様々な問題について挙げていこう」の課題に

対して、多くの課題が発表され、社会に対する関心が高まっていると感じている。




４．成果と課題

（１）成果

・新聞に対する関心の高まり

児童の目に触れるところに新聞があることで、社会の出来事に関心をもち、自分の考えをもって話し合う姿が増えた。時に、学習したことが記事になっていたり、１０大ニュースを投票したりすることで、社会的事象をよりが身近なものとして感じている姿が見られた。

・「書く力」の向上

新聞には、教科書にはあまり出てこない社会的な言葉や多様な表現が多く使われており、児童は記事を読む中で、新しい言葉に自然に出会い、文脈から意味を考えたり、調べたりする経験を重ね、語彙力が向上した。また、新聞を読むことで、文章を正確に読み取る力や要点をまとめる力が高まっている。そのため、子どもたちの「書く力」や「表現力」の育成に寄与していると考えている。

（２）課題

・児童の学年差や読解力の差により、記事選びが難しい

今年度は「こども新聞」は１階、本誌は２階に掲示したが、児童が自分で記事を選ぶという取り組みができなかった。担当者が高学年向けに記事を選んだが全校的な取り組みになるような工夫が必要であった。

・継続的な活用体制づくり

現在は担当者２人で進めている状況だが、NIE の有用性を全校に広げていく必要がある。そのためには積極的に新聞活用の取組みをすすめ、情報発信していくことが大切である。

また、本校は、管内唯一の小中併設校であり、その特色を生かした NIE の取組みをすすめていくことも重要である。そのためには、小学生のみならず、中学生にも対応した新聞記事の掲示や中学校の先生方にも理解を広げていく取組が必要である。

５．終わりに

本校では、NIE の実践を通して、児童が新聞に日常的に触れる学習環境を整えてきた。その結果、新聞に対する関心が高まり、社会の出来事を自分事として捉え、自分の考えをもって話し合う姿が多く見られるようになった。新聞記事には多様な表現や社会的な語句が多く含まれており、記事を読む経験を重ねることで、語彙力の向上が図られた。また、文章を正確に読み取り、要点を整理する活動を通して読解力の向上にもつながり、そのことが、自分の考えを文章で表現する書く力の育成に大きく寄与していると考えられる。

一方で、学年差や読解力の違いにより、児童が自ら記事を選ぶことの難しさや、全校的な取組としての広がりに課題が残った。

今後は、小中併設校という本校の特色を生かし、小学生から中学生まで発達段階に応じた新聞活用を工夫するとともに、教職員間で実践を共有し、継続的に NIE に取り組む体制を整えることで、活動のさらなる広がりを目指していきたい。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 低学年における新聞活用年間カリキュラム

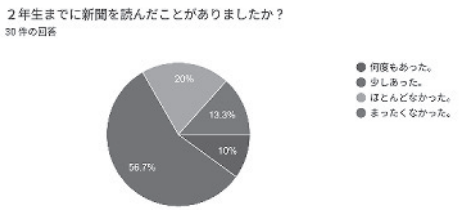
札幌市立八軒西小学校　教諭　宮崎　世司

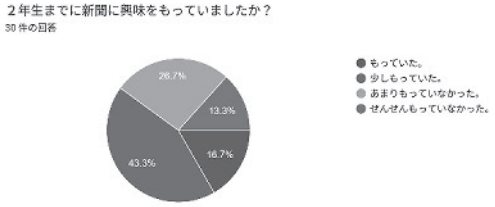
## １．はじめに

近年、日本国内において、新聞に触れることが少なくなっていると個人的には感じている。自分の周りにおいても、個別に新聞をとっている人はほとんどいない状況である。ネットニュースを気軽に検索できることや、自分に興味のあることを中心に情報収集する環境が整っていることなどが要因として考えられる。しかし、新聞の魅力は、数多くある。その一つとして、最近話題になっていることや、様々な立場からの情報など、一度に幅広く情報を手に入れることができる。これは、自分の興味関心の幅を広げることにもつながり、まさに小学校段階の児童にとって必要な手立てなのではないだろうか。本実践では、高学年でふれる機会がある新聞の活用を、低学年でも生かすことができると考え、年間カリキュラムを構成した。

## ２．児童の様子

実践対象学年は、３年生である。学年は２クラスあり、年間カリキュラムを実践したのは、１クラスである。対象クラスの児童に対して、２年生までの実態調査をしたところ、以下の結果となった。




新聞を読んだことがある児童は、66.7％と想定よりも多かったが、興味関心に対する質問においては「あまりもっていなかった」「全然もっていなかった」の数値が 40％だったことから、新聞の魅力・有効性の認識が低いことが分かった。

## ３．実践の内容

①　朝読書の時間における新聞の提示（常時）

本校では、朝の 10 分間を読書時間に設定している。そこで、教師が毎日新聞をテレビに映し、いつでも手に取ることができるようにした。そうすることで、新聞が日々の生活にあることを意識できると考えた。今回使用したのは「北海道新聞朝刊」である。最初の２週間程度は、教師が注目したニュースなどを紹介し、どのような情報が載っているのかを教えていった。この取組により、新聞への興味関心が芽生え、次の活動へと幅を広げることにつながる。また、年間通して取り組むことで、次第に新聞を手に取って読む子が増えたことから、紙媒体だけではなく、「まな bell」も活用していった。

②　係活動としての新聞活用（４～９月）

新聞への意識付けを継続したことで、学級での係活動を決める際、児童の意見の中から「情

報発信係」というものが出てきた。活動内容は、毎朝新聞記事を紹介するというものである。最初は、扱いやすい天気予報を伝え、次第に一面の記事や TV 欄など、中の記事にもふれるようになっていった。野球が好きな児童がいたことから、スポーツ欄の記事を紹介することもあり、新聞を生かした TV 番組のような取り組みへと発展していった。この取組は前期終了の９月末まで続き、係活動としての取組が進められたことにより、児童にとって新聞がより身近なものとなり、世の中の様々なニュースが３年生という発達段階においてもたくさん話題になっていった。

③学年や掲示板での活用（４～12 月）

本校では、週一回学年で集まる「学年朝会」を設定している。その際、教師から新聞記事を取り上げて話すことで、学年として新聞を身近に感じるきっかけをつくった。隣のクラスへの新聞に対するアンケートを実施したところ、約70％の児童が３年生になって興味が高まったと回答している。

掲示板には、社会科の学習で習った道庁や地域のスポーツチームであるコンサドーレ札幌の記事、間違え探しやクイズの記事などを貼り出したことにより、学年はもちろん、全校児童においても、立ち止まって注目する児童の姿を見ることができた。

④新聞の魅力を発信するための実践（９～12 月）

単元の導入

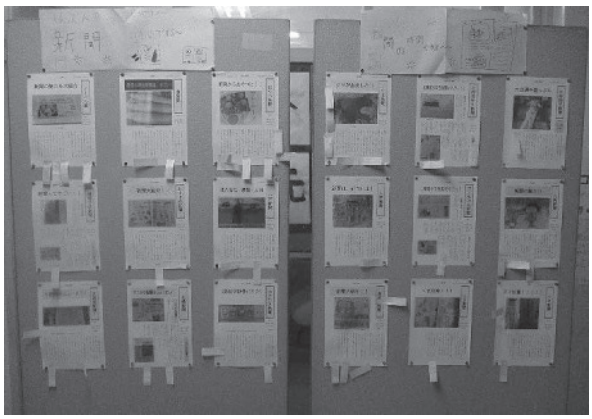
９月から、「北海道新聞」「北海道小学生新聞」「朝日小学生新聞」「産経新聞」「日本経済新聞」を毎日手に取ることができるようにコーナーを設置した。児童は色々な種類の新聞があることに驚き、それが身近にあることの凄さを実感していた。その気持ちと４月の自分たちの新聞への思いを比較させることで、「みんなにも広めたい」という気持ちが生まれていった。

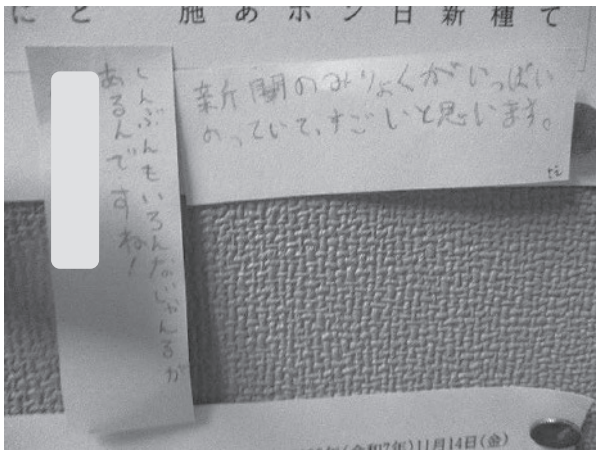
単元の前半

単元の学習問題として設定した「新聞の魅力を伝える」ために、まずは９月いっぱいの期間で、新聞を読み続け、気になる記事やおすすめしたい新聞を探す活動を行った。何気なく話してきたニュースについて振り返り、その記事をこれまでの新聞に目を通して探す児童の姿もあり、こだわりをもって記事を探していた。

単元の後半

10月からは、その記事を参考にし、「まなbell」にある新聞を作ることができるアプリを活用して「新聞の魅力を伝える新聞」を作成した。完成したものを掲示板に貼り出し、まずは隣のクラスに読んでもらうために、知らせに行った。読み終わり次第付箋を活用し、コメントを書いてもらったことで、自分達の思いが伝わったという達成感や全校にも広めたいという発信意欲の向上が見られた。



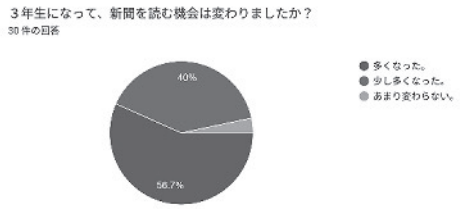


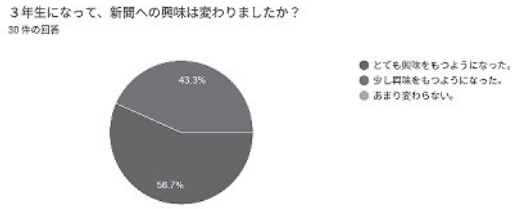

## ４．成果と課題

### （１）成果

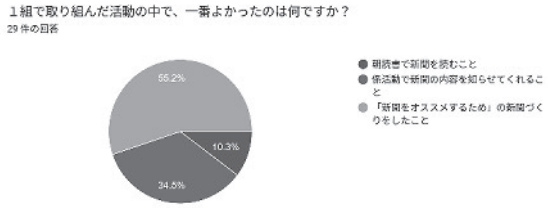
①興味関心の幅の拡大

学習を終えて、新聞に対する実態調査を行ったところ、以下のようになった。




最初は、教師からのアプローチがメインだったが、児童の活動が増えたことや、学習を通して新聞の魅力が認識できたことから、自分から親しむ態度を生むことができたといえる。特に新聞への興味関心については、クラス全員が前向きな姿勢へと変化している。継続することによる向上はもちろんあるが、より自分事に結び付けたことによる高まりも大きいといえる。その点でいえば、新聞の魅力を発信するという実践は、大変有効であったといえる。




低学年という発達段階の児童の姿として、世の中で話題になっていることが日常会話に出てくるなど、日々の話題の質が変容したことは、新聞活用がその一助になっていたと考える。

②資料活用力の向上

本校には、宿題の代わりに、自分で課題を設定し取り組むという「マイチャレンジ」という学習がある。その中でも新聞をきっかけにして学習をしている児童がいたり、新聞記事を根拠に自分の考えを確立したりする児童もいた。新聞を資料と位置付け、課題設定や自己表現に生かそうとする力が身に付くきっかけとなった。

## （２）課題

①取組に対する学年の限界

年間を通した活動を行うにあたり、１・２年生での実施は困難であると感じる。その根拠として、今回活用したのが「北海道新聞の朝刊」が主であるという点だ。本実践において、活用できたとはいえ、３年生にとってハードルが高い部分が多くあったと感じている。ただし、振り仮名がある小学生新聞を活用することができれば、年間での取組も可能であるのではと考える。

②活動時数について

今回の実践では、国語科の授業時数と総合的な学習の時間の時数を合わせて行った。学習指導要領から外れないことを前提としつつ、教材化を工夫することで時数を調整してきた。ただし、他の学校でも実践できるように一般化するためには、今回の年間カリキュラムをベースにしつつ、児童の実態に合わせて柔軟に対応することが求められる。

## ５．おわりに

本実践を通して、新聞を活用した年間カリキュラムの確立は可能であるとともに、その効果は子どもたちの資質・能力を高めることにつながると考える。これまでは、高学年からの活用が一般的だったが、低学年からでも実践できることが分かった。むしろ、低学年から段階的に積み重ねていくことで、より質の高い力を身に付けることができる。学年・学級にとどまらず、学校全体で促進することも視野に入れて計画していくことも検討すべきである。

今回は、広く親しまれている「北海道新聞」や「産経新聞」などを扱い、同時に「さっぽろ10区トーク」や「週間まなぶん」なども合わせて子どもたちに提示した。こちらの想定以上に興味をもっている姿を見て、読みやすさや身近なニュースなど、親しみやすいものを教材化することが大切であると改めて思った。

本実践で活用した「まな bell」は、様々な教科等で有効に活用できると実感した。本実践の後、冬休みの図書貸出に向けて、おすすめの本を紹介するための新聞づくりを行ったり、６年生では、修学旅行の振り返りとしての新聞づくりをしたりして活用している。子どもたちの学習のまとめに最適であると再確認できた。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 主体的に学び、互いに考えを伝え合う児童の育成

浦幌町立上浦幌中央小学校　教諭　丸　矢　　進

## １．はじめに

本校は昭和 61 年、上浦幌地区に点在していた５校が統合し開校いたしました。その後、児童数の減少が進むなか、この地でより豊かな学びを実現するため、令和８年度４月より隣接する上浦幌中学校と統合し、義務教育学校「上浦幌学園」として新たにスタートする予定です。

今年度は閉校事務と開校準備が重なり、新たな実践への着手は容易ではありませんでしたが、統合相手校である上浦幌中学校がNIE（教育に新聞を）実践校であったことを踏まえ、本校でも伝統ある新聞づくりや新聞活用授業を継続して実践してまいりました。小規模校ゆえのささやかな歩みではありますが、義務教育学校化へ向けた本校の取り組みの一端をご紹介いたします。

## ２.児童の実態から

本校では、児童が学びの連続性や必要感、関連性を自覚しながら学習意欲を高められるよう、興味・関心に沿った「子どもが主体となる授業づくり」を推進しています。一方で、学力検査の分析等から、学力向上が喫緊の課題となっています。具体的には、問題を正しく認識することや、問題文の解釈に時間を要するなど、情報を時間内に的確に処理できないことが要因の一つと考えられます。こうした現状を踏まえ、本校では以下の二点に重点を置き、授業改善を図っています。

- 意欲的に学び続ける児童の育成
- 道筋を自ら立て、課題解決できる力の育成

特に日々の授業においては、児童自らが膨大な情報から必要なものを取捨選択・整理し、課題解決への道筋を立て、互いの考えを伝え合いながら学びを深める力の育成を目指しています。加えて、語彙力の定着や読解力の向上も重要な課題であるため、その一環として新聞を活用した学習活動（NIE）を展開しています。これらの課題は中学校とも共通していることから、現在は小中学校が連携した研修を進め、義務教育学校化を見据えた指導体制の充実に努めています。

## ３．実践の内容

①　新聞コーナーの活用

本校では、地元紙である「十勝毎日新聞」をはじめ、「朝日小学生新聞」「北海道小学生新聞」の計３紙を購読しています。

さらに、提供いただいている全国紙や「北海道新聞」も併せ、児童玄関前に「新聞コーナー」を設置し、児童が自由に閲覧できる環境を整えています。

今年度より本町での毎日新聞の提供がなくなるという変化もありましたが、子どもたちは休み時間や下校前のスクールバスを待つひとときなどに、自ら新聞を手に取り、それぞれが興味を持った記事を読む姿が、日常の光景となっています

②　体験活動と連続した新聞づくり

本校では、伝統的に「新聞づくり」を通した教育活動に力を注いでおり、全校児童がそれぞれの発達段階に合わせて新聞づくりに取り組んでいます。

低学年においては、生活科の授業や校外学習で体験した内容を、絵と文章でわかりやすくまとめる活動を行っています。具体的には、国語や生活科の時間に「はがきサイズ」のミニ新聞づくりに取り組み、書くことの楽しさを学んでいます。

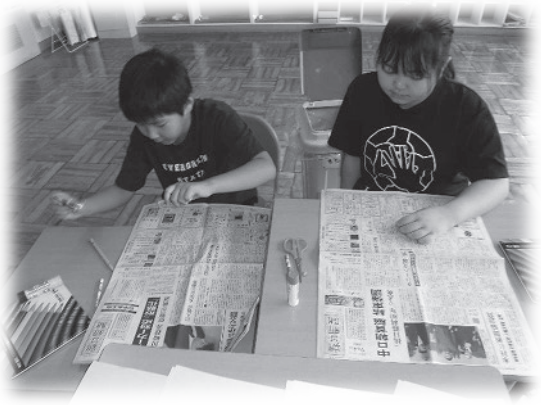
中学年では、今年度で閉校を迎える本校の歴史や、郷土・上浦幌地区についての学習を進めました。その一環として、地域の方々をゲストティーチャーとしてお招きしたり、保護者にインタビューを行ったりして取材を重ね、学校の思い出を「かべ新聞」にまとめました。

高学年では、総合的な学習の時間における「ふるさと学習」のまとめとして、かべ新聞づくりに取り組みました。

特に、町内の様々な産業を体験した「民泊学習」に焦点を当てたテーマを設定し、現地で取材した貴重な内容を詳細にまとめました。完成した新聞は単なる掲示にとどめず、浦幌小学校の児童との交流学習に活用するなど、自らの学びを相手に伝え、表現する活動を推進しました。

③　新聞スクラップ活動

３・４年生では、文章の読解力向上や語彙力の拡充を目指し、朝日新聞の「しつもん！ドラえもん」を活用した新聞スクラップ活動に取り組んでいます。このコーナーは、社会の多様な話題をクイズ形式で紹介する人気記事であり、子どもたちにとっては楽しみながら取り組める教材となっています。この記事を活用することで、正確な読解力を身に付けるとともに、多岐にわたる情報を得られる「新聞ならではの良さ」を実感する貴重な機会となっています。



学習の具体的な流れとしては、まず児童が自ら新聞を手に取り、掲載されている「質問内容」を正確に確認することから始めます。

質問の意味や意図をしっかりと把握した後は、解答を見つけ出すために紙面をめくり、隅々まで目を通しながら目当ての記事を探していきます。

この「問いに対して答えを探す」というプロセスが、情報を主体的に読み取る力を育む大切なステップとなっています。

切り抜いた解答の記事と関連する紙面を整理した後、各自が選んだ台紙に丁寧に貼り付けます。

最後に、その記事の内容を自分なりに要約したり、読んだ感想や気づきを「コメント」として記入したりすることで、学習のまとめを行います。最後に、完成したスクラップ記事を友達同士で交換し、得た情報を共有し合います。お互いのまとめ方や感想を読み合うことで、自分とは異なる視点に触れたり、新たな知識への関心を深めたりする貴重な対話の場となっています。

４．成果と課題

【成果】　体験活動と連動したアウトプットを行うことで、学びの定着が図られました。また、新聞を日常的に手にする環境づくりにより、児童の興味・関心が大きく高まりました。

【課題】　今後は、これらの実践を義務教育学校の教育課程に系統的に位置づけ、９年間を見据えた情報活用能力の育成プログラムを構築していくことが重要であると考えています。

５．おわりに

本校でのこれまでの実践は、今年度をもってひとつの区切りを迎えます。しかし、これまで積み上げてきた実践と伝統は、新たに開校する「上浦幌学園」へと引き継がれます。

総合的な学習の時間「知愛」の要としてこれらの活動を位置づけ、9 年間を通じ、児童・生徒の確かな学びと健やかな成長へとつなげていきたいと思います。

新聞スクラップ学習
【単元の目標・指導計画】　2時間
・文章の読解力向上や語彙力の拡充。
・興味を持った情報をまとめ、自分の意見を表現する。

【本時の目標・本時の展開】
目標　質問の内容を理解し、関係する情報をまとめよう。

「記事をみつけよう」
・質問コーナーを見つける。
・解答につながる記事を見つける。

「記事を読んで内容をまとめよう」
・記事の中から必要な情報を見つけてラインをひく。
※写真や見出しをヒントにする。

「要約文を書こう」
・選んだ記事の要約文を書く。（簡単にまとめる）
※文章の長さは問わない。自分の言葉で表現する。

「記事を丁寧に貼りつける」
※自由にはる　アイデア・工夫OK
※必ず出展となる新聞の題字や利用した記事の日時など
必要な情報も記入する。（切り取って貼ってもよい）

「発表しよう」
・自分のスクラップ記事を紹介する。
・友達の作品の良いところを評価（コメント）する。

「ふりかえろう」
・本時の学習を振り返る。
※質問や解答の要約が上手にできているか。
※自分の考えが相手に伝わる文書となっているか。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 簡単に取り入れられる NIE

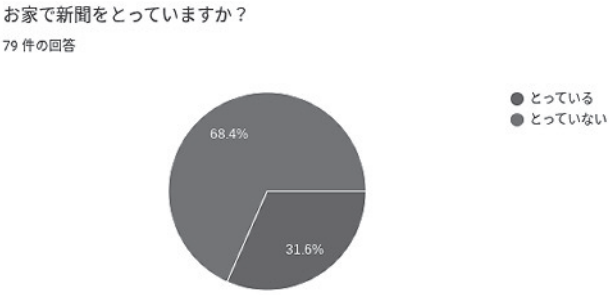
札幌市立百合が原小学校　教諭　藤部　萌

## １．はじめに

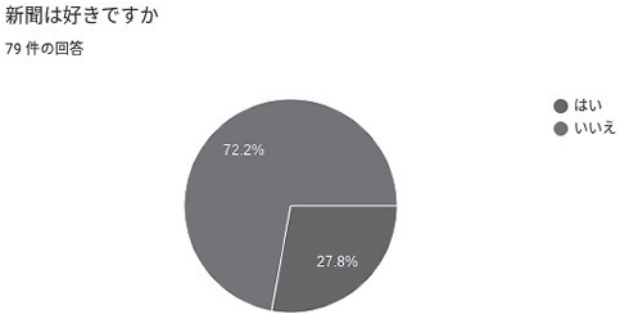
本校は、札幌市北区に位置する自然豊かな百合が原公園に近い中規模の学校である。今年度はどの子も楽しく学び合い、挨拶と笑顔あふれる学校を目指すために、「主体的に学び合う　あったか百合が原」を学校教育重点目標に掲げ、子どもの声を聴くことを教育活動の重点とした教育を進めている。

## ２.児童の様子

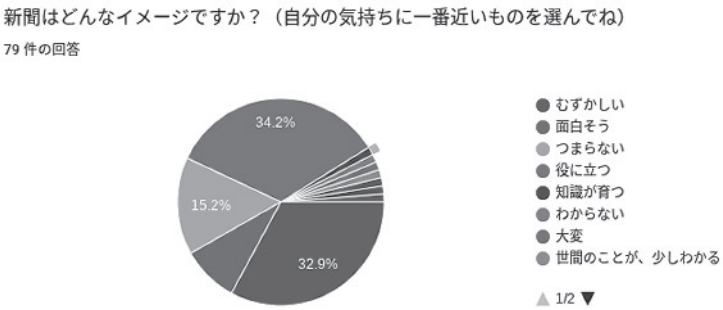
５年生の児童と学習を行っている。何事にも前向きに取り組む子どもたちであるが長い文章を読むことに対する苦手意識をもっている子が多い。




事前に取ったアンケート（Google　form）では新聞をとっている家庭が学年全体の３０％であった。




また、新聞は好きですか？という質問に全体の約７０％の人が「いいえ」と答えた。インターネットが発展していることもあり、新聞に親しみをもつ子どもは少ないことが分かる。




新聞はどんなイメージですか？という質問では、

「役に立つ」（３４．２％）

「難しい」（３２．９％）

「つまらない」（１５．２％）

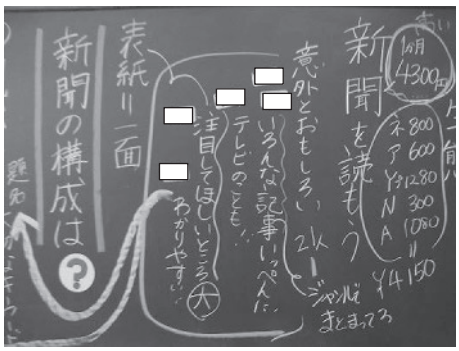
が上位３つの回答であった。新聞は役に立つという認識ではあるが、文字が多いことから漠然と難しそうな読み物というイメージをもつ子どもが多かった。

## ３．実践の内容

①国語科での実践

単元「新聞を読もう」（光村図書）では教科書に載っているものを読むだけでなく、実際に本物の新聞を自由に読む時間をとった。子どもたちは「いろんな国のことが書いてある！」、「野球のページがある！」、「戦争のことが書いてある！」と様々なページに興味をもち、夢中で新聞を読んでいた。１０分くらい経って、読む時間を終わろうとすると「まだ読みたい」という声がたくさんあった。「意外と面白いと思った人～？」と子どもたちに

聞いてみると９割の手が挙がった。事前のアンケートでは新聞へのイメージが良くない子どもが多かったが、新聞に触れる機会を作ってあげれば、新聞の必要性を感じたり、新聞を読みたいという気持ちや新聞で調べてみようという気持ちを育てることができるのではないかと考えられる。

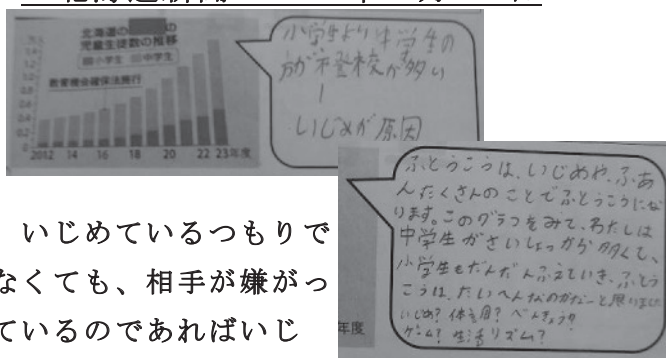


② 特別の教科　道徳での実践

「光輝の告白」（光文書院）は、いじめにつながる内容の教材である。「いじめだと思っていなくても、いじめの加害者になってしまう可能性がある」ということに気付かせることをねらいとして授業を行った。本時では新聞の二つの記事を導入とまとめに使った。

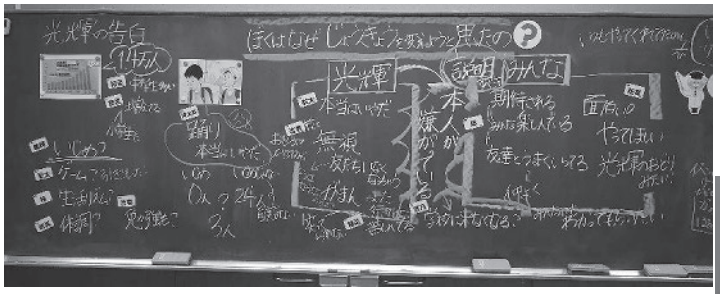
導入では、北海道新聞の不登校についての記事を扱った。北海道の不登校の児童生徒数が年々増えていることが分かるグラフを子どもたちと一緒に見た。そこからなぜ増えたのか原因を考えさせることで、いじめが関係しているのではないかという考えをもつようになった。

北海道新聞　2025 年 8 月 18 日




いじめているつもりでなくても、相手が嫌がっているのであればいじめになってしまうことを学んだ後、まとめでは、道内のいじめの件数が５万件以上あることが分かる記事を読んだ。いじめは身近なところで起きてしまうことかもしれないということを感じさせ、自分はいじめを起こさないという意志を強くもたせた。

北海道新聞　2025 年 10 月 30 日




## ４．成果と課題

### （１）成果

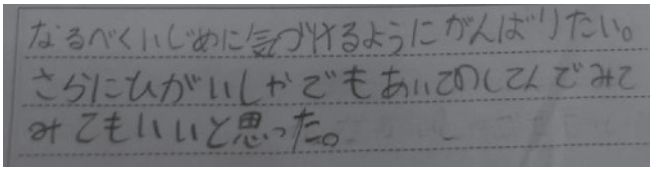
①新聞をまるごと活用

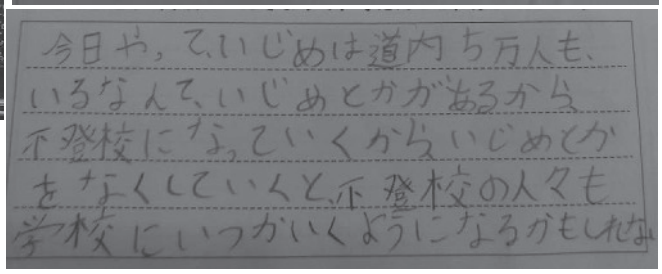
国語「新聞を読もう」の学習では特に内容などを選ばず、二人に一部あたるよう新聞を用意しただけであった。教科書に載っている新聞だけを見るより、実際の新聞が手元にあることで、子どもたちは興味をもって、どんなことが書いてあるのだろうとわくわくする気持ちで新聞を読むことができた。簡単に準備ができるので、今後教科書に新聞が載っている学習を行うときは迷わず実際の新聞を用意してあげたい。また、なるべく少ない人数で見るようにすることで、自分が見たいページをとことん読めるようにしてあげたい。そういった活動が増えることで、子どもたちが新聞に親しみをもてるようになると考える。

②学習内容に合わせた記事の活用

特別の教科　道徳「光輝の告白」で不登校やいじめの記事を扱ったことはかなり効果的であった。文を読むことが苦手な子どもたちなので、まずグラフだけを提示した。みんなでグラフを読み取ったあとにみんなで一緒に記事を読むようにしたことで、記事を理解し、みんながいじめに対する考えの土台を作ることができた。教材に合う記事を使ったことで教科書の教材の中だけで話を終わらせず、実際にある事、自分事として考えることに役立った。

道内のいじめの数がとても多くてびっくりした


なるべくいじめに気づけるようにがんばりたい。
さらにひがいしゃでもあいてのしてんでみて
みてもいいと思った。


今日やっていじめは道内ち万人も
いるなんて、いじめとかがあるから
不登校になっていくからいじめとか
をなくしていくと不登校の人々も
学校にいつかいくようになるかもしれな

### （２）課題

子どもたちが新聞に苦手意識をもつ理由の一つとして、新聞に触れる機会が少ないからということが挙げられる。

子どもたちの実態によっては、NIE タイムなどを設けて新聞に触れる機会を継続的に作ることで新聞に親しみをもてるようになるかもしれない。しかし、新聞を読むことを強制されることが続くと新聞が嫌になる子が出てくることも考えられる。今担任をしている学級の子どもたちは後者である。そこで普段の学習の中で新聞をプチ活用する時間を散りばめ、少しずつ新聞に慣れていくことが大切だと考える。しかし、教師が日々の授業を準備している中で記事を探すことはかなり大変である。子どもだけでなく教師も新聞を読む習慣を付けるということも必要ではあるが、活用できる記事と関連した単元のリストなどがあれば、NIE を進め、広げることができるのではないか。子どもたちに継続的に新聞に触れさせるために教師間で共有できるアイテムが必要であると考える。

## ５．終わりに

子どもが新聞に苦手意識をもつことと同じく教師も新聞を教育に取り入れることを難しく考えている。簡単に少しの時間で活用できる方法や教材を教師で共有していく必要がある。

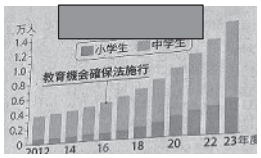
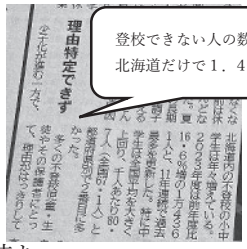
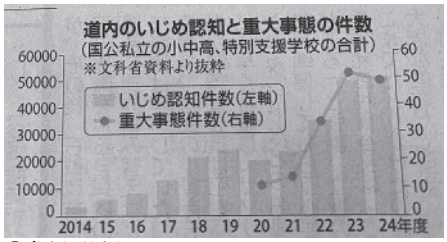
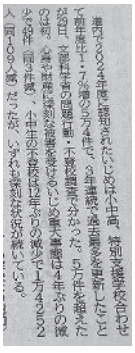
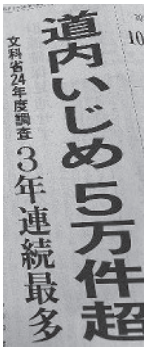
# 道徳『光輝の告白』

令和７年度12月２２日（月）６校時
５年１組　３０名
指導者　藤部　萌

【本時の目標】

・ぼくがこの状況を変える決心をした時の気持ちを考える活動を通して、自分の行為が意図していなくても、人によっては嫌な気持ちになることが分かり、差別や偏見を持たず相手の気持ちを想像して行動しようとする道徳的な判断力や心情を育てる。（実践意欲と態度）

【本時の展開】

| 子どもの学習活動 | 教師の関わり |
|---|---|
| ○新聞記事を読む。（北海道新聞２０２５年８月１８日）<br>  <br><br>何のグラフかな？<br>  <br>理由特定できず<br>登校できない人の数だ。北海道だけで１．４万人。<br>どうして登校できなくなったのだろう、、、。<br>体調、勉強、いじめなどが原因なのかな？<br>○「光輝の告白」を読む。<br>いじめだったのかな？　いじめではないと思う。<br>なぜぼくはこの状況を変えようと思ったのかな？<br>**光輝の気持ち**<br>迷った顔　いつもと違う表情<br>**褒めるつもりだったけど、、、**<br>気が乗らない　後には引けない。<br>**踊りたいわけじゃなかった**<br>我慢したほうが、、、　無視はされたくない。<br>**いじめではないけど**　**いじめになってしまうかも**<br>光輝が嫌がっているなら止めるべき！<br>**光輝を助けるために、、、**<br>みんなに「やめよう」と言う。　先生に相談する。<br>光輝が本当は嫌がっていることをみんなに伝える。<br>○新聞記事を読む。<br>（北海道新聞２０２５年１０月３０日）<br>  <br><br>  <br>道内で2024年度に認知されたいじめは小中高、特別支援学校合わせて前年度比1・7%増の5万4件で、3年連続で過去最多を更新したことが29日、文部科学省の問題行動・不登校調査で分かった。5万件を超えたのは初。心身や財産に深刻な被害を及ぼすいじめの重大事態は4年ぶりの減少で93件（同3件減）、小中生の不登校は12年ぶりの減少で1万4552人（同163人増）だった。いずれも深刻な状況が続いている。<br>  <br>道内いじめ5万件超<br>文科省24年度調査　3年連続最多<br>○振り返り<br>（いじめにつなげないために、自分はどんなことに気を付ける？） | 【子どもが自ら関わりたくなる教材化】<br>○導入で新聞に掲載されている不登校のデータを取り扱い、なぜ不登校になるのかを考えさせることで、今回のテーマのいじめについて意識を向ける。<br>○教材文の内容は人によってはいじめか否か分かれる内容。この内容がいじめか否かを考えさせることで子どもたちと一緒に課題を作る。<br>○状況を整理してから、ぼくが思い込んでいた光輝の気持ちと本当の光輝の気持ちをみんなで考える。<br>【学びをつなげる教師の関わり】<br>○全体交流では、一つの考えにも複数人で意見を付け加えたり、共感するところで意思表示をさせたりすることで考えを広げたり深めたりする。<br>○新聞に掲載されている道内のいじめのデータを扱うことで、自分たちの地域でもいじめがたくさんあることを知り、気を付けないと当たり前に起こることだということを実感させる。<br>○本時の学びを今後の生活につなげて考えられるよう振り返る。 |

【本時の評価】

意図しなくても自分が加害者になり得ること、見て見ぬふりをすることも加担していることになるということや「いじめ」をなくすためには、気付いたときに行動することが大切だということを考えている。（ワークシート・発言）

２０２５年度　NIE 実践報告

# メディアと共に、かわる Watashi

田中学園立命館慶祥小学校　教諭　北　風太

## １．はじめに

本校は、北海道札幌市豊平区に位置する全校児童２７８名の私立小学校である。「世界に挑戦する１２歳」を教育理念に掲げ、校地内の四季いろどり豊かな森を生かした生活科の学習や、会社運営体験を通じて、仲間を募り、社会問題に対して行動し、社会貢献をすることを目指す総合的な学習「LINK 学習」などを実践している。また、校地内には「こりっつ認定こども園」があり、交流活動も行っている。

## ２.児童の様子

MNI 教育は、インターネットだけではなく、人や紙もメディアと捉えることで、進んで社会参加する子どもを育てることを目的とした教科横断的な学習であるが、この中で、本校の子どもたちは、自ら表現するためにメディアを使う。ICT 活用の情報技術や情報リテラシーに加え、書籍や新聞などの活用を通して知識を深め、社会に向けて自らを表現する活動もまた、大切なメディアとしての学びと位置付けている。

今年度は、「メディアと共に、かわる Watashi」を研究テーマとし、以下のような仮説を立てることで、「子どもがもつ私らしさ≒Watashi」を育む学びを実践した。

①生成 AI を情報メディアの一部と捉え、活用することで、子どもは思考を広げることができる。

②他メディアを活用したり、仲間と交流したりすることで、思考を深めることができる。

③このようなメディアに働きかけていく活動を通して、自ら変革していく Watashi らしい学び方を身に付ける。

生成 AI をメディアとして扱う上で、児童に正しい情報源を得るための情報活用技術や情報を読み解く読解力・語彙力に加え、道徳心・倫理観を涵養する必要がある。併せて、教職員の教育専門性の研鑽もまた、求められると考えている。そこで、以下の点に留意している。

・情報の正確性の問題に対してのみ、子ども用の生成 AI を活用することができる。

・学年に応じて、生成 AI の取り扱いを規制する。

（１）児童各自が生成 AI を取り扱う活動ができるのは、読解力・漢字・情報モラルの観点から、５年生後期からとする。

（２）４年生は、限定的な環境での生成 AI 操作に留める。

・個人情報保護に関して、本校の生成 AI 使用ガイドラインの作成をする。

## ３.実践内容

本校の MNI 教育では、発達段階に応じて、メディアを「活用する」「向き合う」「表現につなげる」という学びを段階的に

構成している。

理科６年ではICTやARを用いて予想・資料選択・新聞による発信活動を行い、情報活用能力の深化を図った。

算数５年ではデータ可視化ツールを用いて比例ではない数量関係を視覚化し、統計的な問題解決につながる見方を育てた。

社会４年では廣井勇の防波堤づくりを基に問題づくりを行い、AIの評価や助言により理解と定着を高めた。

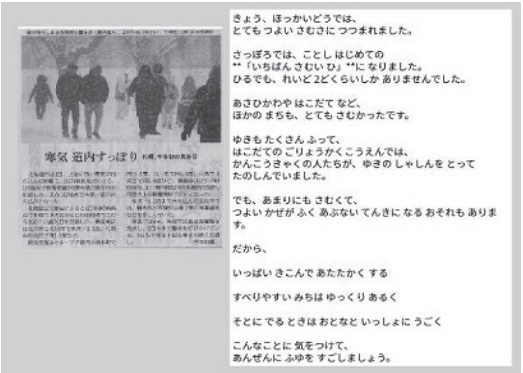
道徳３年では生成AIとの関わり方について話し合い、主体的な判断態度を育成した。

国語１年ではAIイラストや振り返り機能を活用し、安心して表現に向かう学習を行った。

## ４.具体的な実践例

単元名：きせつのことば「冬がいっぱい」（光村図書　国語２年）

本単元では、身近な冬らしいものを見つけて感想をカードに書く活動を通し、自分の感動の基となる体験を振り返って言葉にしたり、伝えたいことを明確にしながら必要な事柄を集めたり確かめたりすることができるようになることを目指している。




北海道新聞　１２月５日

### （１）新聞の記事を活用した導入

単元の導入では、新聞記事から冬らしさについて想像する活動を行った。「すっぽり」「ドカ雪」など、新聞記事にも様子を表す言葉が用いられていることを知るとともに、「すっぽりと目が見えなくなるくらいの雪かな。」「大きな雪が崩れて、埋まらないように気をつけてだと思うよ。」などと、記事が伝える内容に興味を引く手立てとなった。また、新聞記事の内容を小学校２年生でも理解できるようにリライトする際に、教師がAIを活用している。

子どもたちは、様子を表す言葉や写真から記事が伝えたい内容を予想し、リライトした記事で答え合わせをすることで、語彙を増やすことに役立てることができた。

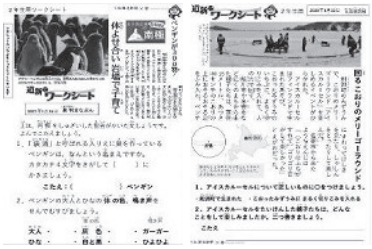
### （２）新聞記事風カードの作成

導入で新聞記事を活用したことで、「感想を新聞記事風にカードに書きたい」という子どもたちの意欲喚起ができた。

札幌市内全域からバスや公共交通機関を利用して通学してくる本校の２年生は、凍結したつるつる路面などの「冬の困ったこと」や、ドカ雪のおかげで、グラウンドに大きな雪だるまを作ることができた「冬のよさ」など、様々な「冬らしさ」を想像し、カードに書きたい内容を明確にすることができた。

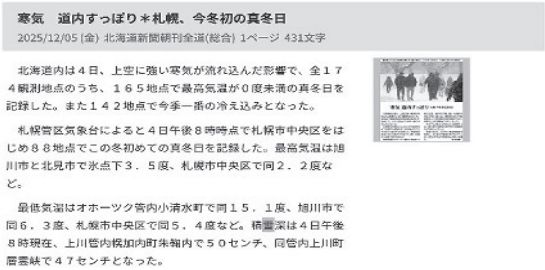
また、考えた文章を読み合いながら書く過程で、様子を表す言葉を用いることは、自分が伝えたい「冬らしさ」の経験や体験

から得た感動が伝わりやすくなる効果にも気づくことができた。




### （３）目的意識を明確にした道新ワークシートの活用

完成した新聞記事風の感想カードを交流し終えた後に、「まなbell」の新聞記事データベースを活用して記事を検索する活動や、意図をもってワークシートに取り組む活動を位置付けた。


寒気　道内すっぽり＊札幌、今冬初の真冬日
2025/12/05 (金) 北海道新聞朝刊全道(総合) 1ページ 431文字

北海道内は４日、上空に強い寒気が流れ込んだ影響で、全１７４観測地点のうち、１６５地点で最高気温が０度未満の真冬日を記録した。また１４２地点で今季一番の冷え込みとなった。

札幌管区気象台によると４日午後８時時点で札幌市中央区をはじめ８８地点でこの冬初めての真冬日を記録した。最高気温は旭川市と北見市で氷点下３．５度、札幌市中央区で同２．２度など。

最低気温はオホーツク管内小清水町で同１５．１度、旭川市で同６．３度、札幌市中央区で同５．４度など。積雪深は４日午後８時現在、上川管内幌加内町朱鞠内で５０センチ、同管内上川町層雲峡で４７センチとなった。

上記データベースの活用の際に、膨大な記事の中から擬音語や擬態語、比喩表現などの「様子を表す言葉」が目に留まったものを児童が選択する活動や、複数あるワークシートの中から様子を表す言葉が用いられたものに取り組む活動となるよう、児童が課題を選択する機会を取り入れた。そうすることで、「様子を表す言葉」の語彙を豊かにするだけでなく、その記事のテキストを通し、記者の方と児童が繋がることで、読者に伝えたかった内容を受け止めることができた。

【児童の感想カード文章例】

□ 雪が２０センチくらいつもると、まるで土のようになります。雪はとてもやわらかいから、色んな遊びができるようになりました。しかし、最高気温が０°くらいなので、さむいです。

□ 冬になって、みんな寒いから、車を使うようになりました。すると、車がスリップしたり、渋滞で混んだりして、道路がぎゅうぎゅうになったことが大変でした。あと、地面とかもつるつるで、滑りました。『地面　つるつる　道路　ぎゅうぎゅう』冬の悩みとは、このことだと思いました。

## ５．成果と課題

### （１）児童の語彙力が豊かに

「きせつのことば『秋がいっぱい』」では、今回の「きせつのことば『冬がいっぱい』（本単元）」と同様に、児童が感じた秋らしさについて、印象に残ったことを感想カードに書く活動を行っている。そこで、『秋がいっぱい』と『冬がいっぱい』の二つの感想カードの文章の中で、文章中に用いられた様子を表す言葉（①擬音語や擬態語②比喩や隠喩）の数を比較した所、以下のような結果となった。

「きせつのことば『秋がいっぱい』」

□ 擬音語や擬態語　７３％
□ 比喩や隠喩　　３５％

「きせつのことば『冬がいっぱい』」

□ 擬音語や擬態語　８８％
□ 比喩や隠喩　　５４％

このことから、新聞記事を活用した導入を通し、様子を表す言葉が新聞記事でも用いられることを知る活動の有無と、文章を

書く際に、児童自らが様子を表す言葉を使う目的意識をもつことに相関関係があったと考える。雪が積もる様子や足元が滑る様子を連想し、自分なりの様子を表す言葉を考えるきっかけ作りとして、効果的であった。

【児童の振り返りより】

□ 私は、新聞記事を読んで、大事なところを見つけました。それは、「どこで、どうなっているから、どうすればいいか」について、様子を表す言葉（すっぽりなど）が使われている所です。様子を表す言葉が書かれている所は、大事なのかなと思いました。私が新聞を書く時には、最初の新聞のように、大事な所に様子を表す言葉を使いたいです。また、絵や写真も真似してみたいです。

□ 新聞って色々なことを伝えているけれど、タイトルと記事では、自分が考えたこが変わることがあるんです。例えば、「すっぽり」は、初めは、雪に「すっぽり」足がはまるだと思っていました。ですが、記事を読むと、本当は雪に「すっぽりと」包まれるという意味でした。あと、新聞は、一度見ると、１０分くらいは目が離せなくなるので、人を引きつける力があって、すごいなと思いました。

□ 僕は、AI とみんなのアドバイスのおかげで上手に書けました。考えた文章を読み合う場面で、AI（児童が作成した文章について、表現を磨くヒントを提示する補助拡張のツールとして教師が活用して提示）に、「冬の楽しみと冬の悩みを比べてみるといいです。」とアドバイスされたので、その通りにやってみました。そうすると、とても読みやすくよりよくなったと友達に言われたので、アドバイスを聞いてよかったと思いました。

### （２）指導事項を踏まえた効果的な新聞活用へ

本実践のように、新聞の本物の言葉に触れ、自分の言葉の言い換えを考えながら表現力を養う実践の他、新聞の正確な情報を活用して読解や要約を行う実践や、自分の体験の事実と感動を新聞にまとめることで創造力を養う実践で、効果的な新聞の活用の仕方ができてきた。

一方で、新聞の社会性を生かして、視点を変更しながら多角的な思考ができるような実践や、新聞から現実課題を知り、探究していく実践など、各教科の指導事項を踏まえた効果的な新聞活用の実践は、まだまだ少ない。

その上で、思考支援や表現拡張という AI の特徴を効果的に組み合わせることは、新聞を活用した情報活用の力を一層伸ばすことができるのではないか。

## ６. おわりに

本研究は、メディア活用を通して子どもが「正しく知る」ことに留まらず、「自分はどう感じ、どう伝えたいのか」という Watashi の変容を伴う学びへとつながる可能性を示した。

新聞記事に触れることで、子どもは社会と接点を持ち、生成 AI や仲間との対話を通して思考を磨いていく。その積み重ねが、自分の言葉で社会と関わろうとする姿勢を育てる。

本校が目指す「世界に挑戦する１２歳」に向けて、今後も〈人〉と〈人〉をつなぐメディアの価値を再定義し続けたい。

２０２５年度　NIE　実践報告

# 実践テーマ　学校図書館での新聞の活用

旭川市立永山小学校　　教諭　澤井　俊博
学校司書　中島　　環

## １　はじめに

本校は、明治３１年に開校し、120 年以上の歴史を誇る伝統ある小学校である。『永山』の地名は「永山武四郎」の姓による。開拓耳朶の校舎が永山屯田本部跡地に建てられたこともあり、地名がそのまま校名となっている。児童数は 522 名（令和 7 年 4 月）で旭川市内では大規模校ではあるが、児童数は年々減っている。

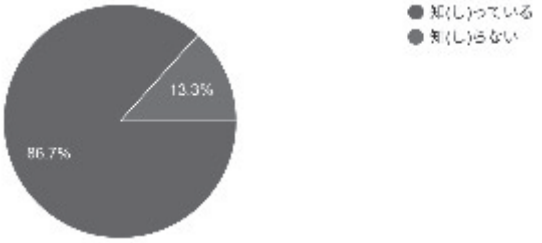
## ２　アンケートの実施

今年度は、図書館で新聞を活用することを実践する計画であったため、図書館を利用する児童のみの実態になってしまうことから、全校児童に簡単なアンケート調査をした。教員にも同時期に実施した。児童は 474 名、教員 31 名から回答を得た。（回答率児童 90%、教員・80%支援補助員含む）

回答から、新聞がどのようなものか知らない児童が 13%いる。6 割の家庭で新聞を購読しており、家族が新聞を読んでいる姿を認識している。新聞を読んだことがあると答えた児童が購読している割合とほぼ同じであったことから、身近にあることが新聞を読むきっかけとなることは間違いない。新聞を購読する家庭が減るなかで、学校図書館で新聞から情報を読み取る経験を重ねることは意義のあることだ。教員の回答では半数が新聞の購読をしていた。購読していない理由は、情報を他の手段（テレビ、携帯）で得られている。購読料が高い。などがあげられていた。新聞を読む暇がない。購読料が高い。が多かった。しかし、9 割の教員が新聞は必要なメディアであると回答している。その理由にはネットの情報の不確かさ、情報の偏りがあげられていた。購読の理由では、様々な情報を得られること。社説などで新聞社の意見を聞くことができる。（文責がはっきりしている）地方の話題が貴重な情報源になっているなどがあげられていた。新聞は必要だと感じるが、新聞以外の手段でも情報が簡単に手に入る、時代が変わっている。などの意見もあった。

児童アンケートより

新聞はどのようなものかしっていますか？




家で新聞をとっていますか？

職員アンケートより

新聞を購読していますか？

## ３　図書館での取り組み例

新聞を子どもに見せると、「文字が多すぎて読む気がしない」と言われることがある。
読書が嫌いな子どもにとっては、一般紙をそのまま置いておくだけでは、興味を持ってもらうことは難しい。まず、子どもたちが見てくれるような記事をピックアップすることからはじめた。

【赤いランドセル男の子はだめ？】

北海道新聞　2025 年 4 月 18 日（金）掲載

ランドセルの色選びに、無意識の偏見があるという記事を関連する本と展示した。
実際に何色のランドセルを使っているのかも聞いた。女子は定番の赤、ピンクの他、水色、白、紫、紺など男子に比べて選ぶ色の幅が広い。しかし、男子がピンクのランドセルはいなかった。記事のグラフと似た結果であることが、記事を読むきっかけになり、関連した本を借りることにつながった。

【漂う「幽霊漁具ゴーストギア」
海のリスクに】

朝日新聞 2025 年 5 月 16 日（金）掲載

ゴミの問題、環境の問題は学習テーマになっている。国語の教科書にも本が掲載されている。生き物に網がからんでしまっている写真。ゴミだらけの海。どうしてそうなったのかを知ることが、考えるきっかけになる。一緒においた本も写真が多く掲載されている。文字よりも絵や写真は、文章を読む手掛かりになる。写真が大きく掲載されている記事は、子どもたちが立ち止まる率が高い。

【こども新聞】

わかりやすい言葉で書かれている子ども向けの新聞をもっと読んでほしいと思っている。新聞を気軽に閲覧できるように、こども新聞が来る月には机に広げて展示した。短い休み時間では、借りたい本を選ぶことを目的にしている児童がほとんどで、記事を読むことになかなかつながらない現状がある。文章を読むのが好きな子どもは、時々新聞も読んでいるが、数人にのみであった。知ってほしい内容の記事は、補足の POP をつけるなどしているが、もっと興味を持つような仕掛けが必要だと考えている。

【戦後八十年】

平和を考える本や、戦争をテーマにした本は数多くある。「戦争日記」「いえ」「しあわせなときの地図」など本校にも、多数の蔵書がある。今年は戦後80年という節目の年であることから、戦争の記憶をのこす記事が多く掲載されていた。資料として、ファイルにまとめた。今後、新聞をスクラップした後の活用が課題だ。先生方への周知も必要だ。

左　朝日新聞 2025 年 8 月 21 日

右　朝日新聞 2025 年 8 月 3 日

【地域のこと】

北海道の話題の記事も、図書館の展示にはかかせない。今年度は、外来生物のこと、農産品のこと、博物館のことなどを活用した。その中で『夕張石炭博物館』の記事は１つの記事から複数のジャンルの本を一緒に展示することにつながった。炭鉱の歴史は日本の近代化の歴史でもある。環境問題の本も関連する。また、石炭は化石であることも知ることで、自然科学の分野への関心につながると考えた。さらに、実物の触れる石炭を用意したことで子どもたちに興味を持たせることができた。

朝日新聞 2025 年 8 月 27 日

【新聞を使った遊び】休み時間

新聞記事でわからない言葉を、広辞苑で調べることに挑戦した。最初は切り抜き記事の中から難しい言葉をマーカーでチェックしたものを渡した。その後、切り抜き記事だけ用意し、自分が知りたい言葉、意味のわからない言葉を選んで辞書を引いてもらった。これは、偶然広辞苑早引きをして遊んでいた子どもたちに、言葉のお題をだすことから始まった遊びだった。新聞記事の選び方で、語彙も増え、短いコラムなどは、読み切っているようだった。

【恐竜好きはいつの時代も】

古生物の中でも、恐竜は小学生に人気だ。北海道大学の小林快次教授が、モンゴル・ゴビ砂漠で調査をし、ティラノサウルスの新種を発見したという記事を展示し、恐竜の本をおいた。恐竜好きの子どもはそのニュースを知っており、興味を示していた。子どもたちの興味や好みは一人一人違う。展示内容は様々なジャンルで考えることが必要だ。

毎日新聞　2025 年 6 月 12 日（木）

【環境問題と災害の記憶】

環境問題と自然災害は合わせて学びたいことだと考えている。環境の悪化がもたらす異常気象、自然災害も多くなっている。温暖化で集中的に雪が降るニュースもよく聞かれるようになってきた。本で知ることに加えて、新聞記事で新しい情報を得ることも子どもたちに必要な学びだと考えている。グラフなど統計資料が掲載されている記事は小学五年生国語統計資料の読み方でも活用した。

日本経済新聞　2025 年 1 月 19 日

「記憶や思い旭川で「風化させぬ」という記事が、北海道新聞 2025 年 3 月 11 日に掲載されていた。記事の中で「震災を風化させない。そのために自分の経験や記憶を伝え続けたい。」の文があった。旭川に自主避難せざるをえなかった女性の言葉だ。この記事はぜひ子どもたちに読んでほしいと思った。東日本震災の記事と共に紹介した。今回は、図書館での紹介だったが、もっと多くの子どもに見てもらうために、高学年の教室だけでも巡回を考えたい。

北海道新聞

2025 年 3 月 11 日

北海道新聞　2025 年 3 月 11 日

北海道新聞

2025 年 3 月 11 日

## ４　おわりに

図書館で新聞を活用することを考えたとき、私自身が新聞を細読していた。新聞の記事は世界の状況、日本の出来事など、最新の情報もあれば、地域の話題、時間をかけて取材されたものなどさまざまであることを改めて認識できた。学校図書館に新聞があり、誰でも自由に読めることは、非常に有意義であると考える。世の中を知り世界とつながるツールとして、子どもたちの身近なものにできよう考えていきたい。知識だけではなく、新聞にはたくさんの人の思いも詰まっている。読み取って自分と比較したり、重ねたりすることもある。心に響くストーリーも子どもたちに感じてほしいことのひとつだ。

2025年度　NIE実践報告

# NIEが学校にもたらしたもの

岩見沢市立中央小学校　主幹教諭　冨樫　いずみ

## 1　はじめに

今年度、岩見沢市立中央小学校はNIE実践指定校7年目となった。今年度も中央小では、333名の全校児童に対するNIEの取組を全教職員総意のもと進めることができた。本校は長年実践指定校としてお世話になってきたが、今年度で一旦区切りをつけることとなり、この7年間で得た多くの学びや成果をレポートとしてまとめたい。

本校は実践校となった初年度から一貫して「全校で取り組むこと」を掲げてきた。学校全体として取り組むことで、より多くの子ども達を変容させることができると考えたからである。NIEを知らない教職員もいる中、「まずはやってみよう」からスタートし、幸運にも教職員が価値を実感して長年取り組むことが出来た。また、この取り組みを根付かせるために、次の2点をポイントとして取組を推進してきた。

1　教育課程に位置付ける
～『学力向上』という共通目標を持ち現在の指導事項とのリンクを明確にする
2　校務分掌に位置付ける
～個の取組から学校の取組へ、年数をかけて学校の文化に定着させる

実際に宿題や朝自習、国語や社会などで積極的に活用していくことで国語学力のポイントが伸び、記述回答に対する粘り強さが表れてきた。また公務分掌の研修部・学力向上係に位置付けることで、学校の中にNIEや校内新聞展示会が根付くことになった。

## 2　定着した本校の実践

7年間の中で、全教職員が子どもの実態に応じて創意工夫をして多くの実践を行ってきた。その中でも数年にわたり定着して取り組めたものを3点にまとめた。

①　全校新聞展示会

コロナ禍で他者との交流がもちにくい中、「年間で1枚個人新聞を作り、一斉に展示を行う」取組を毎年2月に始め、これは6年間続いている。

友達や異学年の作品を見て、付箋に褒めるコメントを書いて貼る、学校外の方に来ていただき（中学校の先生・新聞販売所の方・新聞社の方等）最優秀作品を学年1作品選んでもらう、といった活動を通じて、他者とのつながりを再確認することができた。

また、新聞を書く経験が文章力や構成力、要約力といった力を育んでいる。

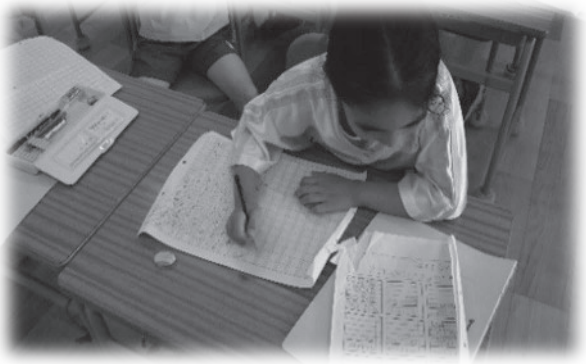
②　朝自習や家庭学習

特に高学年で、ワークシートの取組やコラムの書き写しを朝自習や家庭学習で継続的に取り組んだ。書く力や思考力を伸ばした。

③　外部との連携

NIE セミナーの会場校としての授業(2 回)、6 年生全員による空知こども新聞のこども記者の取組、5 年生による北海道新聞社訪問等、外部の方と関わって学びを深める機会をいただいた。

また前述の全校新聞展示会では外部の方に作品の評価をいただいているが、じっくり見て審査してくださる外部の方々のお褒めの言葉を、子ども達とも共有している。学校外の方と関わる機会が、子ども達の自己肯定感や幅広い経験を支えてもらっている。



## 3　今年度の各学年の取組

以下は今年度実際に行った取組と NIE の成果等について記述したものである。

1 年生

＜取り組み内容＞

・8 月国語「しらせたいことをかこう」生活「きせつとなかよし　はる　なつ」（グループ）※道新新聞コンテスト応募。

・11 月国語「しらせたいな、いきもののひみつ」生活「なかよくなろうね小さなともだち」（個人）

・１月国語「はじめてしった学校のこと」生活「もうすぐ 2 年生」（グループ）

＜成果＞

3 学期に行われる「校内新聞展示会」に向けて、まずは、8 月にグループで作成した。11 月には、A3 の紙に枠を印刷し、新聞には、見出しや記事、算数の学習を生かしてグラフを載せると読み手にわかりやすくなるなどの経験ができた。知らせたいことをどのように伝えたらいいか楽しみながら新聞を作ることが出来た。

＜課題＞

新聞を書く作業は、1 年生にとっては個人差が大きく、時数の確保が必須で、教科横断的に取り組む必要がある。

新聞をとっていない家庭が多くなっていることで、新聞に馴染みがない子も多い。発達段階的に新聞を読むことも難しいため、定期的に配付される小学生用の新聞を読む時間を確保し、新聞の読み方を伝える必要がある。

2 年生

＜取り組み内容＞

６月　生活科　まちが大すきたんけんたい「給食しんぶんづくり」

９月　生活科　めざせ生きものはかせ国語「生き物クイズ」でしらせよう　「どうぶつ新聞づくり」

＜成果＞

６月、岩見沢学校給食共同調理所に見学に行くにあたって、質問したいことを事前に考えた。見学当日は質問の答えのほか、説明してもらって学んだことを壁新聞にしてまとめた。

９月　札幌円山動物園に見学に行き、調べたい動物を決めた。学校で国語の「生き物クイズ」で図書館の図鑑などを使って調べた経験を活かして図鑑で詳しく調べて壁新聞にまとめた。

＜課題＞
昨年度も同じ取り組みをしたが、反省を生かして、給食新聞づくりでは質問を事前にワークシートに書いて準備していたので、メモを取るのが苦手な子も、見学後の書くことをグループ補完しあってメモを作ることができた。そのため何を書いていいかわからない子が少なくなった。
どうぶつ新聞づくりでも見学当日は写真だけとって、学校で調べなおす形にしたことと、事前に国語の生き物クイズで調べ学習をした経験が生きて、昨年度より比較的子ども達がスムーズに活動できた。課題としては、やはり書くことが苦手な子には、小さなマスでの壁新聞はハードルが高かったので、来年度は用紙を工夫する必要がある。

3年生

＜取り組み内容＞
10月：1組→社会　スーパー新聞（グループ）
２組→共友　商店街新聞（グループ）
11月：共友　見学旅行新聞づくり（個人）
＜成果＞
11月には、班ごとに社会科見学でスーパーマーケットや商店街に行って学んだことをしおりを見ながら新聞に書いた。班での新聞では、班ごとに割り付けを考え、分担して記事を書いた。苦手な子は、班で協力して一緒に考えたりアイデアを出し合ったりして取り組むことができていた。
11月には、見学旅行で行った青少年科学館・防災センターでの学びを活かし、個人での新聞づくりに取り組んだ。班での新聞を作ったあとだったので、どんな記事を書いたらよいかアイデアや割り付けの作業は取り組みやすい様子だった。下書きは、紙かロイロか選択して取り組んだ。
＜課題＞
・マスが小さく用紙が大きかったので苦手な子は一人で取り組むのが難しかった。支援が必要な子には、少し大きめのマスを描いたり、文字の目安に〇を書いたりして支援する必要があった。
・班での新聞に比べて取り組み時間や内容に個人差があった。
・３年生は見学旅行や社会科見学が立て続けにあったので、新聞をつくる時期が少しあとになってしまった。

4年生

＜取り組み内容＞
・7月　作ろう学級新聞（一斉）
・7月　総合　岩見沢の歴史見学新聞（個人）
・9月　社会・国語・総合　見学旅行新聞（グループ）
＜成果＞
・7月はロイロノートスクールを活用して下書きを作成し、それを紙の新聞に書く形で作った。最初から手書きにするよりも文を書き始めやすそうにしている児童がいた。
・9月は4人グループで作業の分担を話し合いながら進めさせた。書くのが苦手な児童も周りのサポートを受けたり声をかけられたりしながら取り組んでいた
・学習発表会時期の取り組みをグループにしたことで、時間的な余裕が生まれたのではないか。
＜課題＞
・前年度の良い新聞があるとモデルとなってよかったと思う。
・ロイロノートスクールによる下書きは苦手な児童への下支えとなったが、それでも取り組みに対する個人差が大きかった。

5年生

＜取り組み内容＞

・５月　国語「新聞を読もう」（一斉）

・７月　総合的な学習の時間「北海道新聞社見学」（一斉）「見学旅行まとめ新聞づくり」（個人）

・１月　社会「新聞社のはたらき」（一斉）

＜成果＞

・国語「新聞を読もう」は、教科書に沿って内容指導を行い、新聞について興味関心を持つ第一歩となった。

・総合的な学習の時間「見学旅行」では、新聞社の見学を行い、カメラマンの仕事についてや新聞社の歴史、記事の作成や見出しの検討場面、紙面編集や校正作業などを説明してもらい、充実した学習となった。

・総合的な学習の時間「見学旅行まとめ新聞づくり」は、見学旅行の最初から「新聞づくりをする」ことを言語活動の柱として取り組んだ。それまで学習した新聞の構成を理解して新聞作りを行うことができた。また、作った新聞を「新聞コンテスト」に出すという目的を持つことで、意欲的に取り組むことが出来た。

＜課題＞

・国語で新聞を学習する段階で「新聞やだ！」「大変だから書きたくない！」という声が少なからずあった。新聞について楽しく学習するうちに苦手意識も少し薄れた感があったが、４年生までの新聞作りの中で「書くのが大変」「書き終わるまで時間がかかる」というイメージがついてしまっているのが本末転倒だと感じた。せっかくの取り組みなので、自分に合わせた形で書いたり達成感が感じられたりしたらもっと子どもたちに意義を感じてもらえるのではないか。

6年生

＜取り組み内容＞

・５月グラフの読み取り

・６月～７月　炭鉄港新聞作り～修学旅行を終えて

＜成果＞

・「アイスは暑いほどおいしい」では、グラフを読み取り、気温と、アイスがおいしく感じる関係を考えた。また、そのグラフの有効性を理解し、新聞に生かすためのグラフを作成した。・炭鉄港では自分が特に強く興味を持った部分についてグループごとに調べた。同じ興味を持つグループが集まることによって、調べ学習、記事の作成を意欲的にすすめることができた。

＜課題＞

最終的には、個（ひとり）での新聞作成を行いたかったが、新聞を作成するための情報量が多く、グループでの学習となった。児童ひとりひとりが、情報を収集、分析、表現していける力が必要と感じた。

## ４　おわりに

実践校として長期間活動させていただく中で、学校の中で確実にNIEの取組を定着させられたことは大きな成果と捉える。一方、職員が毎年入れ替わりスタート時には創意工夫と情熱を持った取組だったものが、捉え方と取組に差が生まれてきてしまったことも否めない。区切りをつけることで、全校としてNIEへの向き合い方を新たにし、改めて教育効果の可能性を模索し、全教職員で共有をしながら学校全体として創意工夫し実践を重ねていきたい。

２０２５年度　ＮＩＥ実践報告

# 実践テーマ
# 新聞記事をもとに、社会的事象への関心を高めよう

旭川市立春光台中学校　教諭　庭瀬　奈穂美

## １. はじめに

本校３学年生徒は、８７名在籍である。年度当初に、社会科の学習に関連するアンケート調査をしている。その調査項目の１つに、新聞を購読していますか？という質問を設定している。この問いに対する返答は、購読している家庭は、約 35 %であった。このアンケートは、25 年ほど前から、毎年継続しているが、新聞購読をしている家庭が減少し続けていることがわかる。また、社会で起きている出来事について、どのようにして知りますか？という質問も設置している。これに対する返答は、最も多かったものが、ネットニュースであった。

このような状況を踏まえた上で、社会的事象に関心をもつこと、興味をもった社会的事象について、客観的に複数の視点から理解する資質・能力を身に付けさせることが喫緊の課題であり、この課題の改善のために、新聞を活用することが有効であると考えた。このことが、学習指導要領で求められている「公民的資質の基礎」を涵養することに繋がると考え、実践を行った。

## ２．実践の概要

### （１）提供された新聞の閲覧について

３学年生徒の教室がある学年ホールに長机を設置し、原則として日付順に並べ、休み時間などに、生徒が自由に閲覧できるようにした。また、授業内容と関連のある記事や、地域の話題に触れているものは、見やすい場所に設置したり、授業時に教室に持ち込んで紹介したりした。特に、夏の甲子園に旭川志峯高校が出場した際には、本校卒業生も紙面で紹介されていたことから、掲示板に張り出し、新聞に親しむことを促すなど、「新聞」に対する生徒達の心理的な障壁を下げる工夫した。

また、読解力に課題を抱える生徒も少なからずいることから、小学生新聞を提供していただいたことは、非常に有効であった。文章が平易で読みやすいこと、イラストや写真が豊富に使用されていることから、生徒も親しみやすく、理解しやすかった。

### （２）学習活動としての位置付け

本実践は、１年間の公民の学習を中心に位置づけており、夏休み中の活動も含めて、大きく分けて、３部構成としている。具体的には、以下の通りである。

（３）実践の具体

①単元名「私たちの暮らしと現代社会」の学習での調べ学習（３時間）

この単元は、公民的分野の最初の単元である。生徒には、まず、「現代社会を一言で表すと?」と発問し、直感的に浮かぶ、語句や短文で答えさせた。正解・不正解ではなく、一人一人が、どのような視点をもっているかによって、多様な言葉で表現できることを説明したうえで、取り組ませた。

これを踏まえて、自分が現代社会の特徴を表すと考えた「語句」が、新聞では使用されているか、どのような場面で紹介されているかを調査する学習とした。膨大な量の新聞記事から該当する記事を探し出すことは難しいので、新聞社のホームページから検索し、記事掲載の月日を絞り込んだうえで、記事を探す取組を行った。また、どうしても記事そのものが探せない生徒については、新聞社のホームページ上の記事紹介も使用許可とした。

ここで探し出した記事を読解し、端的にどのような内容が記載されているのかを「スライド」にまとめさせた。ここでは、後の学習（新聞スクラップ・レポート作成）につなげるために、調べ方・まとめ方を身に付けさせたいとの意図があったため、スライドの分量は２枚までとし、学習方法の習得に重点をおいた。

生徒は、新聞記事を検索するところまでは、順調に学習を進める生徒が多かったが、実際に新聞記事を「読む」という段階で抵抗感が見られた。文字が小さい・文章が長い、多い・意味のわからない言葉が使われている。という声が教室の各所から聞こえた。インターネット上で情報を得ることが多い中学生にとって、若干、ハードルの高い学習であった。

②新聞スクラップづくり

授業の中に位置づけたいところであるが、時数の問題もあり、授業の中では、１．５時間程度、時間を確保し、その後は、夏休み中に実施している学習会を活用して、新聞スクラップに取り組んだ。この学年の生徒は、１学年・２学年の時も、新聞スクラップの経験はある。自分の興味がある記事を集めて、見やすく紹介するだけだった１学年次より少しずつレベルアップし、３学年の今回は、テーマを設定して、テーマに基づく記事をスクラップした。①で選択した記事を活用することで、記事の検索に時間をかけすぎないようにし、生徒の負担を少しでも減少させる工夫をした。また、本校には、旭川市立大学の学生が定期的に来校し、夏休みや放課後の学習会をサポートしてくれているため、大学生と一緒に記事を選ぶ姿も見られた。

実際に生徒が作成した新聞スクラップの作品は以下の通りである。

生徒が作成したスクラップは、道北新聞スクラップコンクールに応募した。コンクールへの応募も生徒への意欲を高めることには効果的であったと考えている。新聞スクラップの作品をつくるに当たって、自分のテーマの記事を探している途中で、自分の友人がテーマとしている記事が目にとまり、記事があることを友人に伝える姿が見られたり、自分が探しているテーマではない記事が目にとまり、その場で読み進める姿も見られた。

③「終章　持続可能な未来と私たち」のレポート作成

①②の取組を土台として、公民の教科書の最後の単元　終章「持続可能な未来と私たち」につなげている。この単元では、自分が考える「現代社会の課題」は何か？それに対して、自分はどのような提案をするかについて、レポートを作成中である。レポート作成に当たっては、根拠を明確にすることを重点においている。もちろん、インターネット上の情報の使用も問題ないが、必ず信頼できる情報をもとに、レポートを作成する取組を実施中である。

## 3. 成果と課題

（1）成果

①学年の廊下に新聞を設置することで、いつでも新聞を手に取ることができる環境が設定できた。選挙の時期には、新聞記事を見ながら、選挙の候補者について会話する姿も見られるなど、ネットニュースで見たことや何となく聞いて知っていることを新聞で確認し、会話する姿が見られた。

②新聞を手にとり、記事を読み、現代社会の状況を客観的に把握することにつなげられた。また、社会的事象に対する興味・関心の向上につながったと考えられる。

（2）課題

①分量の多い文章を読むことに抵抗があったり、意味のわからない語句が記載されている場合に、記事を読むことを断念してしまったりする例も見られた。

②中学生にとっては、インターネットに触れている時間が長く、慣れていることや手軽さもあり、新聞がめんどうくさいと感じる生徒も見られた。

これらを踏まえて、今後、記事の検索のハードルを下げるためにも、可能であれば、「まなべる」が使用できると、可能性が広がると考えられる。また、自分が興味をもったことだけをピンポイントで調査するだけでなく、新聞がもつ一覧性という特徴を活用し、生徒たちが視野を広げることにつなげていきたいと考える。このことは、中学社会科で求められている多面的・多角的に社会的事象を捉えることの第一歩になると考える。

次年度は、じっくりと考え、どのような意図で記載された記事なのかを考えさせたり、同一の事象を扱った複数の新聞社の記事を読み比べたり、インターネット上の記載のされ方と比較するといった実践に取り組み、多様な視点から社会的事象を把握する力を育てていきたい。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 実践指定校の取組を校内外へ広げるための実践

新ひだか町立三石中学校　教諭　川上　知子

## １　はじめに

本校は、北海道の太平洋に面した日高管内中部にある。人口約２万人の町で、軽種馬業や漁業を基幹産業としている。牧場に囲まれ、太平洋を一望できる校舎で生徒は生活している。現在の生徒数は７５名。

今年度、ＮＩＥ実践指定校１年目でＮＩＥの良さや実践手法を校内で共有し、少しずつ根付き始めた実践の一部を紹介する。

## ２　生徒の様子

校長講話の時や外部講師が全校生徒へ第一声、挨拶をした時に大きな声で挨拶できる集団である。全校合唱を披露した際は、保護者のみならず教職員からも感動したとの感想があがる。

新聞購読家庭は全体の約４割で、学校に来て新聞を読む機会が増えたと答えた生徒が約６割にのぼった。

全国学力学習状況調査結果分析から、正しい漢字や言葉を選び、使うことを得意としているが、読み手の立場に立って根拠を明確にして文章を整えることや、自分の考えをわかりやすく明確に伝える工夫をすることを苦手としている。

## ３　実践の内容

### ①　気になった新記事の紹介（社会科）

授業者の「今日の新聞紹介は〇〇さ～ん！」の発声と生徒の拍手から授業はスタートする。拍手が響く教室は活気づき、生徒たちは仲間がどんな記事を紹介するのか楽しみにしている。

**生徒が新聞記事を紹介している**

その日の紹介者は、事前に記事を選んで要約し、読めない漢字をチェックするなど読む練習をして、「なぜ興味を持ったのか」「この記事を読んだ感想」についてのコメント原稿を作る準備を自主的にしている。発表は毎時間、名簿順で行い、記事を実物投影機で写し、全員に見せながら行う。

紹介される内容はトップ記事や事件・事故、裁判の判決、スポーツ、地元の話題など様々。周りの反応も様々で、笑いが起こる日、「そう

だそうだ！」と共感が起こる日、真剣に考えようとする表情を見せる日もある。紹介が終わると全員で感想を交流している。生徒にとって「選択する楽しさ」や「自分なりに考えをもつ」良さがあり、現代社会へ関心をもつようになっている様子が見られる。

**紹介された新聞記事の内容について感想を交流する**

**生徒が作成した原稿（レポート）を廊下に掲示**

## ②どの生徒も新聞に親しめる環境整備

毎朝、閲覧台にセットしてくださる校務補さんのおかげで、誰でも玄関で新聞を閲覧できるようになっている。

冬、玄関が冷えるのが難点であるが、ここが本校にとってのベストポジションである。新聞が玄関にあることをどの生徒もわかっているし、授業で使う新聞記事を探す３年生の姿や、その姿を見ている下級生たちにとってお互いにいい刺激になっているようである。

新聞が身近にある日常では、色んな人が新聞に触れ、ページをめくる音が聞こえる。通りすがりに目に入った記事を読むため足が止まる生徒。興味を惹かれた広告記事を見つめる生徒。授業の合間にほっと一息、じっくり記事を読む先生。本校の新聞閲覧台前では色々な新聞模様が見られる。

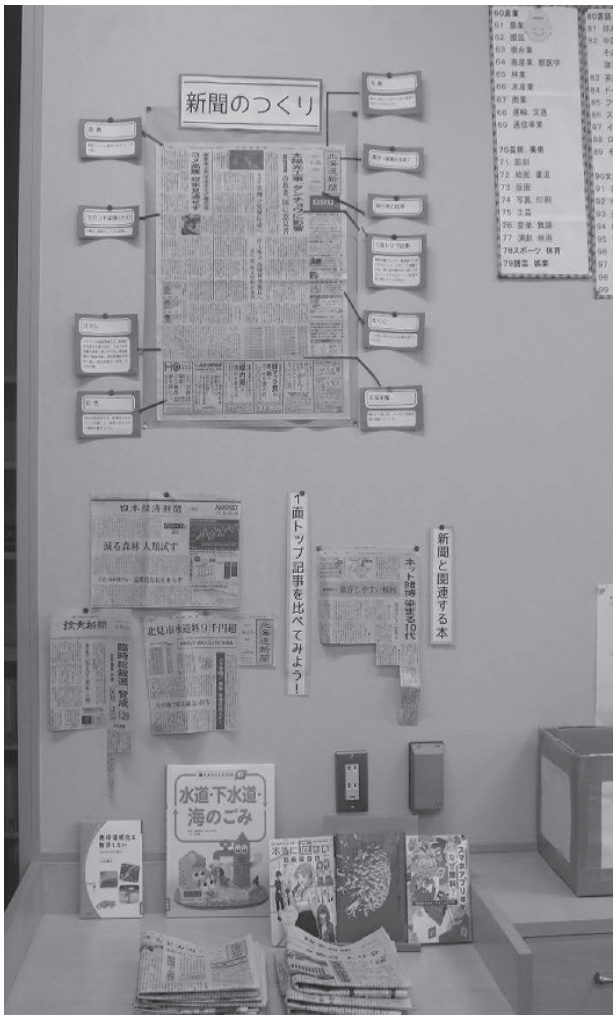
## ③新聞と関連図書で魅力的な空間提供
### ～ 学校図書館司書との連携 ～

学校図書館読書関連事業で、新ひだか町図書館から読書サポートにいらしている新井田司書と学校図書館での新聞活用方法をともに考えた。

図書館の一角に「新聞のつくり」「トップ記事を比べてみよう」「新聞と関連する本」コーナーを設けてみた。

新聞の紙面と関連本を並べることで、普段読まない分野の書籍や、新しい情報への興味

を自然に引き出すことができそうだ。また、新聞をきっかけに専門性の高い書籍、雑誌等へと読書の幅の広がりを期待できそうだ。今後「今週のニュース」「特集・地域の課題」など、明確なテーマに基づいて本を選定し、POPなどで紹介する予定である。




**新井田司書作成の新聞×本コーナー**

## ④教科や単元に関連する記事の授業活用を積極的に先生方に薦めてみる

本校は１，２年社会科を布村教諭が、３年社会科を私が担当している。

令和７（2025 年）11 月 3 日読売新聞１面に「アマゾン火災９月急増」の見出しの記事が掲載。ちょうど１年生地理的分野「南アメリカ州」の単元で活用できると考え、布村教諭に該当記事を手渡し活用のねらいや活用方法の例を伝えると「それいいねぇ！」と快諾。授業で使用してくれた。

**記事内容から白抜き部分の語句を探す生徒**

布村教諭は、森林と耕地面積の変化を持続可能な開発に関わる一般的課題とブラジルにおける地域特有課題の両面から捉えさせるため、記事見出しの文字の「アマゾン」だけを隠し（白抜きにして）記事を読んで、隠した文字が何かを見つけさせる学習活動を授業のはじめに行った。

膨大な文字量に抵抗感を示している生徒や、記事以外の広告等に関心がうつる生徒もいたが（授業では該当記事のみ切り抜いて活用することをおすすめします）粘り強く記事に向き合い、漢字の読み方を教え合い、読み解いたことを仲間と相談し学習に取り組む様子も見られた。

記事から必要な情報を読み取る学習を通して、文字や言葉の力を伸ばすと同時に、生きた情報を通して社会への視野を広げる効果が期待できる。教科書はたくさんのことを教えてくれる。教科書で基礎を学び、習って身に付いた知識が現実のニュースとどう

関わっているのか。新聞の最新情報や社会の多様な意見に触れさせ、生徒の学力向上や論理的思考力が養われていくと考える。

### ⑤日胆地区セミナーでの授業公開

令和７（2025 年）10 月 17 日に本校で第 19 回日胆地区セミナーを開催。教員や地元新聞販売関係者など約 20 名が参加した。３年生公民的分野「国会の仕事① 法律の制定と予算の議決」の授業を私が公開した。

国会の仕事と私たちの生活が実際にどのように関わっているか考えるため、成立した予算や制定された法律を新聞記事から読み取り、主権者の私たちはどのように政治と関わるとよいのかを生徒とともに探求することをねらいとした。

以下は令和７（2025 年）10 月 18 日、北海道新聞朝刊の記事より抜粋。

「授業では、生徒 19 人が近年制定された法律などの記事を読み、自分たちの生活にどう影響するかなどを議論した。授業後、見学した教員らは教育現場での新聞活用法について意見を交換。『要約したものではなく、記事そのものに触れさせる経験は大切』『時間がかかるため、事前に新聞を読み込ませても良いのでは』などの声が上がった。（福島なな）」

自転車「ながら運転」1.2万円

反則金、来年4月から

警察庁は24日、自転車の交通違反に交通反則切符（青切符）を導入する改正道路交通法を2026年4月1日に施行する方針を明らかにした。対象となる113の違反行為に対する反則金額も初めて明示した。走行中の携帯電話使用（ながら運転）には1万2000円の納付を求める。自転車の違反処理の見直しは戦後初めてで、警察庁はルールの周知や安全教育の徹底を急ぐ。

反則金の金額などは道交法施行令を改正して定める方針で、警察庁は25日からパブリックコメント（意見公募）を始める。

反則金の対象となる違反行為の多くは原動機付き自転車（原付き）と重複するため、金額も原付きと同額とし、信号無視や逆走は6000円とした。

自転車固有の違反行為として4件の反則金を示した。2人乗りや2台以上の並走は3000円、ブレーキがない「ピスト自転車」での走行は5000円などとした。期限内に反則金を納付すれ

青切符の対象となる主な自転車の反則行為と反則金

| 携帯電話使用（ながら運転） | 2人乗り | 信号無視 |
|---|---|---|
| 1万2000円 | 3000円 | 6000円 |

| 2台以上の横並び走行 | 逆走や歩道走行 |
|---|---|
| 3000円 | 6000円 |

（注）道路交通法施行令改正案に基づく

令和７（2025 年）６月 24 日
日本経済新聞
※授業で使用した新聞の一例

## ４　成果と課題

新聞を有効に活用することで、生徒にとって興味や関心を持ちにくい課題であっても学習意欲を高め「主体的・対話的で深い学び」に導ける資料になると実感している。

## ５　おわりに

NIE の良さを校内外に広められるように、私自身の実践も含め、日本新聞協会認定アドバイザーや実践している方の取組等を見てもらえるように今後も色々な形で紹介していくことを継続したい。

また、児童生徒の学びをより豊かにしていけるように、新聞の新たな活用方法や切り口を開発できるよう努力していきたい。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 「時事を知り、意見をもつ」ための新聞の活用

## ～より多様な方法で情報を得るために～

札幌市立宮の森中学校　教諭　桑山　美由紀

## １．はじめに

本校は、札幌市中央区にある小規模校である。周りを山に囲まれ、校地内に川が流れる自然豊かな環境に恵まれている。また、円山競技場や円山動物園、大倉山ジャンプ場、本郷新記念札幌彫刻美術館等様々な教育施設にも恵まれており、その環境や地域を生かした学びを実践している。

本校は、教育目標である「自立・共生・未来志向～自ら立ち、ともに生きることを学び、明日を志す生徒」の実現に向けて、実践を重ねている。子どもが「主体」の学校を目指し、学びを実社会につなげるための取組も多く行っている。また、今年度は生成ＡＩパイロット校にも認定され、ＡＩを用いた協働的な学びや個別支援についても研修と実践を重ねている。

こうした恵まれた環境と先進的な試みが、生徒たちの自分を取り巻く社会に対する関心をもつ素地となり、ＮＩＥの活動においても大きな成果をあげている。ＮＩＥ指定校として３年目を迎えた今年度は、昨年度までの蓄積を更に発展させ、より質の高い実践を展開することができた。

## ２.生徒の様子

本校の生徒は、自然豊かな環境で小規模校のよさを生かした教育のもと、伸び伸びと学校生活を送っている。学習への意欲が高く、授業では真剣に課題に取り組んだり、友達との交流の中から新たな課題を見いだし、考えを深めたりする姿がみられる。

自分の考えを表現する機会も多く、生徒も意欲的に言葉を探しながら文章で表現しようとしている。「学習などに関するアンケート」の結果によると、当該学年（２学年）では「意見を書くときには、その理由をはっきりさせて書くようにしている」「意見を発言する前に、自分の考えがうまく伝わるように、話の順序を考えている」という生徒が８５％を超えている。一方、基本的な読解力や語彙力、表現力に課題がある生徒も少なくないのが現状である。そのため国語科だけでなく、各教科や日常の様々な活動を通して「言葉の力」を高めるための工夫や取組を行っている。

## ３．実践の内容

①　「新聞閲覧コーナー」の設置

「新聞に親しむこと」「身近な話題や国内外のニュースに関心をもつこと」を目的として、本校２階

図書室前に新聞閲覧台を設置している。また、司書がピックアップした記事を掲示し、多種多様な話題に触れられるようになっている。一人一台端末が導入されたことにより、生徒の調べ学習がともすればネット上の情報のみに頼りがちになってしまう中、より多様な情報に触れる一助となった。

② 社会科におけるＮＩＥレポート

社会科では、定期的に「ＮＩＥワークシート」を用いた取組を行っている。まず、社会科の教師が記事をピックアップする。今年度は、「市街地に出没する熊」や「美瑛のオーバーツーリズム」など、北海道内の課題を扱ったものや、公民で学習する内容と関連した記事を扱った。

活動では、記事の内容を要約させたり、その記事を参考に取り上げた事柄を説明させたりした後に記事についての意見を述べさせている。

このように、様々な教科で新聞に触れることで、生徒たちの新聞を読むことに対する抵抗感が軽減されていると感じる。

③国語科における実践

【単元の目標・指導計画（単元構成）】

１．単元名　「根拠の適切さを考えて書こう～意見文を書く」

２．単元計画

| 時 | 主な学習内容・活動 |
|---|---|
| 1 | ① **課題を決め、調べる**<br>自分の「まいとぴっくす」ノートから注目するニュースを選び、課題に関する情報を集め、それに対する意見をもつ。 |
| 2 | ① **構成を考える**<br>適切な根拠を選んで、意見と根拠を整理し、交流を行う。交流したことをもとに整理して構成を考える。 |
| ３・４ | ① **意見文を書く** |
| 5 | ① **交流する**<br>書いた文章を互いに読み合い、題材のとらえ方や観点の立て方、情報の選択の仕方などについて意見を述べたり、自分の表現の参考にしたりする。 |

本単元を効果的に行うために、

（1）　地域や社会で話題や問題になっていることなどの中から課題を決める。

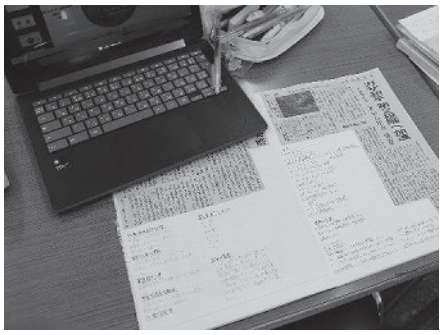
（2）　適切な根拠を選び、「理由づけ」を合わせて示す。

上記の２つの活動を行う際に、新聞を活用した。

（1）「まいとぴっくす」の取組

本校では、Ａ３ノートに自分が注目した新聞記事を貼って感想や意見を書く「まいとぴっくす」の取組を続けている。その活動の中で、新聞記事を読んで気になる用語を調べたり、関連するニュースを書き留めた

りしている。今回はこれまで蓄積してきた新聞記事の中から自分が最も注目する記事について課題を設定した。また、「まいとぴっくす」の活動時はお互いにノートを見合い、まとめ方の工夫や他者の考えに触れる機会を設けた。それにより、学習を重ねるごとに内容に深まりが見られるようになった。最初は、自分が知らない言葉を意味調べのように書いていた生徒も、他の人のノートを参考にしながら専門用語を調べるようになったり、その記事の背景について更に深く調べたりするようになった。



（2）「まな bell」の活用

自分が設定した課題に対する意見文を書くには、説得力を高めるための工夫が必要である。それには客観的で信頼性の高い事実を根拠とする必要がある。課題に関する情報を集める中で、生徒はインターネットに頼りがちだが、より信頼性の高い情報を集めるには、複数の情報源で調べることが効果的だ。検索エンジンをもつ「まな bell」は関連記事を調べるのに適している。生徒たちは、「まな bell」を活用して関連記事を調べ、必要な内容をノートに整理しながら書き留めていった。

（3）根拠の吟味

集めた情報をもとに「自分の意見」と「意見を支える根拠」を整理する中で注目したのは、「意見」と「根拠」を結び付ける「理由づけ」である。生徒の中には、この「理由づけ」に難しさを抱える生徒が多い。つい主観に基づいた判断をしてしまったり、論理の飛躍があったり、「理由」と「根拠」がずれていたりするケースがある。この点は生徒本人では中々気付けない。そこで少人数のグループで交流し、他者の視点で「意見」と「根拠」、それをつなぐ「理由づけ」を吟味させた。

また、意見文により説得力をもたせる工夫として、想定される反論とそれに対する意見を述べることが挙げられる。この交流でも「意見」に対する「反論」を付箋に書いていった。自分一人では中々反論を想定することは難しいが、仲間と交流しながらそれぞれの考えをより深めることができた。

（４）支援が必要な生徒に対して

身近な話題から課題を決めたり自分の意見をもったりすることが困難な生徒にとって、これまで自分が注目した記事を集めた「まいとぴっくす」ノートが有効であった。選択肢の幅が限られることで、必要以上に迷うことなく課題設定をすることができた。

意見の構築や適切な根拠を選ぶことが難しい生徒には、生成ＡＩを使って「壁打ち」を行わせた。生成ＡＩと協働しながら自分の意見に足りないところを補ったり、根拠の適切さについてアドアイスをもらったりしたことが効果的であった。

## ４．成果と課題

### （１）成果

① 新聞に触れる機会が大幅に増えた

ＮＩＥの活動の成果として、新聞に触れる機会が大幅に増えたことが挙げられる。新聞を購読している家庭は年々減少し、多くの生徒にとって「新聞」という情報媒体が身近なものではないという現状がある。ニュースや情報を見たり集めたりするときも、インターネットを使うことが一般的になっている。そのような中で、校内に「新聞閲覧コーナー」を設置したり、授業で新聞を活用したりすることで新聞に親しむ生徒が増えたことが成果だと考える。

② メディアリテラシー教育

新聞からも情報を得る機会が増えるにつれ、新聞やインターネット、テレビ等様々なメディアの特性を理解し、それを考えながら多様な方法で情報を集めることができるようになった。新聞記事とインターネットの記事を比較したり、新聞記事の情報をインターネットで更に詳しく調べて補ったりすることで、より多様な視点で検討しながら自分の意見を構築することができる生徒が増えた。

### （２）課題

① 習慣化の難しさ

様々な取組を行ったが、やはり新聞に親しんだり、読んだりすることの習慣化には至っていない。本校の生徒は「読書が好きである」という生徒が７割程度にとどまっている。読書に限らず、「読む」機会が少ない生徒、「読む」ことに困難を抱える生徒にとっては、新聞記事に対するハードルが高いと言わざるをえない。生徒が日常的に新聞を読ようになるまでにはまだ時間がかかる。

② 情報リテラシー教育の一層の充実

先ほども述べたように、ＮＩＥの活動により情報リテラシーについても学習する機会が増え、的確な情報を探したり、正確な情報を得て整理・分析したりする力の育成につながった。しかしながら、ＩＣＴを活用した学習活動が増えるにつれ、情報リテラシーについても一層力を入れる必要があると感じた。特に、生成ＡＩを活用する生徒も増えてきている。その中で、ＡＩの回答を鵜呑みにして一次情報に当たらずに根拠とする生徒やＡＩの意見をそのまま取り入れようとしてしまう生徒もおり、危うさを感じる。この先、生成ＡＩがこれまで以上に身近な存在になることが考えられる。上手に付き合うためにも、情報に関する指導の継続が必要であると痛感した。

## ５．おわりに

情報社会を生きる生徒たちにとって、多様な媒体から情報を得ることやそれを通じて情報リテラシーを身に着けることは必須課題である。

一人一台端末の導入は学校現場にとって大きな変化であり、画期的なことであった。しかし一方で、インターネットからでしか情報を得ることがないという生徒が増えたことも事実である。NIE の活動により、その状況に一石を投じることができたのではないかと考える。今後の方向性を模索したい。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 高齢者と災害をテーマとする新聞作り

函館市立南茅部中学校　教諭　中川　証子
北海道教育大学函館校　講師　野嵜　雄太

## １．はじめに

南茅部中学校の全校生徒は 74 名である。北海道 NIE 推進協議会の実践校の指定（２年目）を受け、複数紙の新聞の提供を受けた。また、昨年度から新潟県上越市立中郷中学校（以下中郷中）と、新聞作りを通した交流を継続し、両校で協働し、ＮＩＥに取り組んだ。

今年度の実践は、第２学年社会科の地理的分野（北海道地方の特色）の発展学習という位置づけで、単元を構成した。対象学級の生徒は 24 名である。

本年度は両校の共通テーマを「高齢者と災害」とした。理由として、第一に、中郷中が総合的な学習の時間で、防災学習に取り組んでいること。第二に、昨年度に南茅部中が作成した新聞で、津波対策として、急斜面に設置された避難階段や、漁港の防波堤を記事にした班があったこと。第三に、両校の地域が、少子高齢化という同様の課題を抱えていること。第四に学校規模が同規模（各学年１クラスで、１クラス２０～２５名程度）であり、新聞の作成やグループ分けなど、交流がしやすいことである。

## ２、実践の内容

### （１）単元目標

「他地域の問題の解決に向けた新聞づくりを通して、自分の地域の高齢者と災害に関わる課題を理解する」とした。

### （２）単元計画と授業の実際

第１次（第１時～第２時）

「新聞づくりの基礎を学ぼう」

第１時では、新聞の作成に先立って、災害時の避難訓練（高齢者福祉施設）の記事を執筆した北海道新聞の記者にご協力をいただいた。学習内容として、第一に、取材を行う前の準備段階で何をするか（過去の避難訓練に関する記事を検索する、法律や条例の改正状況を把握する等）。第二に、取材時の注意点（取材対象をどの自治体のどの施設にするか、取材対象者を誰にするか等）。第三に、情報の精査として、取材で得た情報の裏取り（文献やインターネット（特に国の研究機関のサイトを検索）を行うこと）。第四に、発信（どこに焦点を絞って記事を書くか、どの専門家の意見を掲載するか、見出しを何にするか等）を行うことなどを学ぶことができた。

第２次（第３時～第４時）

「取材計画を立て、取材をしよう」

第３時～第４時では、職場体験を活用し、体験先に高齢者と防災について取材を行った。

４つのグループに分かれ、取材で集めた情報を基にして、個人で記事を分担・作成し、見出しやレイアウトを考え、グループで１つの新聞を作成した。新聞の作成ソフトは「ど

うしん まな bell」を活用した。

具体的な取材活動として、生徒たちは職場体験学習の訪問先で、高齢者が災害時にどのように避難するのかを尋ねた。そして、記事として整理していくことができた。高齢者施設やホテル、行政機関など、場所によって、対策が異なることがわかった。次の図１～４は、各グループが作成した新聞である。

第３次　第５時～第６時

「各校で作成した新聞を交換し、質問を考えよう」「オンラインで対話しよう」

第５時では、上越市立中郷中が作成した新聞を読み、疑問点や質問事項をまとめた。そして、オンラインによる交流時に相手の中学生からの質問に回答できるようにした。

第６時では、お互いに作成した新聞を基にして、オンラインで意見交換をした。生徒を２つのグループに分け、グループごとにオンラインでつなぎ、お互いの記事について質問と回答を行った。記事の内容を詳しく聞いたり、記事についての疑問点を尋ねたりした。

第４次　第７時

「取材先への情報提供と取材先からコメントをもらおう」

オンライン対話後、取材先を再訪し、相手の中学校から得た情報で、取材先にも役に立つと考えられる情報を伝えた。取材先からコメントをいただき、自分の作成した記事の振り返りを行った。

図１　１班の作成した新聞

ドキドキ新聞

発行元
函館市立南茅部中学校
１班

# 日頃の備えと連携

## 認知症の高齢者への対応は

函館みなみかやべ荘では、様々な病気をおもちになっている入所者さんが常に生活をしている環境で、大半の方が寝たきりと認知症である。その中で火災を想定した消防避難訓練を年に2回、自然災害を想定した訓練を年に1回実施、また、非常災害を想定し約3日分の食料、飲料水を備えている。食料に関しては、簡易的すぐに提供できる物となっている。そして利用者さんや入居者さんが多く利用しているときに火災が発生した場合、どのように避難させるのか、シミュレーションを作成している。当施設の近くには、南茅部小学校、南茅部総合センターが避難所となっている。高齢者の大半のみなさんが車椅子を利用、その中で私は、自然災害を想定した訓練を年に3回に増やし、どんな季節・状況でも対応できるように増やしたほうがいいと考えた。認知症の高齢者が多いため避難所ではどんな対応をするのか詳しく知りたい。



## 冷静な判断を

函館ひろめの荘では、いつ災害が起きてもいいように従業員全員で1年に3回ほど避難訓練を実施。昨年の地震があったとき実際に避難してきた人もいた。ホテルのオーナー杉林さんによれば、温泉に入浴中の方から先に避難させるとのこと。温泉から上がったあと着替える時間はどうするのか、という疑問が新たに生まれた。



## ホテルの訓練 ホテルの備え

地震が起きたときには、ホテルの中にいる人達を外に避難させて、大雨や暴風のときには、ホテルの中に避難させられるようにしているようだ。もし、災害が起きて高齢者がたくさん避難してきた時は、階段が狭く、多いので、沢山の人が一斉に階段を使って避難したら、とても危ない。しかし災害が起きてもエレベーターが使えるのであれば、すごく楽になるだろう。他にも避難した時、日常生活に必要なものがないと思われるが、しっかりと災害に備えて準備しているようだ。



## 非常時の判断を日頃からしよう

地震後の津波は数分で到達し、車での避難は渋滞の危険があり、高齢者や障害者は自力で避難が難しい。地域で助け合うことが命を守る大切な事である。

そのため、日頃から避難経路や非常用品を確認しておくことも重要であると考える。私の意見としては、住民を入れた避難訓練を計画して逃げる助けるの徹底ができるようにしたほうがいい。

茅新聞

発行元
函館市立南茅部中学校２班

# こんなこと聞かれたのは初めて

## 緊急時の行動を取材

10月31日に行われた職場体験で南茅部中学校の二年生は各事業所に学びに行った。私達二人は「すし処茂（よし）川」に行ってきた。店主に色々な質問をしてきた。そして言われた一言「今までいろいろな質問をされてきたが防災について質問されたのは初めてだ。ここは海抜3mくらいだからしっかり考えないといけないことに気付かされた」とのこと。いざ逃げるとなったらどうするのか。と聞くと「出口においてある防災バッグを持ち、スポーツセンターへ車で避難する」と聞くことができた。そして高齢者や幼い子供が食事しているときに災害が起きたらどうするのかと聞くと「高齢者も幼い子供も必ず一人で来るとは限らないので家族に任せる」と聞けた。しかし歩いてきた人はどうするのか。高齢者が避難所まで歩いていけるのかなど疑問は増えたがやはり個人事業だけでやるのは難しいため函館市の支援が必要であると考えた。



## 雪があるところは通らない

ロータス函館川汲工場の災害時のときのアドバイスは、まず雪が積もっているときなどは、道路に駐車しないことが大事で、止まってしまったら除雪の邪魔になってしまうから、雪が積もっているときは、止まらないことが大切である。災害時に車がないや足が不自由な人などは、他の人に頼むなど一人で保まないことが重要であると考える。



## 福祉施設の取り組み

みなみかやべ荘の皆様は、避難訓練で火災を想定した、訓練を年二回、自然災害を想定した訓練を年一回実施。みなみかやべ荘は、24時間稼働している施設で年一回夜間を想定した訓練を実施。非常時に備え三日分の簡易的な調理ですぐに提供できる食料と飲料水を備蓄している。他に車椅子など高齢者を避難場所へ移送を想定したシュミレーションを作成している。入居者の大半が車椅子を必要する方で、全員が避難場所の南茅部小学校へ移送するには二時間程度の時間が必要である。



## 消防と私達の生活

函館市消防本部東消防署南茅部支署の皆様は、まず毎朝自分達が使う器具などをすべて行けるよう点検、消防車や救急車の近くに置いてあるところへもすぐ行けるようにしている。消防の方達は、様々な災害の訓練をしており、洪水や事故、火災、はしごなどを使う訓練に取り組んでいる。取材を通して、体が不自由な人の訓練にどう取り組んでいるのか気になった。



図２　２班が作成した新聞

カックウ新聞

発行元
函館市立南茅部中学校
三班

## 消防は命をかけ助けてはいない

外部と意見交換

函館市消防本部東消防署南茅部支署の人に「どうして命をかけて人を助けているのか」を聞いた所、「命をかけ助けるのではなくその場の判断で危険で命を落とす可能性がある場所には行かず、安全ではないけど命を落とす可能性を減らすできる場所に入り、人助けなどをしている。勘違いしている人は、命をかけて助けていると思っているが、それは違う」と答えた。

南茅部支署の人に定期的に外部と意見交流をしているか聞いたところ、トップの人達が警察、役所の人たちと交流などをしてどのように改善すればいいかなどを地道に交流などをしているとのことだ。

しかし、南茅部の消防士だけでは、高齢者や災害などに対処しきれる心配に感じたので、市役所の人と話合ってトップの人と交流することは難しいから、トップの部下の人と交流などをして対処方法などを作っていけば良いのかと考えた。

救急隊員より、南茅部中教員撮影）

## こばやし生花店　お花と災害

当店では、災害時用のバッグなど用意していないが、車に煮炊きできる物を積んでいるとのこと。7月の津波警報の時仕入れている最中で、営業をしていた。地域などの連携はなく、当店だけで対応している事がわかった。避難訓練はしていなく、対応に時間がかかると思うので、定期的に訓練を実施し対応を強化することが必要である。

避難訓練を年に1回実施していた。非常時に備えていることは約3日分の食事と飲料水である。食事は簡易的な調理ですぐ提供できるものだ。

しかし私は3日分だけでは足りるのか、人数分の食料はあるのか、と疑問をもった。

利用者が多い時間などに災害が発生した時は避難所へ移送を想定したシミュレーションを作成していると教えてくれた。

こばやし生花店の店内（南茅部中教員撮影）

## 介護施設の防災

みなみかやべ荘では火災を想定した避難訓練を年に2回、自然災害を想定した

避難道は登坂（南茅部中教員撮影）

## 誰のため　警察と連携

調剤薬局は周辺の医療機関や警察と連携し災害対応を、介護施設と病院で連携を結び、薬を届けているらしい。

だが、災害時にどうするのか、職員も避難し、機械が壊れてしまい薬が届けられない状況になってしまったら、施設利用者が避難所で飲む薬はどうなるのか、そこは対策しなければいけないのではないだろうか。

ヒ1下から薬を届出す様子（南茅部中教員撮影）

図３　３班が作成した新聞

南中新聞

発行元
函館市立南茅部
中学校
4班

## 職場体験防災

東消防署南茅部支署災害対策

田舎だから救急だった場合、市内までいかなければならない。高齢者が半数以上なので車を利用した方がいいが、渋滞してしまうから余計に避難が遅れてしまうので、なるべく徒歩で避難したほうが良い。

しかし、自力では歩けない人や寝込だった場合、どうやって高齢者を避難させるか疑問だ。なぜなら、津波が来ると知ってから避難場所につくまで30分はかかると考えるからだ。津波は遠くて、30分かかり近くても2分から10分はかかると言われているから、高齢者の場合逃げている最中や、まだ家にいる人もいるかもしれない。だから避難の警報を早めたり周りの人同士で手伝い合うことを伝えて、少しでも避難する時間を早めたら良い。

いつ災害が来ても、すぐに出動できるように練はしているが、最低でも10分はかかるとのことだった。人命がかかってるからこそ、失敗ができない。毎日訓練しているのがわかる。

救急車乗り込む（南茅部中教員撮影）

## みなかわ調剤薬局高齢者と防災

みなかわ調剤薬局の近くにはこども園があり、災害が発生したとき手を差し伸べるという契約をしているが、体に不自由な部分がある高齢者にはどのように対応するのだろうか。「状況に応じて歩くのではなく、車で移動するのも一つの手だ」と役員は語る。状況に応じて臨機の意見である。歩く避難ではなく、反対に車での避難も大事である。

みなかわ調剤薬局　薬の選別（南茅部中教員撮影）

## ひろめ荘防災

ひろめ荘では災害時には避難場所になり、避難訓練も年に3回していると言っていたので、温泉に入っている客や宿泊客の誘導も大丈夫だ。

去年の災害の時、避難場所になり、宿泊したお客さんもいた。ホテル内に自家発電の機械もあるので停電でも安心だ。

だが、プライバシーが守られなかったり、衛生面の不安や食べ物の心配もあるが、温泉や、部屋もあり、ホテル内の売店などがあるので、そのような心配は大丈夫だろう。

ひろめ荘（南茅部中教員撮影）

## みなみかやべ荘災害との関わり

みなみかやべ荘では自然災害を想定した避難訓練を年に一回実施していて、多くの利用者がいるときに災害が発生した場合は車、歩き、車椅子で避難、車椅子を必要とする方が大半なため利用者50人を避難場所へ送るには二時間程度の時間が必要となる。近くの避難場所は南茅部小学校、南茅部総合センターがある。三日分の食料があり簡易的ですぐに提供できるものだ。

みなみかやべ荘前の"坂道（南茅部中教員撮影）

図４　４班が作成した新聞

## ３、成果

昨年度に作成された先輩たちの新聞の内容を、発展させることができるように、本年度は取材と記事の内容にこだわり、新聞を作成した。生徒たちは、自分が取材して集めた情報をどのように記事にまとめていくのか苦労しながら書いていた。特に事実だけでなく、自身の見解を書くことに重点を置き、推敲を重ねた。

新聞を作成する際には、取材で質問した平常時・緊急時・外部連携の三つの観点から記事を作成した。特に避難訓練をどのように行っていたのかを詳しく書くようにしていた。

また、学校のある地域が海に近いことから、津波発生時を想定した対応を重点的に聞き取った。2025年７月下旬にロシア・カムチャツカ半島付近で起きた地震で発表された津波警報での実体験から、自力避難が困難な方への支援や、高い場所への移動が課題であると気づかされたようだ。高齢者の命を守るには施設内だけでなく、地域住民との密な連携が不可欠だと感じた生徒が多かった。

次の資料１、資料２は、オンライン対話の様子である。ホワイトボードを準備し、質問内容を表示するなど、工夫して交流に臨むことができた。

## ４、今後の課題

今後は、両校の生徒に授業前後に実施したアンケート、授業で作成したワークシートへ記述、作成した新聞記事の内容など、生徒の学習活動を振り返り、授業の効果を検証することである。そして、ＮＩＥの授業開発や次年度の社会科公民的分野（基本的人権や地方自治等）の学習に活かせるようにすることである。

資料１　オンラインで遠隔地の中学生と対話している様子①

資料２　オンラインで遠隔地の中学生と対話している様子②

２０２５年度　NIE 実践報告

# 新聞の活用と対話・協働学習

北広島市立西部中学校　教諭　野田朝日那

## １．はじめに

本校は、自ら考える生徒（創造）、思いやる生徒（誠実）、行動する生徒（自主）、きたえる生徒（健康）という教育目標のもとで、以下のような特色ある教育活動を行っている。

＜キャリア教育・ユネスコスクールの実践＞

地域の団体の力を借りた職場体験学習を実施している。自己設定したテーマに基づき、職業について調べ学習を行い、地域事業所等で職場体験を実施したり、西部地区生涯学習振興会の主催でソクラテスミーティングを実施し、１０数名の職業人の話を聞いて将来に向けて具体的に今何をすべきかを考えたりしている。また、カボチャ農園作業を通したＥＳＤ環境教育実践として、カボチャを種から育て、栽培、収穫から地域への寄贈や社会貢献という持続可能な循環型社会を目指す環境教育を実践している。さらに、人権・福祉・環境・平和・国際理解教育の実践として、ＳＤＧｓを意識した取組を行っている。人権教室や命の大切さについての学習・福祉体験や福祉学習の充実・ＥＳＤ・平和や国際理解教育（道内大学留学生との交流や市内ＡＬＴを活用しての授業）に力を入れている。

＜コミュニティ・スクール（ＣＳ）の推進＞

文科省、北広島市の指定を受け、コミュニティ・スクール事業を推進。小中９年間の発達や学びを支える教育の充実を目指し、小学校、地域の関係機関等と連携しながら「地域とともにある学校づくり」を進めている。地域の人材活用、地域貢献、ＣＳを利用した学力向上や生活改善策、情報発信活動に力を入れている。

＜小中一貫教育の取組＞

９年間を見通した指導計画及び小中乗り入れ授業や、中学校区での西部スタンダードの実践、家庭地域と連携を図った生活習慣の確立、ＣＳとの連携による小中合同の交流活動を通して、確かな学力や豊かな心、体力向上、開かれた学校づくりを目指している。特にＣＳ防災訓練やＣＳ災害図上訓練などは、小中合同で行っている。

## ２.生徒の様子と授業づくり

本校は、小学１年生から中学３年生までの９年間を、ほぼ変わらぬメンバーで過ごすことになる。そのため、グループでの話し合いなどは、活発に行われ、自分たちで課題の解決に向けて活動を進めることができる。お互いの良さも十分に理解しているいっぽうで、一度関係が拗れてしまうと修復が難しく、苦労している様子も見られる。また、関係が変わらず、環境が少しでも変わることへの不安や、新しいものを受け入れることが不得手な面があり、新たな人間関係を構築していくことへの苦手意識をもっている。慣れた環境を好むことから、今よりももっと集団として向上しようという意欲に乏しいところもある。このような背景から、本校では、「主体的に学び、未来を切り拓く、生きる力」の育成を、重点教育目標に掲げ、「互いの考えを認め合い、高め合う児童生徒の育成～対話・協働学習の工夫を通して～」という研究主題のもとで、研究を進めている。対話協働学習に力を入れ、対話の質を高めるためのファシリテーションの研修を行うなどして、工夫を凝らしている。生徒自身が、自分の考えを表現することに加えて、他者の意見を傾聴し、尊重することを大切にする授業づくりを行っている。

（国語の授業でのディベートの様子）

（国語の授業でのスパイダー討論の様子）

（国語の授業での「敬語」を使った対話の様子）

同じ教材や場面を読んでも、感じ方や捉え方は人それぞれで、その価値観の相違を交流し、認め合うことができるようになることが重要である。新聞記事を活用し、読み回しなどをすることで、いろいろな考えに触れ、「新しい視点」で事象をとらえる、という体験をすることができた。さらに、昨今の日本や世界情勢に興味や関心をもつきっかけにもなった。

生徒は、ネット社会で生きており、文字を読むという習慣がなく、語彙力の不足も感じられる。新聞記事には、中学生にしてはやや難しい単語も多いが、たくさんの種類の語に触れることが何より大切であると感じる。

## ３．実践の内容

### ①　学校での展示の工夫

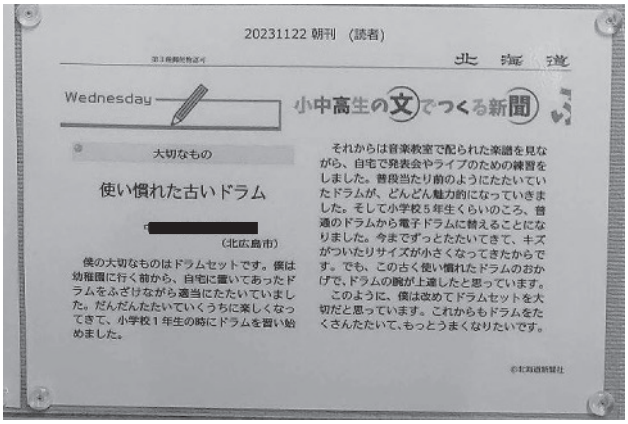
本校では、図書館に新聞のバックナンバーを保管し、いつでも活用できるようにしている。最新版は、常設している新聞閲覧コーナーに展示している。子ども新聞や、季節等に合わせた書籍もともに展示し、閲覧できるようにしている。学習委員が毎日、新聞の入れ替え等を行っていて、誰しもが気軽に手に取れる環境にある。

今年度から、従来の新聞閲覧コーナーに加えて、ホールに特設コーナーを設け、全校生徒および全教職員が、気軽に新聞を手にすることができるようにした。新聞の読み方に関する書籍や、複数の新聞を置くことで、より興味を示し、休み時間に新聞を開いてみる生徒や授業で活用してくださる先生が増えた。

### ②　国語・書写の授業での継続的な取組

#### １）ぶんぶん time への投稿

一昨年から、まずは新聞に興味をもってもらうため、「ぶんぶん time(タイム)」を読み、中高生が新聞を創っているということを感じてもらい、実際にテーマに沿った作文を書く授業を定期的に行った。実際に掲載された生徒はとても喜び、学習のモチベーションになっていた。また、周りの友人も、その生徒が書いた作文に興味関心を示し、自身の創作に生かしていた。掲載された記事は、各学級や校内の掲示板で全校生徒および全教職員に周知した。


20231122 朝刊 (読者)

北海道

Wednesday

小中高生の文でつくる新聞

大切なもの

使い慣れた古いドラム

[redacted]

(北広島市)

僕の大切なものはドラムセットです。僕は幼稚園に行く前から、自宅に置いてあったドラムをふざけながら適当にたたいていました。だんだんたたいていくうちに楽しくなってきて、小学校１年生の時にドラムを習い始めました。

それからは音楽教室で配られた楽譜を見ながら、自宅で発表会やライブのための練習をしました。普段当たり前のようにたたいていたドラムが、どんどん魅力的になっていきました。そして小学校５年生くらいのころ、普通のドラムから電子ドラムに替えることになりました。今までずっとたたいてきて、キズがついたりサイズが小さくなってきたからです。でも、この古く使い慣れたドラムのおかげで、ドラムの腕が上達したと思っています。

このように、僕は改めてドラムセットを大切だと思っています。これからもドラムをたくさんたたいて、もっとうまくなりたいです。

#### ２）いっしょに読もう！作文コンクール

毎年、継続応募しており、様々な新聞記事に触れ、自分の考えをもち、表現するという機会を設けてきた。たくさんある新聞の中から、自分の興味や関心がある記事を選択し、その記事についての考えを自分の言葉でまとめた。また、その記事を他者（友人や家族）にも読んでもらい、どのように考えているかを知ることで、自身の考えを深めた。

#### ３）卓上四季トレーニング

学力テスト等で、書き抜き問題での誤答が目立つことから、早く正確に書く力を養いたいと思い、「語彙力・集中力・速記力・正確に書く力」の向上を掲げ、書き写し学習用の卓上四季ノートを用いて、卓上四季を視写するという取組を実施した。

今年度は、北海道新聞社の方に、出前授業を依頼し、回し読みを行った。「新聞に触れる機会をもつ」、「知らない言葉に出会う」、「自分の考えの整理」、「価値観の違いを理解する」という点で、非常に有意義な取組となった。新聞を読むということに慣れていない、活字を読むことが苦手、という生徒も、回し読みをして新聞づくりをすることで、楽しく学習することができていた。また、回し読みをすることで、コミュニケーションの必然性が生まれたことも良かった。

## ４．成果と課題

### （１）成果

６社の新聞を購読させていただいたことで、記事の比較をしたり、記事を選ぶ際の選択肢が増えたりなど、授業での活用の幅が広がった。また、複数の教科で、活用することにより、生徒の新聞に触れる機会が増えた。以前よりは文字を読むことや資料などから情報を得ることになれてきた様子である。

紙媒体のものをめくるという経験が乏しい生徒も多い時代だが、新聞を通して「紙をめくる」という経験を積むことができた。

回し読みなど、グループ交流の際には、一つの記事に対してそれぞれの意見があるということを知り、価値観の違いを知ることが他者理解にも繋がった。

「文字を読む」という活動を通して、日常会話では使わないが、社会で必要とされる語に出会い、わからないことを調べる良い機会にもなり、知らない語に触れる、語彙を増やす大変良い機会になった。記事には、図表も多く用いられていることから、情報を正しく読み取る力の育成にもつながった。学力テストや、チャレンジテスト、全国学力・学習状況調査など、求められている力の育成に結び付くものがあった。

### （２）課題

新聞の記事は、ある程度の文字数があるため、読み取りに時間を要することから、活動の時間の確保に課題が残った。また、新聞の活用が適切な場面に位置づけられていたかなど、次年度に向けて見直しが必要だと感じた。さらに、十分な成果を得るためにも、体制の不十分さを解消し、複数の教科・教員で実践していく必要がある。

## ５．おわりに

取組方法等については、前年度の反省をいかして取り組むことができた。いっぽうで、新聞の活用の場面が適切かどうかについて、課題も多く残った一年になった。新聞の活用がより有意味なものになるよう、成果と課題を常に分析し、学校全体で活用をしていきたい。また、生徒自身が、新聞活用の取組により、「力がついた」と実感できるような実践を模索していきたい。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 社会認識の深化を促す新聞活用

北海道教育大学附属旭川中学校　教諭　吉田　雅風

## １．はじめに

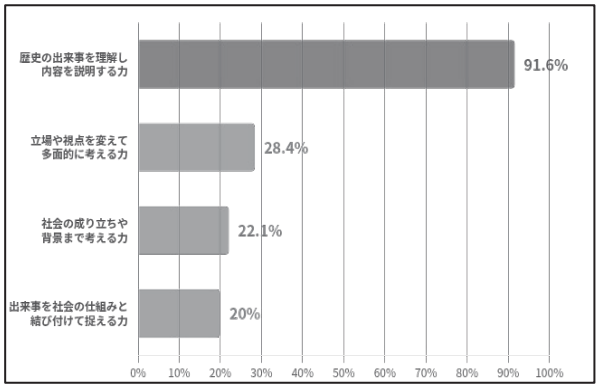
現代社会は、生成 AI をはじめとする急激な社会変化の中で、断片的な情報に振り回されやすい状況にある。そのため、事象を一面的に捉えるのではなく、背景や構造に目を向け、「なぜそうなっているのか」「その構造は何か」と問い続けながら、本質を捉える力がこれまで以上に求められている。

社会科教育においても、知識の量的な習得にとどまらず、生徒が社会事象を広い視野で捉え、背後にある構造や関係性を踏まえて考え、判断しようとする姿勢を育むことが重要である。生徒が社会を表層的に理解する段階を超え、事象を構造的に捉える社会認識を形成していくことが、社会科の役割であると考える。

こうした課題意識のもと、本研究では、社会科教育における NIE を、生徒が社会事象と継続的に向き合い、背景や構造を手がかりに考察を深めるための有効な手立てとして位置付けた。新聞は、信頼性の高い一次情報であると同時に、複数の視点や立場を内包しており、事象を社会の仕組みや関係性の中で捉え直す学びを可能にする。本実践は、NIE を通して、生徒が社会事象を構造的に理解し、判断や行動へとつなげていく社会認識を育成することを目指した。

## ２．児童（生徒）の様子

第１学年の生徒を対象に、社会科の学習において生徒が自覚している力について実態調査を行ったところ、以下のような結果が得られた。（※4 件法〈とてもそうである・そうである・どちらかと言えばそうである・そうではない〉を用い、好意的な回答〔3・4〕の割合を示している。）




**【グラフ１】生徒へのアンケート**

以上の結果から、生徒は社会的事象そのものを理解する力については一定程度身に付けているものの、事象を社会構造や背景と結び付けて捉え、多面的・多角的に考察する段階には十分に至っていないことが明らかとなった。

このことは、出来事を個別の事実として理解する段階から、社会構造を手がかりに時代や地域の特徴を捉えるという社会認識の在り方そのものに課題があることを示している。

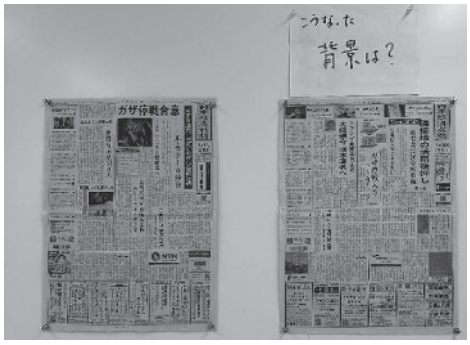
## ３．実践の内容

①校内掲示を利用した継続的な取組

「物事の表層にとどまらず、本質や構造を捉えることのできる生徒」を育成するために、新聞記事に対する考えや視点を共有する場

として掲示板を継続的に活用した。掲示板には毎月、「環境問題」「スポーツ」「テクノロジー」など、生徒の関心と社会構造とを結び付けやすいテーマに沿った新聞記事を掲示するとともに、「事象の背景や構造に目を向けるための視点（教師のメモ）」を併せて提示した。これにより、生徒は記事の内容そのものだけでなく、「なぜそうなっているのか」「どのような立場や仕組みが関わっているのか」といった問いをもって記事に向き合うようになり、掲示板の前で自然と立ち止まり、意見を交わす姿が見られるようになった。

生徒同士の対話を通して、多様な見方や考え方に触れる機会が生まれ、事象を一面的に捉える段階から、背景や構造を意識して考えようとする姿勢へとつながっていった。




【写真 1】掲示板の様子

② 社会的事象の背景に着目させる教材としての新聞活用

社会科の授業においては、生徒が事象を表層的に捉える段階を超え、社会の背景や構造に目を向けて考えることができるようにするため、新聞を教材として意図的に活用した。具体的には、授業の導入場面および展開場面の二つの段階で新聞を位置付けた。

(1) 授業の導入場面における新聞活用

授業の導入では、学習内容と関連の深い新聞記事を提示し、これから学ぶ内容が実社会とどのようにつながっているのかを意識させた。教科書の内容と重ね合わせながら新聞記事を読み取ることで、抽象的になりがちな学習内容を、現実社会の具体的な事象として捉えることが可能となった。

その結果、生徒は社会科の学習に対して高い関心をもった状態で授業に臨むようになり、経済の仕組みや選挙制度、国際問題などについて、学習内容を実社会と結び付けて発言する姿が見られるようになった。

(2) 授業の展開場面における新聞活用

授業の展開場面では、生徒が課題解決や考察を行う際の資料の一つとして新聞記事を提示した。例えば、経済分野の授業においては、財政政策による経済の安定化について理解を深めるため、現在の金利変動に関する新聞記事を扱った。

教科書の記述と新聞記事を関連付けて読み取ることで、生徒は制度や仕組みを単なる知識としてではなく、今の社会で実際に機能している構造として捉え、理解を深めていた。

さらに、今年度は英字新聞も併せて活用し、同一の社会事象を国内外の視点から比較する学習を行った。日本語の新聞と英字新聞を読み比べることで、扱われる事実は同じであっても、着目点や論の組み立て方が異なることに気付き、事象を一つの見方に固定せず、多面的・多角的に捉えたりや相互依存関係に着目したりすることにつながった。

授業後の生徒の記述を以下に示す。

> アフリカは暑くて自然が多い地域だと思っていたが、新聞でレアメタルの記事を読んで、日本のスマートフォンや車と関係があることが分かった。
>
> 日本は資源が少ないので、アフリカから資源を輸入して生活している。
>
> アフリカの問題は遠い国のことではなく、日本の便利な生活を支えている地域だと感じた。

【資料 1】生徒の WS の記述（一部）

③ 新聞スクラップ活動を通した探究的な学び

本校では、昨年度に引き続き、道北新聞スクラップコンクールに第 1 学年の全生徒が

参加する取組を行った。本実践では、新聞という信頼性の高い一次情報を基に、生徒が自ら関心をもった社会事象を選択し、テーマを設定して掘り下げることで、物事の背景や構造に目を向けて考える力を育成することを目的とした。

授業内では、生徒一人一人が新聞記事を選び、その内容を要約した上で、自身の問いや考察を加えたスクラップを作成した。記事の選定からテーマ設定、整理、考察に至るまでを生徒自身の判断に委ねたことで、活動全体に主体性が生まれ、生徒は非常に意欲的に、楽しみながら取組に向かう姿が多く見られた。特に、「テーマを決めて掘り下げる」過程を重視したことで、生徒は同一テーマに関する複数の記事を構造的に整理・比較しながら考察を深め、単なる感想にとどまらず、社会の仕組みや背景、因果関係に目を向けた記述を行うようになった。このような追究する学びを通して、生徒は事象を表層的に捉える段階を超え、背景や構造を踏まえた深い社会認識を形成していった。

扱われたテーマは、経済、政治、自然環境、人権、テクノロジーなど多岐にわたり、中には英字新聞を用いて国内外の報道を比較し、視点の違いに着目する生徒も見られた。こうした多様なテーマ設定は、生徒の幅広い興味関心を起点としながらも、一つの事象を深く追究する学びへとつながっていた。

また、完成したスクラップをクラス内で共有し、互いのテーマや考察を紹介し合う交流活動を行った。生徒は、他者の視点に触れることで、自分にはなかった見方や問いに気付き、多面的・多角的な捉え方の重要性を実感していた。

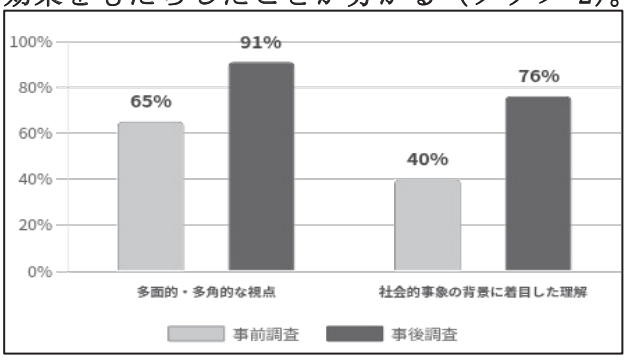
さらに、本取組で作成したスクラップを道北新聞スクラップコンクールに応募したところ、各部門において最優秀賞・優秀賞を受賞するなど、高い評価を得ることができた。

**【写真２】スクラップコンクールの作品**

## ４．成果と課題

（１）成果

本研究では、第１学年生徒 102 名を対象に、社会事象を多面的・多角的に捉えようとする意識および、事象を事実や背景・構造に基づいて捉える力の変化をアンケート調査により検証した。その結果、「事象を多面的・多角的に捉えようと意識できている」と回答した生徒は、事前調査の 65％から事後調査では 91％へと上昇した。また、「社会的事象の背景に着目した理解」ができていると回答した生徒も、40％から 76％へと増加した。これらの結果から、新聞を活用した継続的な学びが、生徒の社会事象に対する認識を、表層的理解から構造的理解へと深化させる上で一定の効果をもたらしたことが分かる（グラフ 2）。




**【グラフ２】生徒へのアンケート結果**

また、掲示板での意見共有や新聞スクラップ活動を通して、生徒は同一テーマに関する

複数の記事を比較・整理しながら考察を進めるようになり、事象を断片的に捉えるのではなく、背景や因果関係に目を向けた記述が多く見られるようになった。特に、テーマを自ら設定し掘り下げる探究的な学習過程においては、主体的に楽しみながら学びに没頭する姿が顕著であり、その過程が結果として深い社会認識の形成につながっていた。

さらに、新聞という日常的な媒体を教材として用いたことで、世界や地域で起きている出来事を自らの生活と結び付けて捉える姿勢が育まれ、社会を「知る対象」から「関わり、考える対象」として捉え直す契機となった。以上のことから、本実践は、社会科における新聞活用の意義を改めて示すものであると言える。

（２）課題

一方で、本実践を通して、今後に向けたいくつかの課題も見えてきた。

一つ目は、新聞記事の読み取りに難しさを感じる生徒への支援である。新聞は有効な教材である一方、内容や表現が難しく、理解に時間を要する生徒も見られた。今後は、記事の要点を絞ったり、補足資料を用いたりするなど、理解を助ける工夫が必要である。

二つ目は、事象を事実や背景に基づいて捉える力の定着である。実践後のアンケートでは、多くの生徒に変化が見られたものの、十分に身に付いたとは言い切れない生徒もいた。こうした力は、一度の実践で身に付くものではないため、今後も継続的に学習の中で扱っていく必要がある。

三つ目は、学びの成果の捉え方である。生徒の考えの深まりや視点の広がりを、どのように評価し、次の学習につなげていくかについては、さらなる工夫が求められる。また、掲示板や新聞スクラップといった取組を教科内にとどめず、学校全体で共有していく方法についても検討していきたい。これらの取組が一時的な活動に終わらないよう、継続的に社会事象と向き合える学習環境を整えていくことが今後の課題である。

## ５．おわりに

本実践は、新聞というリアルタイム性と多様な視点をもつ教材を通して、生徒が社会事象を表層的に捉える段階を超え、背景や構造に目を向けて考えることを可能にした。掲示板での継続的な意見交流や授業内での活用、新聞スクラップによる追究的な学びを重ねることで、生徒は事象を多面的・多角的に捉えようとする意識を高めるとともに、事実に基づいて考え、自分なりの意見を形成しようとする姿勢を身に付けていった。

このことは、生徒が社会事象への関心を深め、社会を単なる事実の集積として理解する段階から、背景や因果関係を踏まえ、社会の構造や全体像として捉え直す社会認識を形成しつつあることを示している。新聞を教育に取り入れることは、単なる知識の習得にとどまらず、現実社会と学びとを結び付けながら、社会認識の質を高める有効な手段であることが明らかとなった。

とりわけ、複数の記事を比較し、視点や立場の違いを意識しながら考察する学びは、事象を一面的に判断するのではなく、背景や構造を踏まえて捉えようとする力の育成につながった。こうした力は、不確実性の高い現代社会を生きる上で不可欠な資質・能力であり、21 世紀型の学びとして位置付けることができる。

今後も、新聞という身近で信頼性の高い媒体を活用しながら、生徒が社会の本質を見極め、構造的に社会を捉え続け、よりよい社会の在り方を構想していく力を育成する実践を継続していきたい。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 図書館と連携した新聞活用

札幌市立屯田北中学校　教諭　福井　剛史

## １．はじめに

本校は、札幌市北区の端に位置する、生徒数 660 人程度の中規模な学校である。少し行けば石狩市と接していて、札幌市と石狩市双方の魅力を感じられる地域でもある。

NIE 実践は実践指定校となる前からも、取り組まれており NIE の土壌はできている。しかし、新聞購読家庭は年々減少する傾向には歯止めがかからない。

そのような環境の中で、新聞に親しませること、新聞記事に触れさせることは効果があると実感している。

## ２.生徒の様子

本校は、新聞を購読していない家庭が多いが、校内に新聞が手に取れるように置かれていること、書写や美術の授業で新聞紙を使っていることから新聞紙を手に取ることは多い。そのような授業の中で、たまたま見つけた新聞記事に目をとおし興味を示す生徒も少なくない。

まな bell は教科にとどまらず、総合的な学習の時間にも活用しているので、新聞記事検索や新聞作成には慣れている。

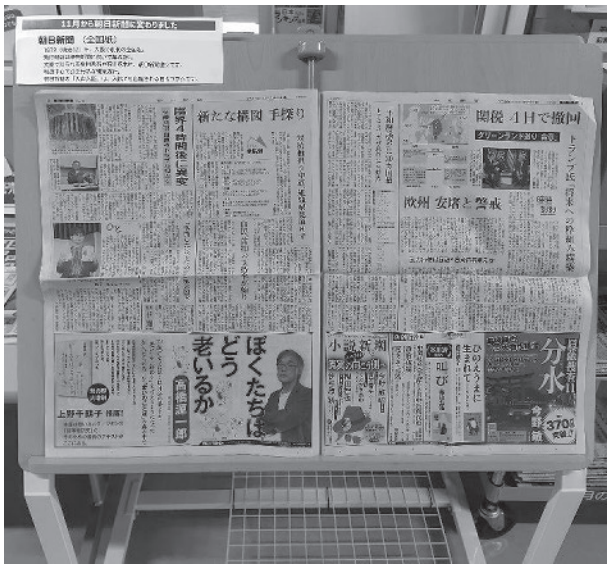
## ３．実践の内容

①学校司書と連携した取り組み

本校では学校司書が、階段の踊り場、図書館前の机・廊下を使って新聞を生徒が読みやすい環境を作っている。通りがかりに読んでいる生徒も数多くいる。

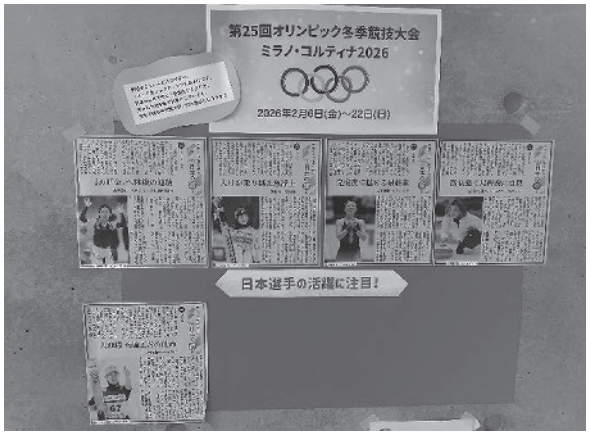
階段の踊り場に掲示されている記事
特に猫ピッチャーは人気がある

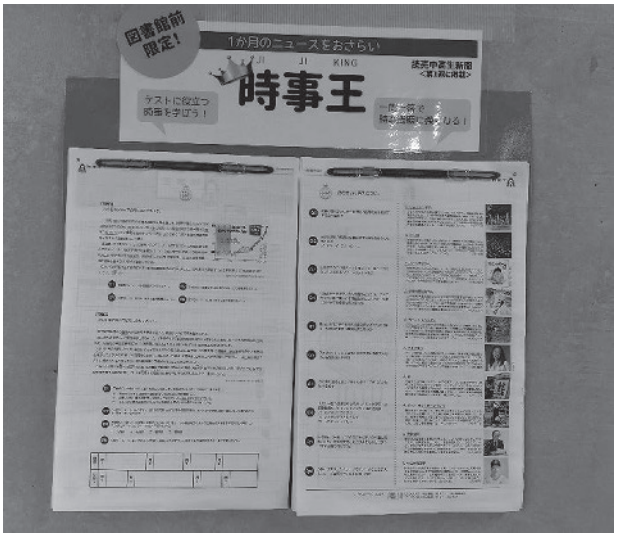
連載「シゴトビト」をファイルに入れて過去にさかのぼって読めるようにしている




図書館前の廊下に置かれた中高生新聞・KODOMO 新聞と全国紙の閲覧台

昼休みには多くの生徒が図書館に訪れるともに新聞を手に取っている姿がある。さらに廊下の壁を使って、時事ネタの新記事と中高生新聞付録の時事王で時事問題に対する興味を高めている。




②教員に新聞を使ってもらう取り組み

実践指定校として届いた新聞と学校で購読している新聞が同じ時には職員室の机に新聞を広げて、職員が読めるようにしている。

これによって、新聞を手に取ったり、読む職員が少しずつだが増えてきた。

③総合的な学習の時間におけるまな bell の活用

1，2 年生では総合的な学習の時間にまな bell を使って、新聞記事検索と新聞作成を行った。

作成した新聞を以下に紹介する。

屯田新聞　2025年(令和7年)12月5日(金)

# 指令管制員とは？

## 屯田新聞

発行元

### どのような仕事か

エマージェンシーコール（ディスパッチャー）の主な仕事は、主に119番の通報を受け、救急車や消防車の出動を指令する「指令管制員」です。

自分がなりたいなって思ったドラマの写真

通報者の話から状況を聞き出し、的確な情報を聞きだし現場に駆け付ける隊員へ、現場の状況を伝えます。

### 年収や就職先・働く場所

指令管制員が働く場所は、消防本部の情報センターや総務課指令センターなどです。名称は様々で、「消防庁情報指令課・消防局指令センター・警報指令室・指令センター・警報指令室・指令課」などがあります。

年収は約310～370万円ほどです。消防士の平均年収は約310～370万円ですが、指令管制員の年収は、地方公務員の給与構成データをもとに年収を算出すると、東京都消防庁の給料は約440万円ほどです。

指令管制員は、消防士の平均年収は約310～370万円ですが、指令管制員の年収

職業新聞　2025年(令和7年)12月9日(火)

# 職業新聞

## インテリアデザイナーについて

発行元

インテリアデザイナーは居住空間や商業空間（住宅、オフィス、店舗、ホテルなど）の内部空間を、美的かつ機能的にデザインする専門家。色彩感覚と造形力が大事な職業。なるための学習方法は専門学校に行く、大学、短期大学に行くという複数の選択肢がある。早く現場に出て専門技術を身につけたい場合は専門学校に行くという自分に合わせて学習方法が違う。日本国内においてインテリアデザイナーとして働くために必須の公的資格はありませんが、スキルや知識を証明するための民間資格がいくつかある。インテリアコーディネーター資格試験、二級建築士・一級建築士、インテリアプランナー、このような資格がある。

北中新聞　2025年(令和7年)11月25日(火)

# 北中新聞

## 国家公務員とは？

発行元

### 国家公務員とはどんな職業か？

国家公務員とは、国の行政機関（各省庁）などで働く公務員のことを言う。仕事の内容は所属する機関によって異なる。国家公務員には特別職と一般職があり、国会議員、裁判官、防衛省職員が特別職、それ以外が一般職。

国家公務員の仕事は大きく4種類に分かれ、次のようなものがある。（1）治安・外交・税金関係（2）農業・工業・社会福祉関係（3）労働・厚生・社会保障関係（4）教育・文化関係。国家公務員と一口に言っても採用された省庁、区分によって仕事内容は大きく異なる。原生労働省では厚生保護、雇用、年金、医療などに関する仕事のため、スペシャリストやプレッシャーを感じたり、新場数だったりと大変な職業だが、就職に際し気の影響を受けにくく、安定した雇用があり、健康保険、住居手当などの各種手当が充実しているなど、メリットも多い職業だ。将来の選択肢に入れてみてはどうだろうか。

色々な機関があり、そこで働く国家公務員もさまざま。

### 国家公務員になるには

国家公務員になるには、「国家公務員試験」に合格する必要がある。試験は学歴や職務内容に応じてA～Eの区分があり、筆記試験と面接試験を受ける。試験合格後は、希望する省庁や機関に応じて内定を得た者が正式に採用される。採用は、試験結果だけでなく、適性や希望や面接での評価を総合的に判断して決定される。官庁訪問までの試験は第二次試験までである。国家公務員には多くの職務があるため、仕事の内容を理解することが重要だ。

国家公務員は試験の難易度が非常に高く、受かってもすぐに国に関わる仕事のため、スペシャリストとなれるのいのは注意。管理以上の用に基せられていること、過去5年以内に懲戒免職された、日本国籍がない、暴力による政党等に加入している。

## ４．成果と課題

### （１）成果

本校の取り組みとして、学校図書館との連携は強みである。学校司書と教員が連携し、生徒が興味を持ちそうな記事を選び、掲示している。

お互いのセンスを生かしながら、1 人で取り組むよりも負担も少なく NIE 活動を進めることができている。

まな bell は教科の授業のみならず、総合的な学習の時間にも活用することで、過去の新聞記事にも興味を持つことができた。生徒の新聞（ニュース）に対する意識が変わって来ていると感じる。

### （２）課題

一方、課題としてまな bell の新聞づくりを複数の教員で指導したため、指導に差が出てしまったことがあげられる。新聞づくりに慣れている先生は、写真や図の配置など細かいところまで簡単に指導できるが、不慣れな教師は、既存のレイアウト通りの指導にとどまってしまう面があった。

次年度は、教員内でより細かな計画を共有して進めることとしたい。

また、まな bell の時間制限も課題である。家庭学習で取り組ませることが難しかった。いつでも使えるまな bell になることを望む。

## ５．おわりに

本校では、数年にわたり実践指定校として NIE に取り組んできた。新聞の紙をめくる経験、新聞を作る経験、それらは必ず生徒の力になると信じている。

次年度以降も新聞（新聞紙）の良さを感じさせる取り組みを考えていきたい。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 「情報」と「情報」の関係性と妥当性

札幌市立真栄中学校　教諭　遠藤　翔太

## １．はじめに

本校の実践は今年度で５年目である。「三角ロジック」を主とした実践を３年間行い、生徒の読む力と書く力の育成に努めた。昨年度は、文章を書く際の情報と情報の関係性として、「具体」と「抽象」について取り上げて資質・能力の育成に努めた。

今年度は、情報社会を生きていく子供たちにとって、未来の教育に必要な力として「情報を適切に選び取ること」を課題として取り組んだ。これは、普段目にしている情報の偏りや、自分の考えを伝えるための「根拠」の取り上げ方、必要な情報を集める際の妥当性が、これからの時代に必要な力だと考えたためである。この取組は、今年度だけで終わらずに、中学校３年間を通して深めていくものとしたい。また、学習活動で生徒が感じている課題を適切に取り上げ、学びを深めていけるようにしたい。

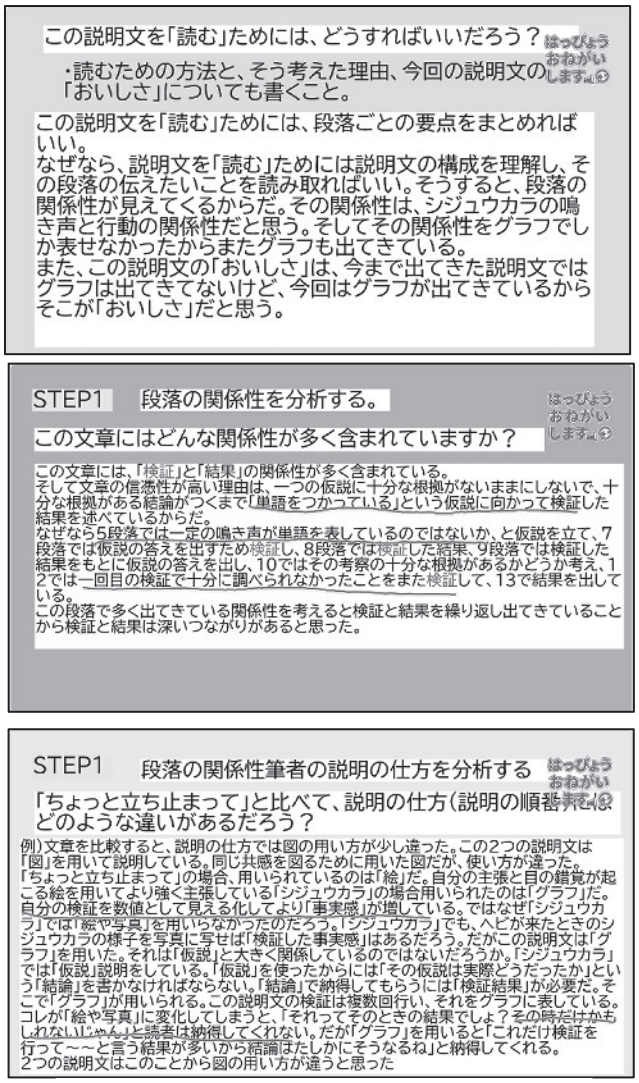
## ２.生徒の様子

現在中学１年生を担当しており、学年で約１５０名ほど在籍している。国語の学習に意欲的に励む生徒が多く、時には楽しみながら学習を進めている様子が見られる。一方で、自分の考えを表現することに課題を感じている生徒が多い。原因として、「意見」と「事実」の区別に難しさを感じており、情報と情報の関係性について理解に課題が見られている。「意見」と「事実」の情報と情報の関係性を入口にして、根拠の妥当性や正当性まで考えを深めていけるようにしていきたい。

## ３．実践の内容

### ①　情報の関係に気付く

新聞記事を用いた授業を行う前に、教科書の「言葉をもつ鳥、シジュウカラ」を用いて、「事実」と「意見」の関係性や、文章の構成について特徴に気が付いたり、理解を深めたりすることをねらった。




〈生徒Ａ　説明文の取組１〉

ちょっと立ち止まってとシジュウカラのまとめでは、
どのような内容や量の違いがあるのか

まず、ちょっと立ち止まってのまとめは計4つある。5, 7, 9段落のミニまとめと10段落の大きなまとめだ。5, 7, 9の内容を見てみるとこれらのまとめは直前の段落の内容をまとめているようだ。10段落では5, 7, 9段落の要約、結局何が言いたいのか、ということを書いている。つまり、ちょっと立ち止まっての5, 7, 9段落＝10段落というような事になり、量こそ多いが言ってることは同じ、というまとめになっていると考えた。そして、「そこで、ものを見るときには、ちょっと立止まって、他の味方を試してみてはどうだろうか」という文は提案という役目であるため、10段落は提案という内容でもあると思う。

次に、シジュウカラを見てみるとシジュウカラのまとめは17段落だと思った。17段落の内容は「筆者が思うこと」となっている。最後の「じっくり動物たちを観察してみると、まだまだ驚きの発見があるのだと思います。」は、これまで話していたシジュウカラの実験についてではなく、筆者が実験したうえで感じたこととなる。つまりこの17段落には筆者の感想が含まれているのだと思う。

このことから、シジュウカラとちょっと立ち止まってのまとめの内容は、文章の要約という点は同じで、ちょっと立ち止まっては提案、シジュウカラは感想、がふくまれているという違いがあるとわかった。

まとめってこういうのがまとめって言えるよね→これまでの文の要約と筆者の考えたこと、筆者が一番言いたかったことが含まれていること

〈生徒Ａ　説明文の取組２〉

これは、新聞記事と同様に段落ごとの関係や文章の展開が明確であることと、教科書という身近な教具を用いることで、新聞記事に向き合う前に「読み方」が見つついてほしい願いからである。

② 「まな bell」で新聞記事に向き合う

教科書の教材で「シジュウカラ」が取り上げられていたので、生物として関連のある「熊」を取り上げて授業を行った。これは、授業を行った時期に、新聞に限らずテレビなどでも報道されることが多かったことから、生徒が記事を選定した経緯がある。

教師側のねらいとして、熊に対する事件の報道や、熊とかかわりのある立場の考えなど、様々な角度からの記事が多いことで、最終的な目標の根拠の妥当性・正当性にせまりたいからである。

三笠のヒグマ駆除　任せて＊高崎さん　連盟友会最年少支部長に＊ハンター育成に力
2025/11/21 (金) 北海道新聞朝刊地方(空知) 17ページ 910文字

【三笠】元市地域おこし協力隊員の高崎梨桂（りと）さん（２６）が北海連盟友会三笠支部の支部長に就任し、ヒグマの駆除で中心的な役割を果たしている。連盟友会によると、道内７１支部で最年少の支部長だ。また、高崎さんは今春、クマの捕獲技術の講習や研修などを行う会社「ＧＯＥ－ＭＯＮ（ゴエモン）」を設立。「地域実情に応じた人材の育成に力を入れたい」と話す。

高崎さんは名古屋市出身。幼いころから動物が好きで、農業高校で犬や猫の飼育実習を学んだ後、酪農学園大学（江別市）に進学。エゾシカ着陸の調査手法などを学んだ。現場だけでなく現場を知りたいと、２０２２年４月に三笠市の地域おこし協力隊に着任し、鳥獣対策を担当してきた。

後継者不足が課題となる中、高崎さんが今年の春に支部長に就任した。

今年、市内でのヒグマ出没は８月３１日の捕獲期間終了時点で、１０月２８日までに１８件に上った。高崎さんは市や警察と連携して現場をパトロールするほか、箱わなの設置にも携わる。

９月末には、農家のビニールハウス内でスイカがクマに食い荒らされる被害が発生。高崎さんらは動物が通ると自動で撮影するカメラを設置し、２日後の夜にクマが再び現れたことを確認。ロケット花火で追い払い、その後、設置していた箱わなで捕獲したという。高崎さんは「カメラなどをうまく使えば、クマと鉢合わせするリスクを減らせる」と話す。

一方、クマを撃つ技量があるハンターは少ない。三笠支部でクマを撃つことができる人は８人で、動いているクマを仕留められるのは高崎さんを含め２人のみ。技術と知識に加え、クマの動きを読む感覚力と経験の積み重ねが必要だからだ。

高崎さんが設立した会社「ＧＯＥ－ＭＯＮ」では、クマの出没が続く冬場を中心に、年５回ほど講座を開いていく考え。高崎さんは「求められるクマの捕獲技術は、地域によってまったく違う。地域実情に合わせた講座を開き、ハンター不足に対応していきたい」と話している。（岡本緑）

【写真説明】道内最年少の猟友会支部長、高崎梨桂さん

【写真説明】ビニールハウスに入り込み、スイカを食べるヒグマ。動物などが通ると自動で撮影するカメラに写り込んだ（高崎さん提供）

トップ > 記事検索 > 検索結果 > 見出し一覧 > 記事詳細

文字 小 大 印刷　検索画面へ

「カムイ」の意味　世界観解説＊帯広百年記念館＊学芸員がアイヌ語講座
2025/11/28 (金) 北海道新聞朝刊地方(帯広・十勝) 14ページ 468文字

帯広百年記念館の博物館講座「アイヌ語から知るカムイとアイヌ文化１」が２２日、同館で開かれた。同館の笹ヶ嶺（かけはた）和歌学芸員（３９）が市民ら約４０人を前に、アイヌ語について解説しながらアイヌ文化について紹介した。

冒頭で、カムイは「人間にはない力を持っていて、人間の暮らしに深く関わり、何らかの機能を持っている存在」で、送り儀礼が行われないとカムイモシ（神の世界）へ帰ることができないといった世界観を解説した。

その後、カムイの代表格とされるヒグマとの関係について説明。アイヌ語では越冬中熊などで呼び方が変わることや、害獣り儀礼は三つの種類があることを紹介した。現代のクマとの関わりにも触れ「アイヌ民族は基本的に狩猟をやらなくなり、クマの行動も変化してきている」と指摘した。

来年度以降は、アイヌ民族がキツネをどのようなカムイとして考えていたのかをテーマに講座を継続開催する予定。（西山花台）

◇「カムイモシリ」の「リ」は小さい字

【写真説明】アイヌ語の意味からカムイや霊送り儀礼などについて解説する笹ヶ嶺和歌学芸員（小川泰弘撮影）

トップ > 記事検索 > 検索結果 > 見出し一覧 > 記事詳細

文字 小 大 印刷　検索画面へ

緊急銃猟へ情報交換＊江差でヒグマ対策会議
2025/11/27 (木) 北海道新聞朝刊地方(函館・渡島・檜山) 17ページ 413文字

【江差】檜山振興局は２６日、本年度２回目の「ヒグマ対策連絡会議」を同振興局で開いた。管内各町の担当者が月に実施された市街地に出没したクマを市町村の判断で駆除できる「緊急銃猟」のマニュアル作成状況などについて情報交換した。

クマが生息しない奥尻町を除く管内６町の担当者が出席。道側は国に対し、緊急銃猟により人身事故などが発生した際、ハンターの狩猟免許が剥奪されることがないようにすることなどを要望したことや、札幌市による今年の緊急銃猟の実施事例を紹介した。

各町の担当者らが非公開で意見交換。終了後に取材に応じた同振興局環境生活課の田中敏明課長は「檜山管内で緊急銃猟のマニュアルが公表できる段階まで進んだ町はないことがわかった。管内共外で完成したマニュアルの情報提供が欲しいという声があり、引き続き相談に応じていきたい」と話した。（阿部大彩）

【写真説明】管内の担当職員らが意見交換した「第２回檜山管内各町ヒグマ対策連絡会議」

生徒は、札幌市内で起きた事件であることも手伝って、熊の恐ろしさを早々に捉えていた。そこで、アイヌ民族とヒグマの関係が書かれた記事を取り上げた。そこから別の記事を探しはじめ、立場の違いによって主張が違うことに気が付いていた。また、ヒグマへの対策の記事を取り上げることで、地域住民の立場にたち、別の角度からの主張を捉えていた。

これらの記事を踏まえて、生徒は「主張」を支えるためには「関連の深い根拠」を使わないと伝わらない、ということに気が付いていた。そこから、「根拠」としてどうなのか、という声があがったため、別の根拠で主張を伝えることはできないのか検証することとした。

結果として、ほとんどの記事の根拠は妥当である、という結論に至った。しかし、根拠の適切さは、生徒がある程度の情報を保持している、または、その分野について明るいこ

とも条件として考えられるため、「ヒグマ」という生徒にとってそこまでなじみ深くないテーマでは、まだ図り切れていないように思われる。

STEP1　自分の選んだ新聞記事の、「情報」の関係性を捉える。

筆者がその関係性を多く含めた理由はなんだろう？どんな良いことがあるだろう？

今回の文章では、「主張」と「根拠」の関係性がある。
ヒグマに対する注意喚起についての主張と、それを支える根拠として、身近な住宅街にヒグマが出ていることを書いている。そうすることで、読んだ人は、ヒグマに注意しなきゃ、と筆者が伝えたいことが理解できる。「根拠」があることで、主張が単なる意見ではなく、説得力が増して「主張」になる感じがする。他の新聞記事と比べて思ったのは、「根拠」も「主張」と関係のあるものだからいいような気がする。

STEP1　筆者の説明の仕方を分析する

新聞記事を比べて、説明の仕方に違いはあるだろうか？

新聞記事を比較すると、文章の始まりで「事実」から始まるものと「意見」から始まるものの違いがあった。ヒグマの事件を伝える新聞記事では、何があったのかという「事実」から始まるものが多いような感じがした。ヒグマへの考え方を紹介している新聞記事は「意見」から始まっているものが多い。
事件を伝えることが目的なので、事実から始まって、文章の最後の方に「意見」が書かれているが、ヒグマへの考え方の記事は「意見」を先に書くことで、自分の伝えたい「主張」がはっきりするし、その後の根拠が目立つような気がした。

〈生徒Ａ　新聞記事の取組〉

## ４．成果と課題

### （１）成果

生徒が文章を読み取る中で、情報と情報の関係の理解を深める様子が見られた。また、教科書教材で読み方に対する理解を深めたことで、普段なかなか目にする機会が少なくなった新聞記事でも、情報の関係性や論理の展開に目が向いていた。また、新聞記事はその時期の応じた内容になっているため、生徒が楽しみながら学習活動を行っていたことも大きいように思う。

また、新聞記事が「ヒグマ」の記事が豊富であったことも手伝って、「主張」と「根拠」を組み替える学習活動が、「根拠の妥当性」に生徒が気付く大きな要因だった。新聞記事は一つの考えによらず、様々な立場からの主張（意見）があることが、とても有効だったように思う。これは、立場が違うことで、主張に至るまでの道筋や根拠との関係性を、慎重に読み捉えることができたためである。

### （２）課題

一方で、情報の妥当性・正当性に迫ることができなかったことは課題である。生徒の中に生まれた「問い」がそちらに向いていただけに、残念であった。生徒は、根拠の妥当性について気付く様子は見られた。しかし、今回の学習活動では、そこに迫ることはできなかった。原因として考えられるのは、情報の妥当性・正当性は、自分が表現する立場でないと考えることが難しいのではないか、と考えている。これは、自分にとって「必要な情報」として捉える必要がある、ということが大きいためだと考える。

ただ、生徒の気付きや考えが向いているのは事実なので、別の学習活動で引き続き学びを深めていきたい。

4回目

①今日行わかったこと・学んだこと・身についたことを一言で言うなら？

今日は新聞記事を4つ比べて読んだ。「意見」から始まるものと、「事実」から始まるものがあって、その後の文章の流れも違っていた。同じような「根拠」を書いている新聞記事もあったが、「主張」が微妙に違っていた。

②今日わからなかったこと（困ったこと）、次回への課題

同じ「根拠」で違う主張ができることはわかったが、違う「根拠」で同じ「主張」は難しいように思った。だけどまだ自信がない。

〈生徒Ａ　新聞記事の取組２〉

＜指導案・指導計画などの資料編＞

【単元の目標・指導計画（単元構成）】

Ⅰ「言葉をもつ鳥、シジュウカラ」〈４時間〉

※「事実」と「意見」などの情報と情報の関係を、段落同士の関係から捉える。

※筆者の論理の展開について、根拠を示しながら自分の考えを書く。

Ⅱ「まな bell」での、新聞記事の読み取り〈２時間〉

【本時の目標・本時の展開】

・段落同士の関係を捉えるための因果や具体と抽象、「根拠」と「主張」などの考え方について理解を深める。〔知識及び技能（２）ア〕

・段落同士の関係性やその並び順にかかわる筆者の意図について、自分の考えをもつ。〔思考力，判断力，表現力等 C（１）ウ〕

①「ヒグマ」について書かれた新聞記事を、３つ探す。

②選んだ新聞記事の、段落の関係性や論理の展開を読み取る。

③３つの文章を比較して、それぞれの特徴を捉える。

④３つの新聞記事の、「主張」と「根拠」を入れ替えて、根拠の妥当性について考える。

2025年度　ＮＩＥ実践報告

# 戦争と未来についての学びを深める新聞活用の実践

## ～新聞でつながる、教科横断的な平和についての学び～

芽室町立芽室西中学校　教諭　掛水成幸

### １．はじめに

本校は、十勝平野西部に位置し、６学級１４３名の生徒が学校生活を送っています。

今年度もＮＩＥ実践校の指定を受け、授業等での新聞記事の活用や新聞複数紙による閲覧コーナーの充実、新聞制作を継続させることができました。

今回の実践報告では、戦後８０年に関わって『戦争と未来』についての学びを深めるために行った『新聞を活用した実践』について紹介します。

### ２．実践の内容

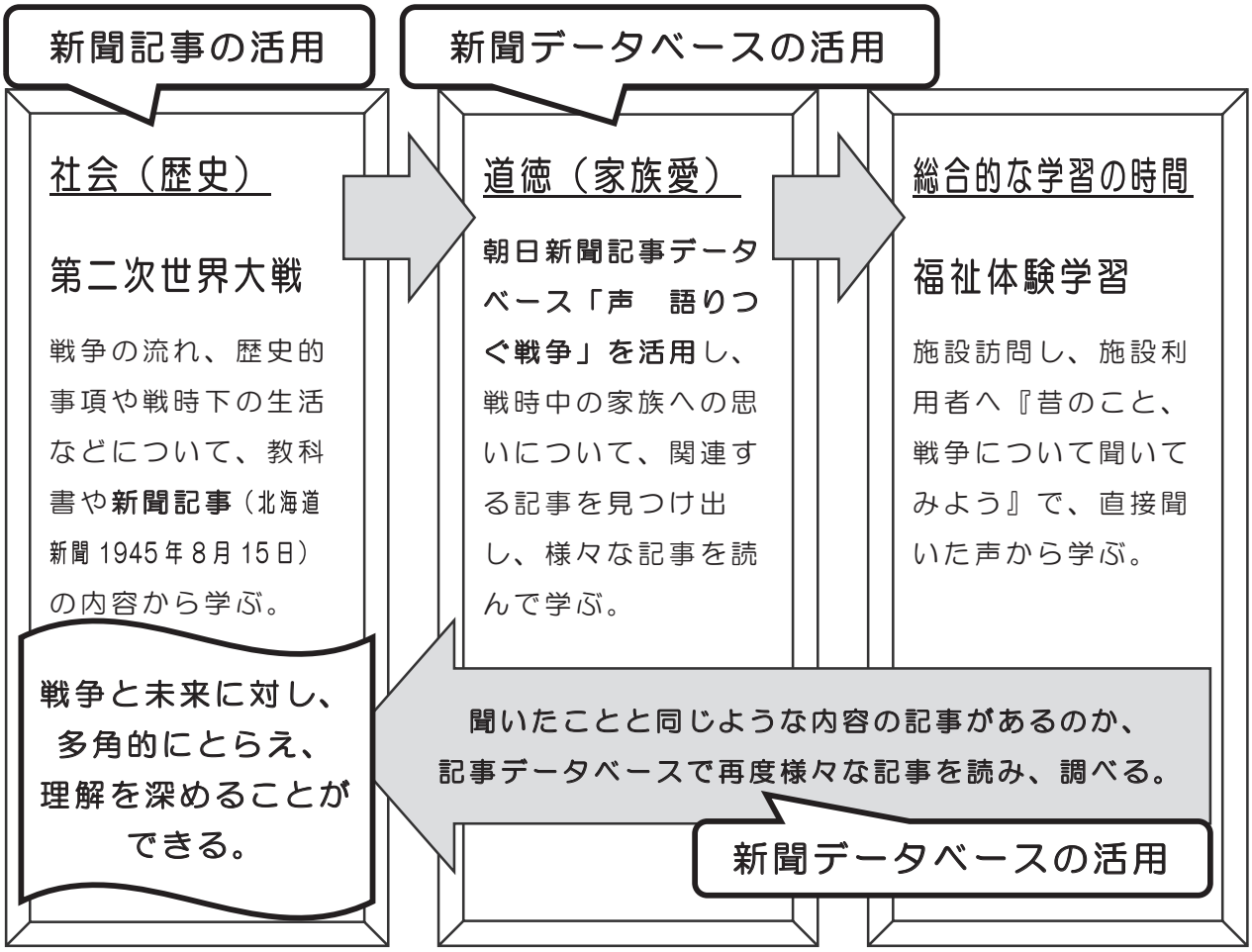
（１）社会科（歴史的分野）の授業

① 歴史の教科書から、戦争について学ぶ。

【第二次世界大戦】

満州事変、日中戦争、太平洋戦争を題材に、戦争の流れ、歴史的事項や戦時下の人々の生活などについて、教科書の記述内容や写真・グラフ等の資料から基礎的基本的な学習内容について学びました。

② 新聞記事「現代の視点で紙面化」から、戦争の状況や当時の様子について学ぶ。



【資料】北海道新聞 2025 年 8 月 15 日
（1945 年 8 月 15 日を現代の視点で紙面化）

日本敗戦 無条件降伏

北海道新聞

満州事変から15年

現代の視点で紙面化しました

日本人310万人犠牲

アジア諸地域2千万人

ポツダム宣言受諾

天皇が肉声放送

難解な言葉 人々頭垂れ

原爆3発目札幌が最優先

樺太・千島戦闘続く

【紙面を読んでの生徒の感想】

- 日本は何度も戦争をし、多くの人々を失ってきたということがわかった。こうした経験から日本は戦争をしない宣言をし、平和主義になったのかなと思った。
- 戦争が終わらせられたことがちゃんとした言葉で綴られていて、本当にあった話なんだと実感した。写真が当時の辛さを伝えていて、より見ていて悲しい気持ちになった。戦争は終わったけれどその戦争の被害は多く、生き残った人はどんな気持ちだっただろうと考えさせられた。
- 戦争で日本や他国にも多大なる被害が出たことを忘れてはならないと思うし、戦争を知り、二度としてはいけないということを再確認できた。
- 原爆三発目の投下についての記事を読み、札幌が第一候補になっていたことを知って驚いたし、戦争が続いていたら北海道はどうなっていたのかと考えると、とても怖くなった。
- 玉音放送についてわかりやすく、当時の出来事がよく伝わってきた。特に、教科書で習ったことだけではわからない放送内容や騒乱のことを知って驚いた。
- なぜソ連と日本軍の樺太部隊は終戦の詔令が発布されたにもかかわらず戦闘を続けたのか、なぜ自分勝手に領土を広げようとソ連は攻撃に動いたのか、そこが疑問に思った。

【この実践についての考察】

ポツダム宣言や玉音放送などの歴史的事項に当時の人々がどのように関わったのか、また原子爆弾が北海道にも投下が計画されていたことなど、教科書ではわからないことが掲載されていて、生徒には戦争がより身近なものに感じられ、より知識を深めることができました。

（２）道徳（家族愛）の授業

① 朝日新聞記事データベースを活用する。

▲朝日新聞記事データベース『声　語りつぐ戦争』

② 戦時下の生活の中の、家族への思いについて、様々な記事を読んで学ぶ。

▲記事データベースで記事を検索する生徒

【生徒の感想と、この実践についての考察】

- 戦争体験の重要性

「ユーチューブとかじゃわからない戦争を体験した人の実際に体験したことがたくさんあっていろんなことを知ることができた」というように、実際の体験談を通じて戦争のリアルな状況を理解できたことが強調されていました。

- 多様な視点の提供

「日本だけでない、アジアなどの太平洋戦争の様子も理解できるような投稿だった」と述べられていて、戦争に関する多様な視点や地域の体験が紹介されていることが評価されていました。

- 戦争の恐ろしさの再認識

「戦争がどれだけ悲惨だったかわかった」という感想から、戦争の悲惨さやその影響を深く理解することができたことが伝わりました。

- 次世代への継承の重要性

「戦争を体験した人はもうお年寄りの人たちばかりで次の世代に伝える人が少なくなっているが、この『声　語りつぐ戦争』を今の若い人たちやその後の世代が見ることで忘れられなくなっていられればいいなと思った」と、体験談を通じて次世代に戦争の記憶を伝える重要性が述べられていました。

- 戦争に対する意識の変化

「戦争はやっても何も得にならないし関係ない人まで苦しむのはどうかと思う」という意見から、戦争に対する意識が変わり、戦争を避けるべきだという強い思いが表現されていました。

このように、多くの生徒が、戦争の悲惨さやその影響を再認識できました。戦争体験の投稿を通じて得た知識や感情が多角的に表現されており、戦争の恐ろしさやその教訓を次世代に伝えることの重要性が強調されていました。

※この活動は新聞紙面に掲載されました。

【資料１】朝日新聞 2025 年 10 月 26 日

（３）総合的な学習（福祉体験学習）の時間の授業

① 高齢者へのインタビューから、戦争について学ぶ。

高齢者について学習したことをもとに、施設訪問し高齢者と交流しました。高齢者へのインタビュー『昔のことについて聞いてみよう』から、戦争のこと、戦争で食べ物など必要なものが少なく生活が大変だったことなど、高齢者の声から学びました。

高齢者との交流を通じて戦争や日常生活についての貴重な体験を共有することができました。生徒の感想では、対話を通じて得た戦争の実情や平和の重要性、歴史の継承についての気づきを見ることができました。

※この活動は紙面に掲載されました。

【資料２】十勝毎日新聞 2025 年 10 月 15 日

② 体験で学んだことをもとに再度調査し、戦争・平和に対する理解を深める。

直接聞いたことと同じ内容の記事があるか、記事データベースで再度調べました。

朝日新聞

声 語りつぐ戦争　TOP　関連記事　検索

今生きているのは闇米のおかげ

森本政幸さん　熊本県　88歳
2011年5月25日 紙面掲載　2020年11月25日 配信

玉音放送を聞いたとき、女学校に通っていた妹は「死んだほうがましだ」と物騒なことを言っていた。だが、長い間ひもじい思いをしていた私は「これで当たり前の食事にありつくことができそうだ」と、負けたことよりも食べるほうの安心感が大きかった。

【生徒の感想】

インタビューを通して、戦時中は食事がなくて、大変だったということがわかった。

記事データベースの「今生きているのは闇米のおかげ」から、配給だけでは生きていけず、食料を闇市から買い、それによって生き

ることができたと書いてあり、それだけ食料が不足していたことがわかった。

私たちは食事のありがたみや普段していることは当たり前ではない、ということを感じ、感謝し、戦争体験者が減少しているなか、若い世代が戦争の悲惨さ、二度と戦争をしてはいけないということを伝えなければならない。

【この実践についての考察】

様々な記事を再度読みかえすことで、戦争に対して多角的にとらえ、過去の戦争についてより実感することができました。多くの生徒は戦争についての理解と、これからの未来についての考えを深めることができました。

（４）戦争と未来についての学びを深める

こうした戦争についての活動を通して、生徒たちは次のように感じていました。

① 戦争の理解の深化

授業を通じて戦争の恐ろしさや過酷さを理解し、「戦争がどんなに恐ろしいものなのかということがとてもよくわかりました」と感じていました。

② 未来への願い

生徒たちは、戦争を経験している人々から話を聞き、戦争の恐ろしさを伝えていくことが大切だと考え、「戦争を完全になくすということは難しいが、なくしていくことは一人ひとりが他人に対しての思いやりがあれば徐々になくなっていく」という願いが見られました。

③ 次世代への継承

最後に、戦争の恐ろしさを次の世代に伝える必要性を強調し、「この授業は次の世代にも知ってもらうためにこれからも続けなければいけないものだと思いました」と結論づけています。このように、生徒たちは戦争についての理解を深め、未来への希望と使命を持っていることが伝わりました。

## ３．成果と今後　＜実践の考察から＞

今回は、社会科・道徳・総合的な学習の時間によるもので、教科横断的に行うことと確かな情報にもとづく新聞記事を活用することにより、戦争に対する理解を深め、戦争と未来について多角的に考え、平和を尊重することの大切さについて自覚する生徒を育成することができたと考えます。

こうした実践を行うにあたり、新聞社の方には記事の提供や授業の取材、紙面への掲載など様々な面で丁寧に協力していただきました。今後も新聞社と連携しながら新聞記事を活用した実践を行い、生徒の学びを深める取り組みを継続させたいです。

## ４．資料　＜新聞紙面に掲載されました＞

戦争体験の「声」学びに生かす

朝日新聞は連載に載った戦争体験をサイト「声 語りつぐ戦争」で無料公開している。直接聞くことが難しくなる中、戦争体験のテーマベースとして活用されている。

北海道芽室町立芽室西中学校。9月の道徳の時間に3年生がタブレット端末でサイトを開いた。「戦時の学校」「銃後の暮らし」などのキーワード、投稿の見出しや写真を手がかりに、関心を抱いた投稿を一つ選ぶ。

読んで感じたことや、今後どんな社会にしたいか、自分たちに何ができるかを記し、選んだ投稿を紹介し、話し合った。

生徒たちは自分が選んだ投稿の内容を紹介し、感じたことを伝え合った＝25年9月、芽室西中学校

サイトで無料公開

文中に出てくる人物は生徒と同世代も多く、共感したようだ。「国には1人の国民でも、家族にとっては代わりのいない大切な人」「生まれる時代が違ったら同じ境遇になっていたかも」「戦争のない社会にするため、互いの理解や尊重、選挙の重要性などを学べた」。

担当した掛水成幸先生は「過去が今の自分につながっていると感じられたのでは」と話した。

資料１　朝日新聞
（2025年10月26日）

戦争経験 熱心に聞く

芽室西中生 特養で高齢者と交流

【芽室】芽室西中学校（乙戸貴宗校長）の3年生30人が10日、特別養護老人ホーム「芽室けいせい苑」を訪れ、入所する高齢者と交流した。生徒たちは、高齢者から戦時中、戦後の話を聞く中で、今の暮らしがある尊さを学んだ。

総合的な学習の時間の一環で実施した。最初に、生徒たちが文化祭の発表のためにこれまで練習してきた合唱を披露。入所者30人は、校歌と合唱曲「大切なもの」を歌い上げた生徒たちに拍手を送った。

その後、生徒たちはグループに分かれて入所者と交流。「昔大変だったと」「若い頃楽しかったこと」などを聞かれた入所者たちも時折笑顔を見せながら、中学生との対話を楽しんだ。

戸田竜聖さん（15）は戦後の食糧の時代について話を聞き、「今のような白いご飯が食べられず、麦などを混ぜていたと初めて知った。戦争を経験している人は少なくなっているので、貴重な体験を教えてもらえた」と話していた。

施設訪問を終えた生徒たちは、地域貢献活動として、町内の歩道やJR芽室駅前、ビワカ公園でゴミ拾いをしながら学校に戻った。（佐藤周）

入所者の戦時中の話に耳を傾ける生徒たち

資料２　十勝毎日新聞
（2025年10月15日）

２０２５年度 NIE 実践報告

# 紙媒体・デジタル媒体の活用の実践

浦幌町立上浦幌中学校　　中村　宏喜

## ＊はじめに＊

本校では５年目の新聞提供事業を受けてのＮＩＥ実践となりました。

２０２３年度の実践が認められ、次年度当初の全道ＮＩＥ研究大会の折に、実践発表をさせていただく機会を得ました。

その際、次年度以降の課題としてあげた中に、「新聞電子版を活用した情報収集と整理」というものがありました。

今までの実践である紙媒体の新聞活用や新聞作りに加え、デジタル版の新聞記事の活用を新たに加えました。

今年度の国語科での実践を中心に、国語科を核とした横断的な学習（道徳、特別活動、学校行事）の実践例を報告します。

## 新図書室開設に向けて改装
### ～ 新聞等の閲覧 ～

本校は次年度より、地域の小学校とともに義務教育学校へ移行します。校舎は本校を活用するため、内部の改装が急ピッチで進められて来ました。その中でも、図書室は１～９年生までが活用するスペースに生まれ変わります。改装に向けての希望が通り、窓側は全面学習カウンターとなりました。

（右の写真➡）

そこで今年度は半分のスペースを活用し、実践指定校として提供される新聞の配置並びに閲覧スペースとして活用。そして３年前から各学年で実践を継続している「コラム視写」に関わる「コラムスペース」（⬅左の写真）を新設。教師側で生徒の興味が持もてそうなコラムを選定し配置しました。

## 記事だけではない新聞活用
### ～新聞広告・コラムの活用を通して～

（１）広告に学び広告を作る

国語の授業ですから「言葉」への着目・着想が大切になり、語彙を豊かにしていくことにも繋がる授業です。さらに、横断的な学習として、総合的な学習のまとめなどでパワーポイントなどを作るときにもインパクトのある言葉を駆使しますが、ここでの授業が大いに役立ってきます。

授業では、広告を作る要素として「ビジュア

ル」、「キャッチコピー」、「補助となる情報（言葉）」を中心に考えを広げていきます。

教科書では１・２点の例しか掲載されていません。これでは子どもたちの思考も広がりません。そこで提供されている新聞各社が掲載する「全面広告」が大変役立ちます。

半年かけて収集した新聞広告を壁一面に張り巡らし、じっくり観察させます。最初はやはりビジュアルが目に飛び込みますが、次第にキャッチコピーや補助となる文面との関連に思考が移り、自分なりに根拠をもって「これがいい」と判断していきます。

これらの学習の集大成として、最後は広告を創作します。次年度より義務教育学校となることを踏まえ、今年度は小学生にも分かりやすい「保健室の広告」をメインテーマに制作しました。

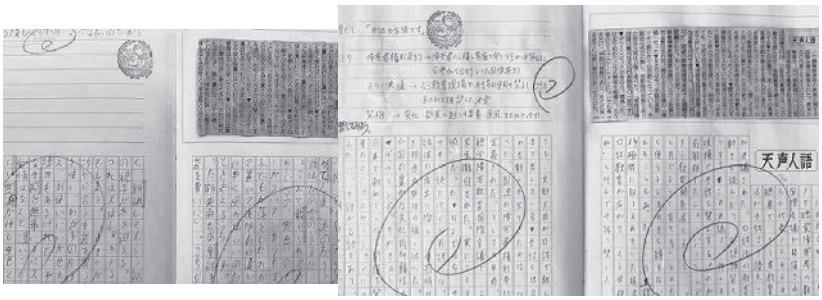
完成作品は保健室前の廊下に張り出され、学校訪問に訪れた小学生も見学していきました。また、養護教諭の計らい（呼びかけ）で、２・３年生が創作広告へのコメントを

書いてくれました。上級生は自分たちも通ってきた学習なので、それも踏まえエールのようなコメントを書き込んでくれました。

（２）「コラムの速読＆視写」から
批判的な考えを書く学習へ

一学期は、どの学年も朝日新聞社のコラム『天声人語』を１０分間で視写することを、週の初めに行いました。ただ、内容がよく分からなかったり、何を選んだら面白いのかも分からなかったようだったので、６月からは教師の方でコラムを選定しました。内容は、作家であるとか、北海道に関わること、子どもたちが興味のあることなどを取り上げました。　それとともに、何カ所かマーカーでポイントとなる言葉に印を付けていきました。このアシストは、生徒も興味のある言葉がすぐに目に入るので選びやすかったようです。

『天声人語』用のノートを活用したため、最初は天声人語が多かったのですが、慣れてくると他社のコラムも自分の興味・関心に合わせて選ぶようになりました。




２学期からは学年ごとに少しずつ内容を変えました。１年生は視写に加え、見出しを一カ所の言葉を使って作る。２・３年生は二カ所以上の言葉を組み合わせて見出しを作る。

３学期からは、２・３年生はコラムとともに記事も使いながら、視写に変えて、速読と内容から筆者の考えを捉えた上で批判的な文章を書くということを１０分間で書く取組にしました。学年差はありますが、３年生は、「２００字ほどの文を２段落で書く」こともできるようになっていきました。

## デジタル記事への挑戦
～記事⇒学び⇒思いを伝える朗読劇へ～

学校行事精選の波は、本校にも押し寄せてきました。行事を作る時間の短縮に加え、次年度から義務教育学校になるために文化祭的な行事は小学生も含めての時間分割となり、大きな精選が求められました。それまで行ってきた中学校全校生徒による演劇も中止となりました。

しかし、総合芸術とも言われる表現活動としての演劇活動は、生徒にとって横断的な学びの集大成を披露する活動でもあります。そこで、舞台狭しと動きのある演劇ではなく、『朗読（群読）劇』を提案しました。

５０分かかっていた時間も半分以下に。しかし内容は濃く、演じる（朗読する）側も受け取る側も充実した舞台をと考えました。

また、今年度は「戦後８０年」の節目の年でもありました。したがって、その新聞社も数年をかけて記事や特集を準備しており、時代や社会を学ぶ絶好のチャンスでもあると考えました。

そこで次のような流れを考え、実践に挑みました。

① 戦後８０年をふまえ「戦争と平和」について考える。
② 考える根拠のなる資料として、デジタル版の記事を活用する(NIE)
③ 全校生徒が各自で記事を選び、自分の考えをもち、仲間と考えを共有する(NIE)
④ ３年生が先に「戦争と平和」を感じられる詩を授業を通して学び、何点かを選 定し、群読をする脚色を創作する
⑤ 全校生徒で群読のパターンを変え、学園祭で『朗読劇』として発表する

以上の流れで、国語科・道徳・総合的な学習の時間をつないで横断的に学習したことを、行事（学校祭＝文化的行事）で発信することとしました。

（１）デジタル版の活用

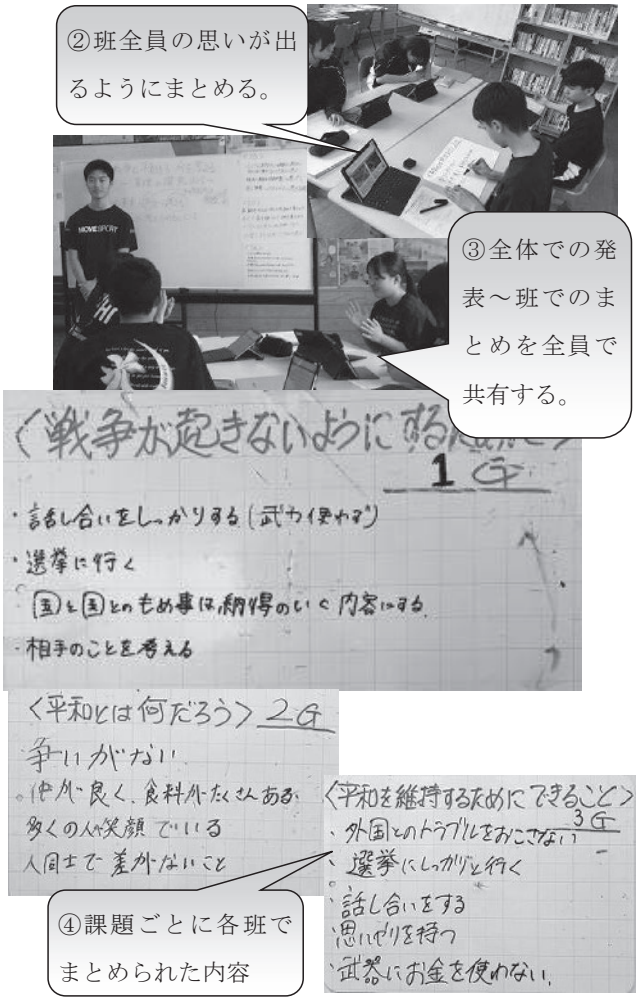
一時間の全校道徳で、「戦後８０年　戦争と平和から今を考える」と題して、朝日新聞社のデジタル記事を活用した授業でスタートしました。使用したのは、朝日新聞デジタル版『声語り継ぐ戦争』です。

この中の「開戦／軍隊・軍備／ 戦場で／銃後の暮らし／戦時の学校／戦禍／終戦の中から」より、生徒それぞれがこの中から一つの声を選び、文面を要約し、感想を書きます。

その後、学年の入り交じった３グループ（各４～５名）で発表をし合い３つの観点でまとめ、全体で発表し（往還）、最後に授業で考えたことをまとめました。

＜考える３つの観点＞
A　平和を維持するために私たちのできること
B　戦争が起きないように私たちができること
C　平和とは何だろう

①読み取った内容と感想を班内で発表し、個の思いを往還する




（２）詩の選定

今年度の各社の記事で目立ったのは、どの新聞社も「沖縄戦」のことを多く取り上げていたことでした。「コラム視写」において生徒が取り上げたコラムの中にも、いくつか見られました。そこで、道徳の時間にも少し触れたこともあり、「沖縄戦」が関わる詩も選考に入れました。

選定した一つは、３年生の国語教科書『語り継ぐもの』の中にある原民喜氏の『永久のみどり』。そしてこの詩を含む詩集『原爆小景』の中から３編、計４編を３年生が選びました。

そして「沖縄戦」に関わる詩として、毎年「沖縄戦没者追悼式典」で朗読されている児童生徒の創作した詩。この中から本校生徒たちにの年齢に近い作者で、言葉の分かりやすい詩を選択。今回は高校１年生が創作した『これから』という作品でした。

道徳での全校生徒で出された思いを柱に、選んだ５編の詩を３年生が手分けをして群読へ脚色しました。原氏の３編の詩は、学年ごとの朗読へ。それぞれの担当となった３年生が説明・指導とともに仲間に加わりました。
また、原氏の『永久のみどり』（短編）と高校生の創作した『これから』（長編）は、全校生徒で群読するように脚色しました。

学園祭当日は、小学生や保護者はもちろん、地域の方々にも聴いていただくことができました。取り上げた内容も、生徒たちの表現もしっかり伝わったようで、賛辞の拍手や声をいただくこともできました。

学園祭後の振り返りとまとめでも、再度デジタル版の「声　語り継ぐもの」を検索し読み直しました。まとめの中にも、自分たちが少しでも語り継いでいくことが大切であることも書かれていました。

＊＊ まとめにかえて ＊＊

私事になりますが、全国新聞教育研究大会において２度の授業公開をさせていただきました。１度目が、「『戦後５０年決議案』を報じた各新聞記事の比較読み」。２度目は、「『戦後７０年～戦争体験者の語り継ぐ声』の記事と、取材と執筆をした記者の講話を聞き、自分は何を伝えるか」という内容でした。

そして今年度、偶然にも「戦後８０年」の特集記事を活用した授業を、国語科を柱に横断的な学習として行うことができました。

また、模索しながらでしたがデジタル版の記事の初めての活用。ここからこれからの NIE のあり方を考えることもできました。新聞活用等の教育現場での NIE との出逢いに心より感謝し、報告と致します。

２０２５年度　ＮＩＥ実践報告

# 読解力、表現力を高めるための新聞活用

小樽市立北陵中学校　教諭　井浦　敦士

## １．はじめに

本校は、「小樽市立北山中学校」「小樽市立末広中学校」の２校が統合し、新設校としてスタートを切ってから９年目を迎えた。教育目標を「小樽の未来をつくる北陵生の育成」と定め、「深く学び、考え、表現できる生徒」「豊かに人とつながり、思いやりのある生徒」「たくましく心身を鍛え、自らを律する生徒」を目指すべき姿と捉え、故郷小樽のまちづくりの担い手となる生徒の育成に努めている。

しかし、全国学力・学習状況調査の結果から、本校の生徒は、国語科では「書くこと」「読むこと」の領域が全国平均を下回り、数学科においても理由を説明する問題で無解答率が高いなどの課題が明らかになっている。また「語彙」が不足していたり、言葉を紡ぐ術が未熟だったり、物事の発想の基となる「実体験」に乏しかったりと多くの課題を抱えている。

これらの課題を解決する一つの方法として、教育課程の中に、週に一度のＮＩＥタイムを設定し、「書く活動」「読み取る活動」に取り組み、９年目を迎えた。

## ２．実践の概要

### （１）教育課程への位置づけ

「小樽の未来をつくる北陵生の育成」を目指し、本校生徒の「書くこと」と「読むこと」の領域の課題解決を目指し、教育課程の中に「ＮＩＥタイム」を設定し、毎週金曜日に３種類のワークシートに取り組んでいる。

### （２）「１２のスキル」とＮＩＥ活動

本校の生徒に身につけさせたいスキルを「１２のスキル」として提示しており、学年ごとに重点を設け、教育活動全般で取り組んでいる。

| 目指す生徒像 | | |
|---|---|---|
| 深く学び、考え、表現できる生徒 | 豊かに人とつながり、思いやりのある生徒 | たくましく心身を鍛え、自らを律する生徒 |
| 目指す生徒像につなぐ生徒の「12 Skill」と育成を目指す資質・能力の３つの柱との関連 | | |
| 主体的に学ぶ力を育て、高める | コミュニケーション能力を向上させ、社会性を高める | 集団としての自治的能力を育て、高める |
| 1年生の重点 SKILL | | |
| S1 立腰ができる　知識及び技能<br>S2 場面に応じた正しい言葉遣いをすることができる　知識及び技能 | S5 自他を大切にし、敬意を払うことができる<br>思考力・判断力・表現力等 | S8 挨拶をし、時間を守り、場をきれいにできる<br>学びに向かう力、人間性等 |
| 2年生の重点 SKILL | | |
| S3 相手意識に立って自分の考えを表現し合うことができる<br>思考力・判断力・表現力等 | S6 様々な人や多様な考えを受け入れ、関わり合うことができる<br>学びに向かう力、人間性等 | S9 先を見通して計画的に行動できる<br>知識及び技能<br>S10 何事にも挑戦できる<br>思考力・判断力・表現力等 |
| 3年生の重点 SKILL | | |
| S4 人の意見を「聞き」自らの考えを深める」ことができる<br>思考力・判断力・表現力等 | S7 地域に貢献できる<br>学びに向かう力、人間性等 | S11 マナー・モラルを踏まえ建設的に考えることができる　知識及び技能<br>S12 自分のキャリア・生き方を考えることができる<br>学びに向かう力、人間性等 |

その中でもＮＩＥ活動と特に関わりの深い項目は次の二つである。

「主体的に学ぶ力を育て、高める」と

いう柱では、３年生の重点として、「人の意見を聞き、自らの考えを深めることができる」ことを挙げている。このスキルを身につけるために、ＮＩＥの活動を通して新聞記事から意見を読み取り、それについて自分自身の考えを持つ練習が大きく役立っていると考えられる。

また、「コミュニケーション能力を向上させ、社会性を高める」という柱では、２年生の重点項目として「様々な人や多様な考えを受け入れ、関わり合うことができる」ことを挙げている。ＮＩＥの活動を通して新聞を読むことで、多様な考えに触れる機会を得ることにつながっている。

### （３）「ＮＩＥタイム」で使用する３種類のワークシートとそのねらい

【①小樽についての記事を読んで考える】

北海道新聞 2025年5月13・15日

# 第３倉庫 文化観光拠点に

## NPO 利活用計画提言

### カフェやアトリエ 食、歴史、アート融合

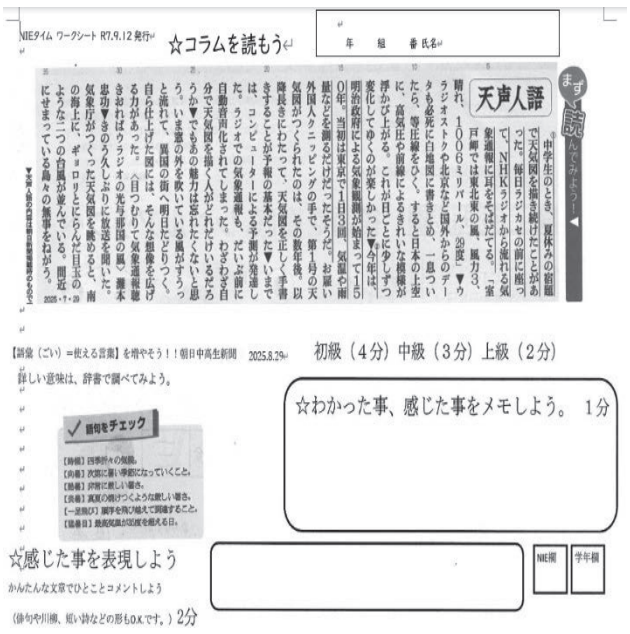
NIE×未来学 ～小樽の今を知り、小樽の未来を考える！～

（北海道新聞 2025 年 5 月 13 日）

【②コラムを読んで自身の意見を書く】

担当から ～文章作成に挑戦～ 上級編

天声人語 200字の使い方



NIEタイム ワークシート R7.9.12 発行

☆コラムを読もう

天声人語

初級（4分）中級（3分）上級（2分）

☆わかった事、感じた事をメモしよう。 1分

☆感じた事を表現しよう

（朝日中高生新聞 2025 年 8 月 29 日）

【③さまざまな情報に触れ視野を広げる】

このワークシートはhttps://nie.hokkaido-np.co.jp/でダウンロードできます

NIE　年　組　名前　道新でワークシート

# 「二地域居住」釧路市が力

## 空き家活用向け調査

## 東京の企業と交流会

【釧路】釧路市は本年度、都市と地方に生活拠点を持つ二地域居住の促進に向けた取り組みを本格化させる。夏の涼しさや「花咲ガニ」など本州の人たちにアピールし、地域活性化につなげる狙い。市内の空き家の活用に向けた調査などを実施するほか、5月には東京でスタートアップ企業や大手企業と交流会を開く。

二地域居住促進はこうした取り組みを強化するもので、釧路市は3月、日高管内浦河町、胆振管内厚真町とともに、国の補助を受けて先導的な取り組みを進めることになった。

釧路市は、長期滞在者向けに、図書館の利用が可能になるほか、65歳以上が博物館や展望台の入館料が無料になるなどの特典カードを発行できた。今後は住民票を移さず、繰り返し滞在する人が住民サービスを受けられる「第2住民」とする仕組みを検討するほか、マンスリーマンションなど滞在設備の手配システムを構築に向けた調査も進める。市は空き家バンクを設置するなどの受け入れ体制を整えるとともに、市外に引っ越す人を減らすための魅力を発信するなどの取り組みを進めていくとしている。（田嶋里彩）

市は4月、市内に空き家や空き店舗を所有する個人・法人を対象に、二地域居住用への転用に関する意向調査を始めた。今後の物件情報に役立てる方針。同28日には民間企業を交えて会合を開き、地域貢献策などによって自己実現を図りたい人たちを取り込む重要性を共有した。

釧路市での長期滞在は、首都圏が主なターゲット。5月20日には東京で、スタートアップ起業や大手企業の新規事業担当者らと交流会を開催する。釧路との接点づくりや二つの拠点を組み、市は4日に上場して人（ビジネス者除く）を長期滞在者として「呼べる

## 「夏涼しい」「　A　」首都圏にPR

滞在者の9割は60代以上が占め、冬場は宿泊施設が足りないなどの課題もある。市は空き家やビジネスが目生していない観光客の春の魅力も知ってもらおうと、今年新たに「花咲ガニ」をPRするポスターを500枚作成。観光地で無分転換しながら「二地域居住を進めて、経済効果などを市民に還元したい」としている。

二地域居住の促進に向け、観光地や図書館などの受け入れ体制づくりなどを進めるかどうかを話した。＝5月5日、釧路市

2025年5月5日（月）朝刊　全道版　5ページ　（記事は再編集しています）



このワークシートはhttps://nie.hokkaido-np.co.jp/でダウンロードできます

NIE　年　組　名前　道新でワークシート

（1）空欄Aにあてはまる言葉を記事の中から４字で探し、抜き出して答えなさい。

（2）釧路市が発行している「特典カード」にはどのような目的があると考えられますか。次の中から最も適切なものを１つ選びなさい。

ア．市民の買い物を促進するため
イ．観光客に釧路の産業を知ってもらうため
ウ．観光客を市民に変えるきっかけにするため
エ．若者に本をたくさん読ませるため

（3）釧路市が二地域居住を進める主な目的として最も適切なものを、次の中から1つ選びなさい。

ア．空き家を使って地域の活性化を図るため
イ．観光地の人気を高めるため
ウ．市外に引っ越す人を減らすため
エ．住宅を高く売るため

（4）次のＤさんとＥさんの会話文にある空欄①に、あなたの住む地域のアピールポイントを50字程度で書きなさい。

Ｄ：釧路市みたいに、わたしたちの地域でも二地域居住を受け入れたら、いろいろいいことがありそうだよね。
Ｅ：うん。もしそうなったら、どんなところをアピールしたい？
Ｄ：うーん、たとえば（　①　）っていうのは、けっこう自慢できると思うな。
Ｅ：なるほど、それなら他の地域の人にも来てみたいって思ってもらえそうだね。

（北海道新聞 2025年５月５日）

【ワークシート①～③のねらい】

| | ワークシート | ねらい |
|---|---|---|
| ① | 小樽についての記事を読んで考えるワークシート | 自分たちのふるさとである小樽について考える。 |
| ② | 新聞のコラムを読んで、文章を書くワークシート | 読み取ったことについて自分の意見を持ち、それを的確に表現する力を身につける。 |
| ③ | さまざまな記事を読み、情報を読み取るワークシート | 幅広い社会の動きに視野を広げ、情報を的確に読み取る力を身につける。 |

今年度は、3種類のワークシートに絞り、取り組むこととした。厳選することによって、生徒にそれぞれのねらいを意識しながら取り組むことを期待して設定している。

### （４）日常的に新聞を目にする環境作り

新聞を取っていない家庭が年々増えていく中、生徒が新聞に触れる機会をなるべく多く持つことができるように、図書室には常に新しい新聞を、複数紙おいて閲覧できるようにしている。また、下段には昨年度と同様の形でバックナンバーを設置している。

（図書室の新聞コーナー）

### （５）「どうしん記事データベースまな bell」の活用

北海道新聞の「まな bell」では、過去の新聞記事をキーワード検索することができるため、課題に応じた情報収集や、生徒の興味関心に応じた自主的な情報収集活動を行うことができている。

社会科では、授業中の短い時間で、授業内容に応じた新聞記事を検索する場面を設定している。そうすることで、「今、学習していることが実際の社会ではどのように報道されているのか。」という客観的な視点を持つことができると考えている。

国語科では昨年度に続き、タブレット端末を利用して、興味・関心を持った記事について、自分の考えをまとめて作文を書く活動を行った。作文作成や作文提出についても、「まな bell」を利用して幅広い時間に取り組むことができるため、その日の新聞を読んで興味を持った記事をもとに作文を書き、その日のうちに作文を提出する生徒も多く見られた。

国語科や社会科に関わらず、他教科においても「まな bell」を活用できる場面がないかを探し、具体的な活用方法について検討を重ねていきたいと考えている。

## ３．今年度（９年目）の成果と課題

ＮＩＥを通して付けたい力は主に、

①インプットする力（速く、正確に読み取る力）、

②まとめる力（キーワードを基にイメージする力）、

③アウトプットする力（思いを分かりやすく伝える力）の３点である。

①については、難しい語句の補足説明などが必要ではあるものの、毎週の取組を経ることで、すばやく読めるように成長していく姿が見られる。

②については、文章の内容が自分たちにとって身近ではない話題等は要点を掴みかねている生徒が見られる。回数を重ねることで内容理解が進む様子が見られている。

③については、課題がある。新聞記事を読むことで内容を理解することができたが、そこから自分の思いや考えを持てなかった生徒達も多くいた。これからも新聞記事を通して多様な考え方に触れることや、仲間との意見交流を行うことで、自分なりの根拠を持って考えを書くことができるようになっていけるようにしていきたい。

週一回の取組ですぐに力がつくものではないため、次年度についても複数の取組を継続・発展させることで生徒達の読解力・表現力を伸ばしていきたい。

2025年度　NIE実践報告

# 世の中と子どもたちをつなぐ新聞学習

## ～「教室での学び」をイメージ化する「新聞での学び」～

安平町立早来学園　教諭　片 岡　鉄 也

《はじめに》

教室で学ぶことには、新聞やニュースで報道されていることが少なくない。しかし、子どもにとって、教室で学ぶ世の中の出来事と実際の出来事との間には「距離」がある。それ故に、世の中の出来事と自分を「つなぐ」ことができず、「他人事」になってしまう。

「教室での学び」が「新聞での学び」をイメージしやすくしたり、逆に、「新聞での学び」が「教室での学び」を目に見えるものにしたりする。この２つの学びが双方向に作用することで、世の中のイメージ化を図り、子どもたちの手に「世の中」を届けるために、授業での新聞活用に取り組んだ。

本報告では、①新聞を活用した主体的な学習、②新聞に関心をもつ国語学習、③報道から振り返る震災学習について報告したい。

《実践報告》

### 1．新聞を活用した主体的な学習

(1) 活動の概要

〔目的〕

６年生の社会科教科書では、基本的人権や税金など身近な政治に関することや、少子高齢化や町づくり、そして、災害からの復興など、住民や自治体が取り組んでいる現代の課題について取り扱われている。そのため、世の中で起こっている出来事に目を向けることは、主権者として自分の町をどのような町にしていきたいのか考えていく上で、新聞を活用することは非常に有効な手立てとなる。

そこで「読売新聞教育ネットワーク」の「読売新聞ワークシート通信」を利用し、いま社会で何が起きているのか、教科書で学習した内容と「今」とを「接続」させることで、主体的に学ぶ姿勢、ひいては主権者として意識を高めていく第一歩とした。

〔手順〕

①毎週水曜日、高学年でも取り組めそうな内容のワークシートを３枚選ぶ。

②１枚のプリントにまとめ、印刷して配り、取り組む。

〔12月・１月分のワークシート記事内容〕

| 日付 | 記事見出し |
|---|---|
| 12/ 3 | 国際連合 80年 |
| | 10大ニュースを選ぼう！ |
| | 陶器製湯たんぽ 身も心も温かく |
| 12/10 | 秘境感満ちた看板 人気に |
| | 海賊版 配信サービスに賠償命令 |
| | サルも夢気分 |
| | ＜たのしい英語＞be up to |
| 12/17 | 史上最も暑い夏 |
| | 「シマウシ」にイグ・ノーベル賞 |
| | 富士山　初冠雪 |
| | Sumo returns to London's Royal Albert Hall |
| 1/14 | わらって わらって（今年の干支） |
| | 輪島塗 次代へつなぐ(能登地震２年) |
| | 太宰府 願う人波 |
| | Students re-create 19th-century recipes |

読売新聞
ワークシート通信

2025年12月3日

★★★　国際連合　80年

年　組（　　）名前

サイン

教育ネットワーク

◆今年は国際連合ができて80年の節目です。国連の役割や活動について考えてみましょう。

国連は、1945年10月に創設されました。第2次世界大戦が終わった約2か月後のことです。たくさんの犠牲を出した戦争を反省し、世界の平和と安全を守るために作られたのです。日本は56年に80番目の加盟国になり、今では193か国が加盟しています。

国際連合80年

（2025年11月20日　読売KODOMO新聞より）

第2次世界大戦の反省から生まれた国際連合（国連）の大きな使命の一つは、平和と安全を守ることです。その中心的な役割を担うのが「安全保障理事会（安保理）」です。

ある国が他国から侵略を受けた場合は、状況を調査し、解決方法などを話し合います。メンバーは15か国。アメリカ、ロシア、中国、イギリス、フランスの5か国からなる「常任理事国」と、2年ごとに交代する「非常任理事国」の10か国で構成されています。日本は昨年までの2年間を含め、過去に12回も非常任理事国になりました。

大切なことは15か国で話し合って決めますが、常任理事国のうち1か国でも反対すると否決されてしまいます。このため「大きな国の動きが強く働きすぎる」と批判もでています。

【1】国連は、どんな目的でつくられ、どのような役割があるのかを、記事から読みとって書きましょう。

【発展問題1】国連で、以下のような活動をしているのは、なんという機関ですか。調べて書きましょう。

・新型コロナウイルスが流行したとき、対策を考えた機関　（　　）

・紛争などで、住むところを失った人たちに食事を提供する機関　（　　）

【発展問題2】国連に小学生として提言するとしたら、どんなテーマをとりあげたいと思いますか。自分の考えをうらに書きましょう。

©The Yomiuri Shimbun

教育ネットワーク　教育関連情報は kyoiku.yomiuri.co.jp で

読売新聞ワークシート通信は、「読売新聞」や英字紙「The Japan News」に掲載されたさまざまな記事に、問題と解答記入欄をつけたワークシート教材。国語、社会、英語などの教科に合わせる形で、難易度が異なる５枚がセットになっている。

### (2) 活動の振り返り

〔成果〕

・新聞記事を通して、世の中で起きている様々な出来事の関係性を発見できた。
・新聞記事を読むことで、教科書で学んだ内容を振り返ることができた。

〔課題〕

・小学校と中学校の学習内容には、重複していることが多い（例えば少子高齢化）。小学校で学習し、新聞記事で関心を広げていった児童が、中学生になって少子高齢化を学んだときに、小学校での新聞活用がつながるように、小中のカリキュラムの連携を図っていく。

〔生徒の振り返りから〕

・教科書で勉強した政治のことが新聞記事になっていたので、記事の内容がよくわかりました。
・新聞を読んで、米がなぜ値上がりするかわかりました。授業でお米のことを勉強したら、すぐ値段のことがわかると思いました。

## 2. 新聞に関心をもつ国語学習

～新聞の紙面づくりの工夫を知ろう！～

### (1) 活動の概要

〔目的〕

昨年度、この紙面で、中学校での学習内容が、実際の社会ではどのようにおこっているのかを「知る」場面では全国紙を、学習内容を深める場面では小学生新聞を活用し、学習目標に応じて使い分ける実践を報告した

しかし、新聞購読している家庭も少なくなってきた昨今、新聞に普段から親しむことは難しくなってきた。

そこで、小学校４年生国語の「新聞を作ろう」の単元で、実際の新聞記事の紙面を読んで、どんな工夫がされているか調べ、新聞に関心をもつ機会とした。

〔手順〕

①新聞を見て、紙面にはどのようなことが書かれているか知る。

（新聞名・発行日・発行者・見出し
写真・絵・図・表など）

②グループで話し合って、記事の見せ方を考えたり、知らせたいことが、読む人に分かりやすく伝えたりするためには、どのような工夫がされているか考える。
③新聞の紙面づくりで工夫されていることを参考にして、新聞をつくってみる。

(2) 活動の振り返り

〔成果〕

・実際に新聞を作ることで、読む人に一番知らせたい記事が、目立つところに割り付けられることを知り、世の中で今注目されている出来事が何であるか新聞紙面から読み取れるようになった。

〔課題〕

・　今回は、国語の授業だけであったが、新聞にふれる機会を増やしていくことで、世の中で起こっていることに興味や関心をもてるようにしていきたい。

## 3. 報道から振り返る震災学習

～２つの被災地から考える防災学習～

（修学旅行事前学習）

(1) 活動の概要

本学園は、9年生（中3）の修学旅行で、東日本大震災で強い揺れと津波によって甚大な被害が生じた宮城県（石巻市南浜地区と大川地区）と岩手県（釜石市鵜住居地区と宮古市田老地区）を隔年で訪れ、震災学習を行う。令和8年度は、岩手県を訪問するので、その事前学習として新聞を活用した震災学習に取り組んだ。

〔目的〕

① ハザードマップの想定を超える津波による被害にあった釜石市鵜住居地区。しかし、多くの子どもたちが自らの命を守ることができた（「釜石の出来事」）。当時中学生だった語り部の方と震災当時の避難経路を歩きながら、防災学習に取り組む姿勢について考える。

② 明治、昭和の三陸大津波により壊滅的な被害を受けた田老地区。その後、完成した防潮堤は、町全体を囲む総延長2、433m、高さ10mで、「万里の長城」と呼ばれていた。しかし、181人の死者・行方不明者を出した。このとき、田老地区住民に何が起こったのか。イマジン（想像）することで、「津波てんでんこ」の意味を考える。

〔手順〕

① 震災当時の新聞を掲示し、修学旅行で訪問する釜石市と宮古市が東日本大震災でどのような被害にあったか知る。

犠牲「万単位に」
河北新報
宮城知事認識
避難者、6県で45万人超
石巻一変 街の顔浸水、市民ぼうぜん
M9.0に修正 気象庁
福島第1原発
3号機も炉心溶融
建屋に水素、爆発懸念
女川で放射線測定値上昇

河北新報 2011年3月14日

② 自分たちが修学旅行で歩く鵜住居小学校児童と釜石東中生徒が 、震災当時、実際に避難した経路を地図で確認する。なぜ、目指した避難場所が変わっていったのか、当時の中学生の考えをイマジン（想像）する。

③ 小学生と中学生が避難していた様子を写した写真を提示。フォトランゲージの手法を取り入れ、「小学生と中学生」

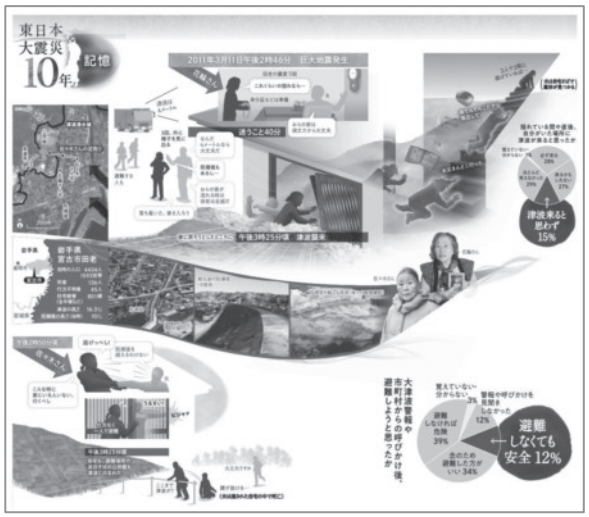
「子どもたちの避難する様子を立ち止まって見ている大人」「車で子どもたちとは反対方向に走る車の運転手」がそれぞれどのようなことを思ったり、話したりしていたか、その時の表情や聞こえてくる声をイマジン（想像）し、吹出しに記入する。

鵜住居小児童と釜石東中生徒の避難する方向と車の進行方向がちがうことに着目。児童生徒が防災学習で学んだ「津波三原則」について考えた。

④　鵜住居地区で津波の犠牲となった162人が避難した「防災センター」の新聞記事を提示。なぜ、犠牲者を出してしまったのか考える。

消防署出張所や研修室を備えた鵜住居地区の「防災センター（震災後）」（朝日新聞 2024 年 3 月 10 日）

⑤　宮古市田老地区には巨大防潮堤があったが、多く住民が津波の犠牲になったのはどうしてか、新聞記事の住民アンケートから考える。




「大津波警報や市町村からの呼びかけ後、避難しようとおもったか」という質問に対して、「避難しなくても安全」と回答した人が 12%いたことを新聞から考えた。（読売新聞オンライン）

⑥　釜石東中の生徒が、震災前、防災学習で学んだ『津波三原則』が、どうして自分たちの命、他者の命を守ることとなったのか考える。

(2) 活動の振り返り

【成果】

・同じ場所であっても、「助かった命」と「失われた命」があり、その分かれ道となったのが、人間の心理的要因によるものであることに気づくことができた。

・「いつも」自分の頭で考えることが、「もしも」の時に、自分や他者の命を守ることにつながることがわかった。

【課題】

・「震災学習の学び」と「各教科の学び」を結び、9 年間の義務教育の中で、横断的に子どもたち防災を学べるカリキュラムが必要である。

【生徒の振り返りから】

・災害をなくすことはできないけれど、被害を小さくすることできることがわかりました。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 義務教育学校における新聞の活用

## ～発達段階を考えたデジタルとアナログの融合を目指して～

札幌市立義務教育学校福移学園　教諭　福本　勇太

### １．はじめに

本校は、北海道札幌市の東区に位置しており、各学級１学年、全校児童１２６名の小規模特認校である。また、令和５年度に札幌市初の義務教育学校「札幌市立義務教育学校福移学園」として新たなスタートを切り、今年度で開校３年目を迎えた。学校教育目標「自然を愛し　互いに認め合い　未来を切り拓く　児童生徒の育成～９年間の連続した学びを通して、自立した児童生徒の育成を図る～」のもと、「Fukuism（自立した人になる・思いやりのある人になる・発信できる人になる）」を合言葉にさまざまな活動に取り組んでいる。

### ２.児童生徒の様子

本校は、義務教育学校で小規模特認校のため、ほぼ変わらぬメンバーで９年間を過ごすことになる。環境が変わらないため安心して学校生活を送れる一方で、ずっと一緒だからこそ集団をよりよくしていこうという意識や社会に参画しようとする意識を高めていくことが難しい実態があった。また、情報収集＝インターネットという意識が強く、全てインターネットで解決しようとする姿も見られた。そこで、新聞を活用することで社会を知り、社会に目を向け、社会に参画しようとする子どもたちになってもらいたいという思いと、様々な方法を用いて情報を集め、集めた情報を取捨選択して活用できる子どもたちになってもらいたいという思いから、NIE 実践指定校として取組をスタートした。今までの取組を通して、少しずつ新聞が子どもたちにとって身近なものになり、いろいろな学年で新聞が活用されるようになってきた。そこで、今年度は、１～９年生の発達段階に合わせて、新聞紙をどのように活用できるか、デジタル新聞をどのように活用できるかを探ることにした。

### ３．実践の内容

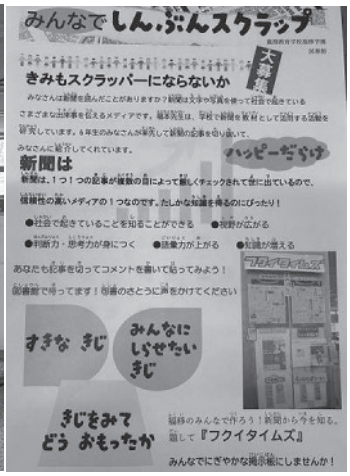
#### （１）日常での活用

①　新聞に触れる「場の設定」～新聞コーナー～

新聞を活用していくためには、まずは新聞に触れ、新聞が子どもたちにとって身近なものになることが大切だと思い、３年前に新聞コーナーを設置した。今年度は、その新聞コーナーをリニューアルし、ただ新聞を置いておくのではなく、記事の内容が見えるようにした。また、設置場所も教室前ではなく、より多くの児童生徒が通る廊下に変更し、誰もが気軽に新聞を持って行けるようにした。

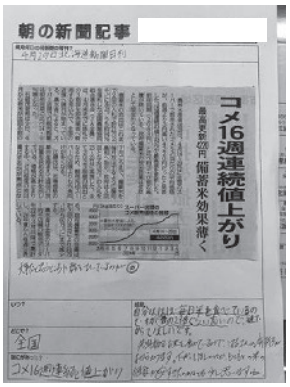
②　新聞に触れる「場の設定」～フクイタイムズ～

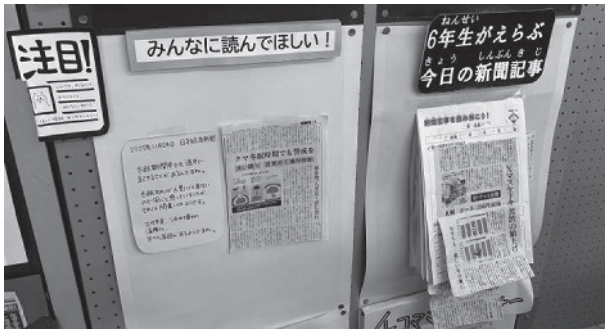
学校司書さんと連携し、多くの児童生徒が利用する図書室にも新聞に触れる場「フクイタイムズ」を設けた。記事の読み比べ、６年生が選ぶ今日の新聞記事、全校児童生徒が選ぶみんなに読んでほしい記事、４コマ漫画など、多くのコーナーを作ることで、さまざまな角度から新聞に触れることができた。




③　新聞に触れる「時間の確保」～新聞記事紹介～

６年生は、毎朝、日直の当番活動として「朝の新聞記事紹介」に取り組んだ。新聞コーナーにある各社の新聞の中から、自分が興味をもった記事を切り抜いてワークシートに貼り、記事の要約と感想を発表し合うことで、一年でたくさんのニュースに出会うことができた。発表後は、図書室の「フクイタイムズ」にワークシートを貼っていただき、全校で共有できるようにした。



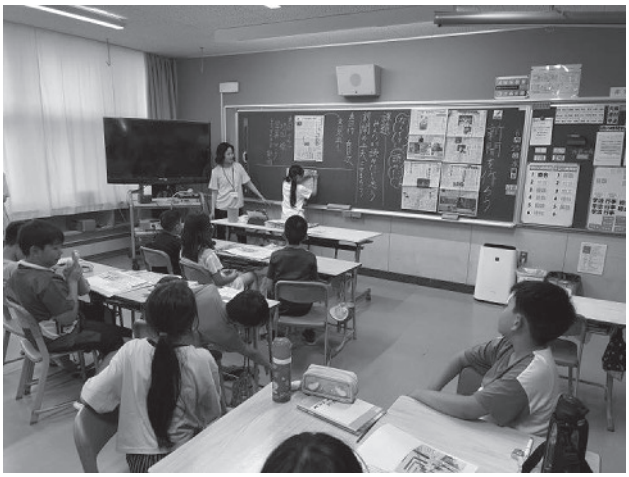

## （２）授業での活用

④　２年生学級活動「係活動」の実践

２年生は、係活動で「新聞係」を作り、新聞を読むだけでなく、新聞で情報を発信する活動をした。興味のある新聞記事の切り抜きを集めてその記事の魅力を伝えたり、図書館に新聞係コーナーを設置したりして全校に向けて発信した。

⑤　４年生国語科「新聞を作ろう」＋社会科「ごみはどこへ」の実践

４年生は、国語科「新聞を作ろう」の学習で新聞紙を活用した。実際の新聞をじっくりと読み、書いてある内容や工夫を見付け、新聞の特徴や書き方を学んだ。その学びを生かして社会科「ごみはどこへ」の時間に新聞を作成し、「小学生新聞グランプリ」に応募した。



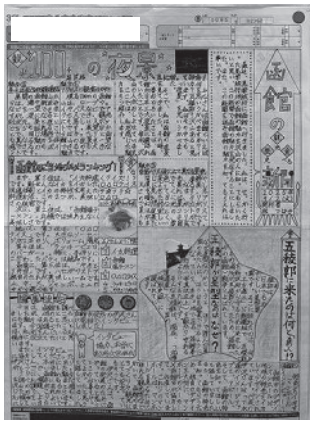
⑥　５年生国語科「新聞を読もう」の実践

５年生は、国語科「新聞を読もう」の学習で新聞紙を活用した。４年生の時に学んだことを確認したあと、複数の新聞社の記事を読み比べることで、どんな違いがあるのか、どうして違うのかを考え、目的に応じて読むことが大切であることを学んだ。その学びを生かして国語科「みんなが使いやすいデザイン」の時間に新聞を作成し、「小学生新聞グランプ

リ」に応募した。

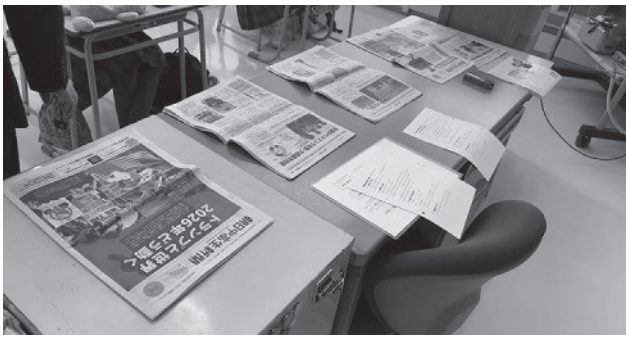
⑦　６年生総合的な学習の時間「北海道の観光大使になろう」の実践

６年生は、総合的な学習の時間「北海道の観光大使になろう」の学習で、「総合の学習を通して分かった北海道の魅力をたくさんの人たちに発信したい」という思いから、新聞を作成し、「小学生新聞グランプリ」に応募した。４年生、５年生での学びが、「新聞で発信したい」という思いに繋がり、新聞作りにも生きていた。



⑧　９年生社会科「わたしたちと国際社会の諸課題」の実践

９年生は、社会科「わたしたちと国際社会の諸課題」の学習で、課題を考える際の一つの資料として新聞紙を活用した。



### （３）まな bell の活用

①　６年生「NIE タイム」

６年生は、週に一度、朝の時間に「NIE タイム」を設定し、まな bell を開いて今日の一面や気になった記事を読む時間を確保した。

②　４年生社会科「地域の伝統と文化」の実践

４年生は、社会科「地域の伝統と文化」の学習のまとめで、まな bell の新聞作成機能を活用した。紙の新聞ではなくデジタル新聞にしたことで、より相手に伝わる新聞にしようと何度も内容を修正し、納得のいく新聞を作り上げようとする子どもたちの姿が見られた。また、新聞作りに苦手意識をもっている子も自分に合った型を選ぶことができるので、最後まで前向きに取り組むことができた。

## ４．成果と課題

### （１）成果

①　新聞活用の広がり

４年間の取組を通して、新聞の活用が少しずつ学校全体に広がり、新聞が先生や子どもたちにとって

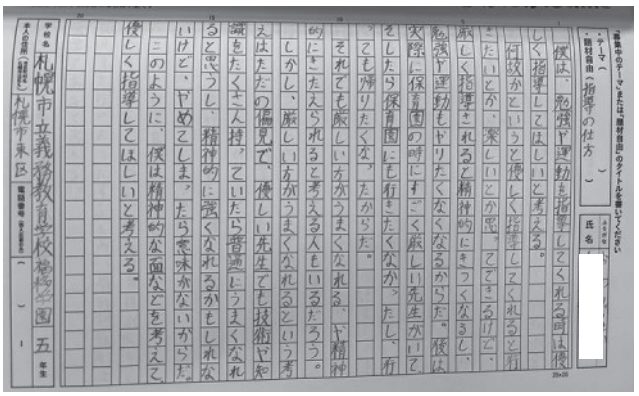
身近なものになったことで、日常の中で当たり前のように新聞を活用する子どもたちの姿や授業の中で当たり前のように新聞を活用する先生たちの姿が見られるようになってきた。

② 新聞紙もデジタル新聞も活用

さまざまな学年、教科で実践してきたことで、発達段階を考えて新聞を活用するとは、低学年は新聞紙で、高学年はデジタル新聞でということでは決してないということがよく分かった。どの学年においても、「デジタルかアナログか」ではなく、「デジタルもアナログも」という意識をもつことが大切であり、必要に応じてどちらかを選択して活用していくことで、デジタルとアナログを使いこなす子どもたちになっていくのだと感じた。学年が上がるにつれて、その選択肢できる場面が増えていくのだと思う。

③ 社会に参画しようとする意識の高まり

昨年度に続き、今年度も２～６年生の全ての児童が「小学生新聞グランプリ」に応募した。また、５年生は、国語の学習で学び、考えたことを発信しようと「ぶんぶん time」にも応募した。新聞を通して社会に興味をもち、社会を知り、社会について考える機会が増えたことで、学校の中で学びを完結するのではなく、学校で身に付けたことを生かし、学んだことや考えたことを地域や札幌市の方々に発信しようとする子どもたちの姿が見られるようになった。「自分たちにも社会のためにできることがある」と、自ら社会に参画しようとする意識が高まってきたように感じる。



## （２）課題

① 学校全体で取り組むためのカリキュラム整理

新聞の活用が広がり、どの教科のどの場面で活用できるかが見えてきたのは成果だが、それは先生方がそれぞれ取り組んでくれたおかげであり、結局、各学年で新聞を活用できそうなときに活用するという担任任せの取組になってしまった。学校全体で取り組んでいけるように、どのような力を付けていくのかを明確にし、そのためにどの教科のどの場面で新聞を活用していくのかを考え、今後、カリキュラムを整理していきたい。

②情報スキル、情報リテラシー、情報モラルの育成

社会参画を意識して新聞を活用してきたが、これからの社会を考えると、情報スキル、情報リテラシー、情報モラルの育成も欠かすことはできない。新聞を通して、それらをどのように育成してくのか。こちらも全教職員で考えていきたい。

## ５．おわりに

４年間の取組を通して、新聞が子どもたちにとっても先生たちにとっても身近なものになってきた。紙には紙のよさがあり、デジタルにはデジタルのよさがある。紙にもデジタルにも触れることで、それぞれの違いが見え、よさが分かってくる。最近は、新聞紙を購入していない家庭も多く、新聞に触れる機会をいただける NIE の取組は大変有難い。それぞれの違いを理解し、「デジタルもアナログも」という意識をもってこれからも積極的に新聞を活用していきたい。

２０２５年度　ＮＩＥ実践報告

# 朝活動の時間を利用したＮＩＥ活動

富良野市立樹海学校　教諭　佐藤　一博

## １．はじめに

本校は、富良野市の南東部に位置する広大な自然林を有する東京大学北海道演習林に隣接する東山地区に開設された義務教育学校である。令和４年４月に「樹海小学校」と「樹海中学校」が統合され義務教育学校として開校した。ＮＩＥ活動においては、旧樹海中学校での実践を基本に５年生から９年生で実施し、今年度は４年目の取組となる。新聞を活用して、情報にじっくり向き合い主体的に読み解く力の向上を目指すこと、また、社会に興味をもち、それをよりよくしていこうとする課題意識や学習意欲を高める活動に努めた。

## ２．児童生徒の実態とＮＩＥ活動の目的

本校は、前期課程１６名、後期課程８名、あわせて２４名の小規模校である。義務教育学校であることから１年生から９年生が同じ学び舎で生活をともにし、行事や総合的な学習の時間等では全校児童生徒で活動する機会が多いことが本校の特色でもある。少人数であることで、一人ひとりの学習活動が十分に確保され、授業での発言や発表する機会が多いため、堂々と発表できる力が身に付いている。

一方で、全国学力・学習状況調査の結果から、「グラフや文章などの複数の情報から自分の考えを表現すること」「理由を問うこと、理由を記述すること」を苦手としていることが明らかになった。そこで研究主題を「自分の考えを表現し、共に深め合い高め合う児童生徒の育成～主体的な学びを目指した指導の工夫を通して～」と設定し、児童生徒の育成に努めている。

主体的に自分の考えを表出するための基本的な能力として、「読むこと」や「根拠となる情報を収集し活用する能力」が必要となる。そのため本校では各教科の授業だけではなく、ＮＩＥ活動を朝活動に取り入れ、読解力、表現力、情報活用能力の向上を進めている。

児童生徒は、北海道ＮＩＥ推進協議会から提供していただいている新聞から、見出しを見たり、記事を読んだりしながら、興味や関心がある記事を選択している。初めに選んだ理由（根拠）を記入し、次に記事について感想や意見を記入している。翌週には、自分が選んだ記事と感想を発表している。

このように、相手に自分の考えが伝わるように文章を作成し、自分の考えをわかりやすく発表する力を養っている。

今後も、児童生徒の読解力、表現力、情報活用能力の向上とともに、社会への関心を高め、自分ごととして考えを深める活動として「ＮＩＥ活動」を継続していきたい。

## ３．実践の内容

① 取り組む時間と場所を明確に設定する。

【指導案】

１．ねらい　・新聞を読むことを通じて、時事への関心を高めるとともに、情報を取捨選択する力を伸ばし、子どもの思考力や読解力を養う。

２．対象学年　・中等ブロック（５～７年）、高等ブロック（８～９年）

３．活動日時　・毎週木曜日の朝の学習時（８：０５～８：２０）に実施

４．活動内容　・新聞記事から興味のある内容についての感想や意見をまとめる。（隔週Ａ）
ワークシート「朝の新聞」にまとめる。→ｉＰａｄで撮影する。
・前週まとめた「朝の新聞」について発表し、意見を交流する。（隔週Ｂ）
発表時間は３０秒程度。→発表後、ワークシート掲示。

５．活動のながれ

| | 児童生徒の活動 | 教師の活動 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 隔週Ａ | ①図書室に新聞を取りに行く<br>・図書室の新聞棚から新聞を選び教室へ<br>②興味のある記事を選び、感想や意見をまとめる。<br>・ワークシート「朝の新聞」に記入する。<br>③発表準備・片付け<br>・発表内容を考える。<br>・ワークシートと新聞をｉＰａｄで撮影する。<br>・新聞を返却する。 | ①一面や、気になる紙面を参考に選ぶよう指導する。<br>②学年の発達段階や個人の興味に合わせて、記事選びや記入方法についてアドバイスする。<br>③発表原稿などのアドバイスをする。 | ①新聞は、１人１部を持っていく。<br>②ワークシートの枠内に収まるように記入する。<br>③発表練習時間の設定はなし。各自で準備する。 |
| 隔週Ｂ | ①発表会<br>・発表する。→質問に答える。<br>・発表を聞く。→質問する。<br>②担任の話を聞く。<br>③ワークシートを掲示する。 | ①発表会<br>・質問は、学級の実態に応じて実施する。<br>②発表会の講評<br>・話し方や取り組み方などについて評価する。<br>③まとめ<br>・きれいに掲示されているか確認し、指導する。 | ①発表することをねらいとするため、質問は児童生徒の実態に応じて実施。<br>②担任以外でも可能。<br>③個人ごとにファイリングする。 |

本校では、年間を通して朝８：０５から８：２０の１５分間を「朝活動」と位置付け、「学力・体力向上」の基礎となる「朝読書」「朝運動」、そして「ＮＩＥ活動」を設定し活動している。

ＮＩＥ活動は、５年生から９年生が２週間を１サイクルとして取り組んでいる。１週目では、新聞記事を読んで、ワークシートに感想や意見をまとめる。２週目は、まとめた内容を30秒程度で発表する。このように、発表練習の時間などは設けず、児童生徒が主体的に準備や発表を進められるようにしている。

### ②　新聞の選定

ＮＩＥ活動は、前記の通り毎週木曜日に実施している。限られた時間の中で活動を円滑にするために、児童生徒が手に取りやすい図書室前に新聞棚を設置し、新聞を身近に感じる環境を整えている。

新聞社別に発行日順に並べ、一面記事の取り上げ方の違いや時事情報等を一目で比較しやすくし、児童生徒が興味のある新聞を選べるようにしている。

### ③　まとめ作業

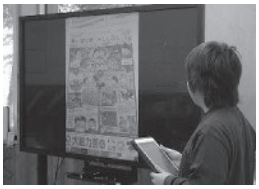
ＮＩＥ活動は、新聞記事から興味のある内容について感想や意見をまとめ、まとめた感想を発表し意見を交換している。本校のＮＩＥ活動は、１年を通して実施するため、継続できるよう無理のない取組として実施している。そのため、感想用紙はできる限り簡素なものとし、二種類の感想用紙から選択して記述量を調整できるようにしている。

### ④　発表

発表は、学年の実態に応じて柔軟に行っている。読んだ新聞をモニターに映し出すことで、記事の内容を共有しながら発表している。

また、本校は小規模校のため、人数の少ない学年では他学年と合同で実施するなど、多様な意見が交流できるよう工夫して進めている。

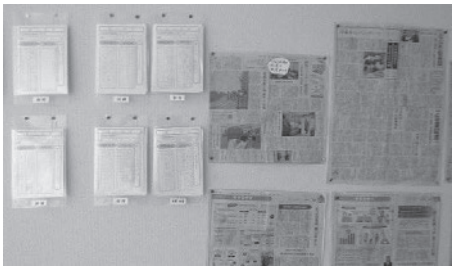
発表後は、時間の関係で意見交換の時間を確保することができないが、質問があれば答えたり、担任が補足説明を加えたりして、児童生徒の好奇心を育んでいる。



「まだ解決していないいじめが２３．９％もあることを知り驚いた。解決する方法が早く見つかってほしい。いじめを他人事とせず、真剣に考えていきたい。」「『多孔性金属有機体』の発見は、地球温暖化対策に期待されている。さまざまな大学と協力して長年研究してきたことが評価されるのはロマンがあると思った。」（児童生徒の感想より）

### ⑤　掲示・記録

発表後は、他の学年のまとめも交流できるよう、廊下に「ＮＩＥコーナー」を設置して掲示している。また、過去の自分の記事を読み返せるようにファイリングしてまとめ、次年度に引き継げるようにしている。



⑥　朝活動以外での新聞の活用

朝活動での取組だけでなく、国語科の授業や他教科の調べ学習などでも新聞を活用できるように、資料の整備を行っている。特に本校では、学校司書が精力的に環境整備や指導に関わっているため、スムーズな取組を進めることができている。

国語科の授業では、学年に応じた新聞の読み方や活用の仕方について指導を行っている。社説や投書などを参考に意見文を書くときに必要な情報の収集や書き方を学習したり、新聞の構成を学習し自分たちで新聞を書く作業をしたりしている。

他教科においても、テーマに沿った記事を選ぶアドバイスや、過去の新聞記事をスクラップ資料にまとめて提供するなど、学校司書と連携しながら児童生徒の興味に合わせた新聞の活用をしている。

また、地域に根ざした記事を切り取って掲示したり、生徒が毎朝登校したら通るホールに新聞を置いたりすることで、新聞に対する児童生徒の関心を高めている。立ち止まって記事を読む姿や、ページをめくって新聞を読んでいる児童生徒の姿が見られる。

## ４．成果と課題

①成果

今年度は、これまでの実践で得られた成果をもとに、これまでの実践内容を継承しつつ、児童生徒や担任の負担にならず継続していける活動を目指してきた。

令和元年度よりＮＩＥ活動に取り組み、本校の研究主題である「自分の考えを表現し、共に深め合い高め合う児童生徒の育成」に大きな成果が得られている。特に、自らの考えを発表する力や理解する力の向上が見られた。また、現在の社会情勢への関心の高まりが、他の学習への相乗効果や進路選択のきっかけとなっている。

活動内容を２週間（まとめる・発表）に分けて行っているため、短時間で活動でき、負担の少ない状態での継続が可能となっている。記事を画面に映し発表することで、聞いている児童生徒も記事の内容や個人の考えを共有することができている。また、自分が選ばなかった記事を知ることで、未知の世界との出会いや興味関心の広がりにつながっている。

さらに朝活動以外の時間にも積極的に新聞を活用したり、ＮＩＥ活動の成果や新聞の掲示を行ったりすることで、児童生徒が新聞を身近に感じるようになっている。

②課題

新聞を読む時間が限られているため、朝活動の時間だけでは比較読みをする機会が確保できない。情報を取捨選択し、整理し、批評的に読み取る「情報リテラシー」を身につけるためには、国語科をはじめとした各教科の指導計画の中で、新聞を活用する場面を増やす必要がある。

また、学年の実態に応じて記事の選択や内容の理解に学級担任のサポートが必要な場面もある。さらに、漢字の読みや語句の意味の理解など、記事の内容を理解するために必要な基礎学力の定着が必要な児童生徒がいるため、段階に応じた丁寧な指導や小学生新聞の活用など、個に応じた記事の選定が求められる。

## ５．おわりに

開校以来継続しているＮＩＥ活動を通して、児童生徒は大きな成長を遂げている。社会の出来事に関心をもち、気になった出来事をさらに詳しく調べるなど「主体的に学習に取り組む意欲と学習習慣の確立」が見られている。今後も、「継続できる活動」としてＮＩＥ活動に取り組み、教育に新聞を取り入れながら児童生徒の成長を促していきたいと考えている。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 日常的な新聞への親しみを通して

北海道小樽水産高等学校　教諭　阿部　淳一

## １．はじめに

北海道小樽水産高等学校は、1905（明治 38）年に創立され、120 年の歴史と伝統を誇る水産系専門高校である。本校は「海洋漁業科」「水産食品科」「栽培漁業科」「情報通信科」の４学科を設置し、実習船を用いた航海や食品製造、水産資源の育成、高度な通信技術の習得など、職業高校として実学を重んじる「体験型教育」を教育の柱としている。

本校の生徒は、目に見える実習や技術習得には高い意欲を示す一方で、抽象的な概念を扱う座学や文字情報の処理に対しては苦手意識を持つ傾向が強い。しかし、卒業後に水産・海洋産業の最前線で活躍するプロフェッショナルとなる彼らにとって、気象の変化や国際情勢、流通経済の動向といった「社会の動き」を正確に把握する力は不可欠な資質である。

情報通信技術の発展により、生徒を取り巻く情報環境はスマートフォンによる断片的なＳＮＳや動画視聴が主流となった。しかし、海という広大なフィールドや複雑な流通社会で生き抜くためには、フェイクニュースを見極める確かな目と、多角的な視点から物事を考察する思考力が求められる。

そこで本年度は、教科書に載っている「知識」と実習で学ぶ「技術」を、現在進行形の社会課題と結びつけるためのメディアとして「新聞」を位置づけた。国語科での基礎的な語彙力向上と、公民科での社会事象の構造的理解を両輪とすることで、専門高校での学びをより確かなものにするためのＮＩＥ実践に取り組んだ。

## ２.児童（生徒）の様子

令和７年度現在、生徒数は１年次 103 名、２年次 107 名、３年次 121 名の合計 343 名である。生徒の多くは学習に対して苦手意識を持つ傾向があるが、実習や体験型の活動に対しては高い関心を示し、積極的に取り組む姿が日常的に見られる。

とりわけ、興味を持ったテーマには粘り強く取り組む傾向があり、その有効な手段としてＮＩＥ（教育に新聞を）の実践に取り組んできた。本年度は、生徒が情報に対して主体的かつ日常的に関わることを目指し、以下の３つの柱で実践を展開した。

## ３．実践の内容

### （１）実践のねらい

現代の生徒は、ＳＮＳやポータルサイトのトピックを通じて断片的な情報に触れる機会はあるものの、新聞を手に取り、社会の諸課題を構造的に捉える機会は極めて少ない。本校では、生徒が言葉の力を高め社会を読み解く力を養うため、国語科・公民科で NIE を実践した。特に、普段、新聞やニュースに自ら触れない生徒に対して、確かな情報の本質を見極めるメディア・リテラシーや、一つの事象を多様な立場から考察する「複眼的な視点」を育むことを強く意識した。

（２）取組内容と生徒の変容

①国語科における取組

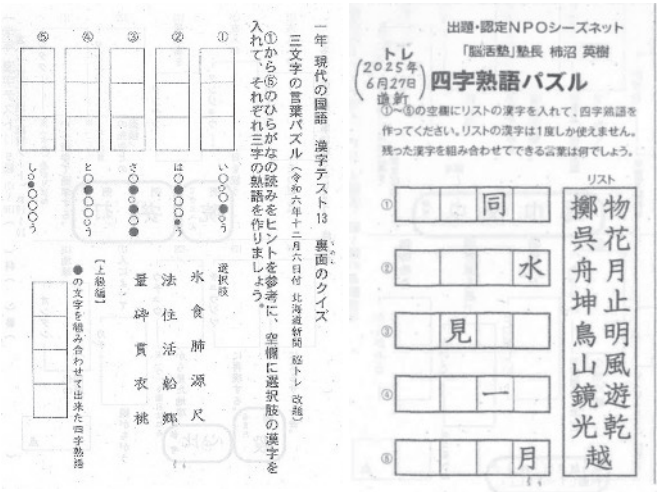
□「脳トレ」による語彙力向上

授業内で実施する 10 問程度の漢字テストの裏面を活用し、北海道新聞の「脳トレ」（四字熟語しりとりやパズル等）を「漢字クイズ」として掲載したり、コラムや新聞記事などを載せ、教科書以外の文章に触れる機会を作ったりした。

〇経緯

令和６年度までは、授業の導入として、副教材を利用しての漢字テスト（10 題）を実施していた。正確に丁寧に書くことを狙いとしているため、「止め、はね」の指示や画数などを余白に示し、ミスを防ぐようにしていた。問題を解く時間に個人差が見られるため、漢字テストの裏面に北海道新聞の「卓上四季」を印刷し、早く終わった生徒が退屈しないような工夫をしてきた。しかし、年々、生徒の語彙力は低下し、漢字テストに真剣に取り組む生徒が減少してきているように感じられた。また、裏面のコラムを積極的に読もうという生徒もあまり見られなくなったため、令和７年度からは言葉に興味を示すような取組に変えてみた。

【１年「現代の国語」裏面;『漢字クイズ』】




【実践例①】

漢字テストの裏面に北海道新聞『脳トレ』を『漢字クイズ』として出題する。

・方法

漢字テストを早く終えた生徒から順次取り組ませ、テスト終了後、ペア学習で採点。最後に全体でクイズの解答を確認する時間を設けた。

【実践例②】

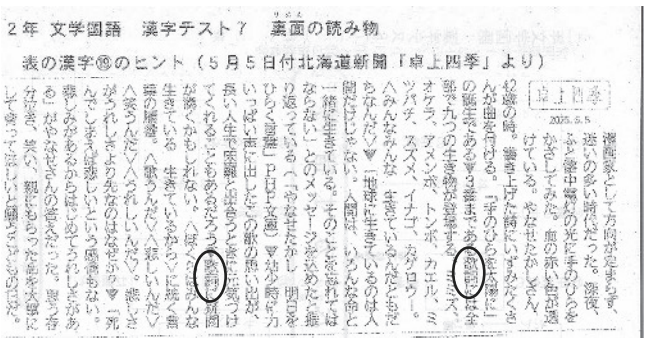
漢字テストで出題されている漢字を新聞記事の中から探し、テストの裏面に印刷する。

・方法

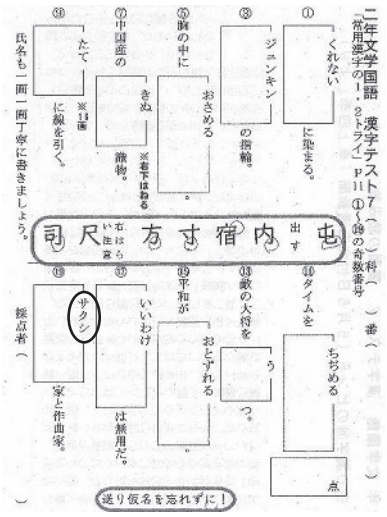
漢字や熟語が記事の中でどのように使用されているかを示す。

【２年「文学国語」

裏面；北海道新聞『卓上四季』】




【２年「文学国語」漢字テスト】

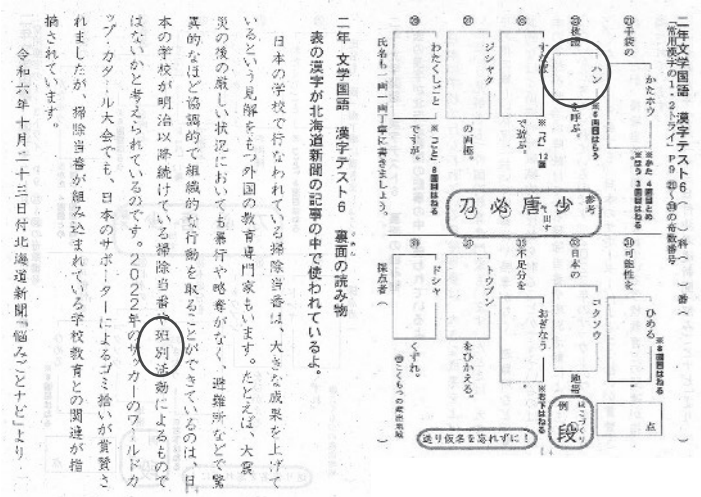



「サクシ」の「シ」は歌詞の「詞」であることに気がつくと、得点につながる。

【実践例③】

新聞のコラムのように細かな字がたくさん並んでいるのを見ることに抵抗を示す生徒もいるため、記事を直接印刷するのではな

く、行間をとり、読みやすい大きさの字で打ち直すようにした。


二年文学国語 漢字テスト6（　）科（　）番（　）
「常用漢字の1・2トライ」P9 ⑩～⑳の有数番号

⑩手袋の かたカウ ※あた 4番目まめ ※ウ 3番目はある
⑪後悔 ハン ※番目はある
を呼ぶ。
すぐ ※ゴロ 12番
で遊ぶ。
⑬ジシャク
の両極。
⑭わたくしごと ※ことば 8番目はある
です。
氏名も一画一画ていねいに書きましょう。

参考 少唐必刀 ※ヒント

⑮日本の ひめる ※番目はある
「ケタツウ
⑯不足分を おぎなう ※番目はある
⑰可能性を 地図 はっつくり 例 段 点
⑱トウブン
をひかえる。
⑲ドシャ
くずれ。
⑳こころの表情筋
採点者（　）

迷い仮名を忘れずに！

二年　文学国語　漢字テスト6　裏面の読み物
表の漢字が北海道新聞の記事の中で使われているよ。

日本の学校で行なわれている掃除当番は、大きな成果を上げているという見解をもつ外国の教育専門家もいます。たとえば、大震災の後の厳しい状況においても暴行や略奪がなく、避難所などで驚異的なほど協調的で組織的な行動を取ることができているのは、日本の学校が明治以降続けている掃除当番や班別活動によるものではないかと考えられているのです。2022年のサッカーのワールドカップ・カタール大会でも、日本のサポーターによるゴミ拾いが賞賛されましたが、掃除当番が組み込まれている学校教育との関連が指摘されています。

令和六年十月二十三日付北海道新聞「悩み〜こと十代」より・

○生徒の変容

普段の授業には消極的な生徒も、このクイズには非常に前向きに取り組む姿が見られた。遊びの要素を取り入れることで、語彙学習への心理的障壁を取り除き、日常的な活字への親しみを醸成している。

□「ぶんぶんｔｉｍｅ」への投稿

長期休業中の課題として、北海道新聞の「小中高生の文でつくる新聞　ぶんぶんｔｉｍｅ」への投稿を実施した。

生徒は自身の生活体験や関心事を、新聞という限られた文字数の中で他者に伝わるよう言語化する作業に取り組んだ。この活動は、単なる作文技術の向上に留まらず、自分の考えが公共のメディアを通じて社会に発信される可能性を意識させ、社会参画への端緒を拓く機会となった。

②公民科における取組

□「ニュースを読もう」の実践

公民科の授業では、社会的事象に対する見方・考え方を深めるため、ポータルサイトと新聞記事を連携させ、現代社会の諸課題を多面的･多角的に考察するデジタルと紙面を融合させたワークシート活動を年間で４～５回程度実施した。

・方法

(1)ニュースの選別と視点の設定

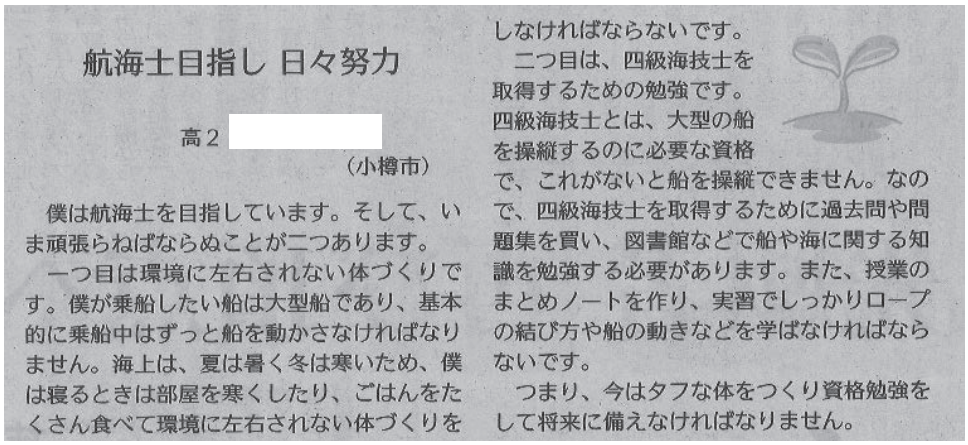
生徒は「Yahoo!」や「Google」等のポータルサイトから、以下の三つの視点でニュースを検索し、配信元である新聞社の詳細記事にアクセスした。

・国内政治：国会･内閣･法律に関する課題
・地方自治：地方自治体の抱える諸問題
・国際関係：国際政治･経済等の諸外国における課題

これら三つの視点から各１個、計３個の記事を選定させることで、興味の偏りを防ぎ、社会を俯瞰する視点を持たせた。

(2)情報の吟味と要約・考察

ポータルサイトから各新聞社が配信している元の記事にアクセスさせ、配信日時や配信元を確認した上で、以下の内容をワークシートにまとめさせた。


航海士目指し 日々努力

高２ [redacted]
（小樽市）

僕は航海士を目指しています。そして、いま頑張らねばならぬことが二つあります。

一つ目は環境に左右されない体づくりです。僕が乗船したい船は大型船であり、基本的に乗船中はずっと船を動かさなければなりません。海上は、夏は暑く冬は寒いため、僕は寝るときは部屋を寒くしたり、ごはんをたくさん食べて環境に左右されない体づくりをしなければならないです。

二つ目は、四級海技士を取得するための勉強です。四級海技士とは、大型の船を操縦するのに必要な資格で、これがないと船を操縦できません。なので、四級海技士を取得するために過去問や問題集を買い、図書館などで船や海に関する知識を勉強する必要があります。また、授業のまとめノートを作り、実習でしっかりロープの結び方や船の動きなどを学ばなければならないです。

つまり、今はタフな体をつくり資格勉強をして将来に備えなければなりません。

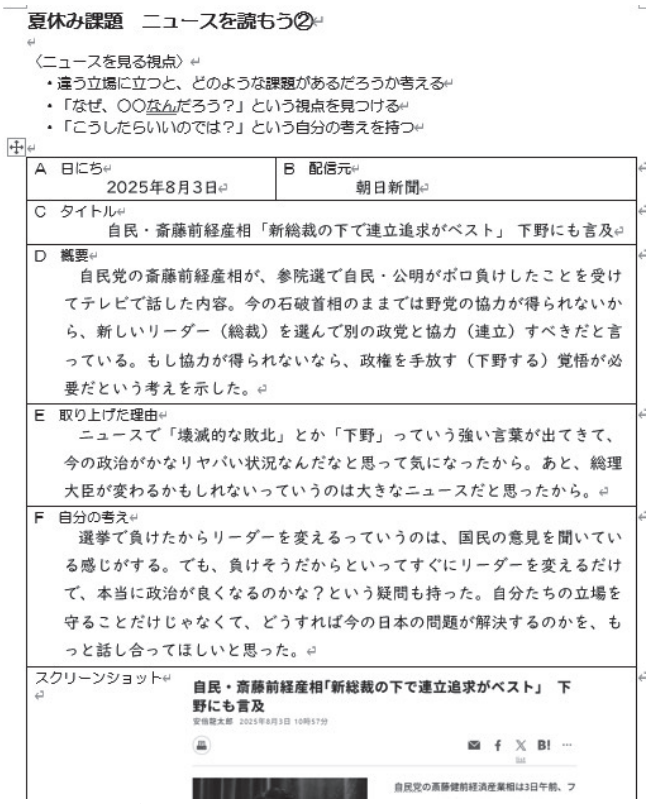
（北海道新聞　２０２５年１１月１２日）

・概要：記事の要点を客観的にまとめる。
（要約力の育成）

・取り上げた理由：
なぜそのニュースが自分にとって、あるいは社会にとって重要だと思ったのかを自覚させる。

・自分の考え：
「違う立場に立つとどうか」「なぜ〇〇なのか」という問いを立て、多角的に考察し、自分の考えを論理的に記述する（複眼的な視点の育成）。

【ワークシート】



夏休み課題　ニュースを読もう②

〈ニュースを見る視点〉
・違う立場に立つと、どのような課題があるだろうか考える
・「なぜ、〇〇なんだろう？」という視点を見つける
・「こうしたらいいのでは？」という自分の考えを持つ

| | |
|---|---|
| A　日にち<br>2025年8月3日 | B　配信元<br>朝日新聞 |
| C　タイトル<br>自民・斎藤前経産相「新総裁の下で連立追求がベスト」 下野にも言及 | |
| D　概要<br>自民党の斎藤前経産相が、参院選で自民・公明がボロ負けしたことを受けてテレビで話した内容。今の石破首相のままでは野党の協力が得られないから、新しいリーダー（総裁）を選んで別の政党と協力（連立）すべきだと言っている。もし協力が得られないなら、政権を手放す（下野する）覚悟が必要だという考えを示した。 | |
| E　取り上げた理由<br>ニュースで「壊滅的な敗北」とか「下野」っていう強い言葉が出てきて、今の政治がかなりヤバい状況なんだなと思って気になったから。あと、総理大臣が変わるかもしれないっていうのは大きなニュースだと思ったから。 | |
| F　自分の考え<br>選挙で負けたからリーダーを変えるっていうのは、国民の意見を聞いている感じがする。でも、負けそうだからといってすぐにリーダーを変えるだけで、本当に政治が良くなるのかな？という疑問も持った。自分たちの立場を守ることだけじゃなくて、どうすれば今の日本の問題が解決するのかを、もっと話し合ってほしいと思った。 | |
| スクリーンショット<br>自民・斎藤前経産相「新総裁の下で連立追求がベスト」 下野にも言及<br>安倍龍太郎　2025年8月3日 10時57分<br>自民党の斎藤健前経済産業相は3日午前、フ | |

〇生徒の変容

「ニュースを読もう」の実践を通じて生徒には以下の３点の変容が見られた。

まず、スマホ中心の受動的な情報収集から、設定された視点にもとづき自らニュースを「選択」する能動的な姿勢へと変化した。次に、年間を通じた要約活動により、断片的な情報ではなく物事の背景や構造を捉える論理的読解力が向上していった。最後に、多角的な問いに答える過程で、一面的な善悪の判断を超えた複眼的な思考と、自分の考えを言語化する確かな表現力を身につけることができた。

## ４．実践の成果と課題

### （１）成果

第一に、年間を通じて継続的に取り組んだことで、当初は自分の興味がある狭い範囲のテーマ（エンタメ等）に偏りがちだった生徒も、回を追うごとに政治や地方自治、国際情勢など、選択するニュースの幅に広がりが見られるようになった。また、ワークシートで「視点」を設定したことにより、教科書上の知識が実社会でどのように機能しているかを実感させることができ、一つの事象を多角的・複眼的に捉える思考習慣が定着し始めた。

第二に、「脳トレ」などの親しみやすい素材を入り口にすることで、新聞に対する心理的なハードルが下がり、活字文化に親しむ生徒が増加した。

### （２）課題

今後の課題は、情報の「信頼性」の検証である。ネット上のニュースと新聞紙面の情報を比較し、メディア・リテラシーをより深める活動が必要である。また、生徒が選んだ記事をクラス全体で共有・議論する場面を増やすことで、他者の多様な意見に触れ、合意形成を目指す態度の育成にも注力していきたい。

今年度は、国語科と公民科がそれぞれの科目の中で取り組んできたが、次年度は国語科で養った語彙力を公民科の論述にどう活かしていくか、教科間のさらなる連携を模索していきたい。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 「知識」から「自分事」へ昇華するNIE 実践

市立札幌清田高等学校　教諭　藤井　靖香・町田　一也

## １．はじめに

本校は札幌市清田区北野に位置する、６間口(各年次 240 名)の全日制普通科の高等学校で普通コースとグローバルコースが設置されている。単位制の教育課程となっており、１年次に必履修科目の多くを履修した後、２・３年次には生徒それぞれが進路や興味・関心に応じた科目選択を行っている。

本校の学校教育目標においては、「なお、もっと」という言葉がキーワードとなっている。本校の学校案内パンフレット(2025 年度入学生向け)に、学校長が次のように記している。

「なお、もっと」は本校の学校教育の目標にある、本校がとても大事にしている言葉です。日頃の学習や探究活動、部活動、学校行事に取り組み、自身の目標に向けて、なにごとにも「なお、もっと」と立ち向かっていく「あなた」を応援する学校、それが清田高校です。そのような想いをもつ「あなた」に、ぜひ本校の一員になってほしい。本校のよき伝統を紡ぐ仲間になってほしい。

令和７年度、本校は初めてNIE 実践指定校に指定していただいた。初年度ということもあり、数々の取組において成果もあれば、それ以上に課題も残されたが、生徒にも私たち教職員にも活字文化の必要性を改めて知る機会となった。以下、２名の教員による実践報告を掲載する。

## ２．実践の内容

### （１）保健（１年）での取組

１年生の保健で「まわし読み新聞」を行った。授業開始時に、挙手により「新聞を購読しているか」「自分は新聞を読んでいるか」を確認したところ、新聞を購読している家庭が半数程度、新聞を読んでいる生徒はほとんどいなかった。

保健の授業で「まわしよみ新聞」を実施した理由は、①新聞を手に取る機会が少ない生徒に新聞に触れてほしい、②新聞には健康や安全に関する情報が数多く掲載されており、保健の学習内容を深めるために非常に効果的だと考えたためである。

【手順１】

２人１組で 10 分程度新聞を読む。他の生徒に紹介したいと感じる記事を２つピックアップする。色のついたペンで記事を囲む。

【手順２】

４人１組でグループを作成し、手順１で選択した記事をグループ内で紹介する。記事の大まかな内容とその記事を選択した理由について共有する。

【手順３】

それぞれ持ち寄った記事を切り抜き、グループ毎に新聞を作製する。オリジナルの新聞名を考え、レイアウトや構成を行う。作成過程で新たな記事を見つけた場合は追加し、必要に応じて自分たちのコメントやイラストを手書きで記入した。

【手順４】

グループごとに作成した新聞を他のグループに共有するため、１分程度のプレゼンテーションを実施した。

本年次では防災学習を８月から継続的に行っている。８月に自衛隊の方をお招きして救助や避難所の実態、防災と地域活動のつながりについてご講話いただいた。９月には防災の日に合わせて、家族で避難所に行くことを想定したロールプレイング、12 月には「防災・救命講習」（心肺蘇生法・止血法・避難所設営（ダンボールベッド作製））を実施した。

今回の「まわし読み新聞」は結果として、12 月の実技の事前学習も兼ねることとなった。12 月８日深夜に青森東方沖地震があり、12 月 10 日の新聞紙面は地震や避難に関することが多く掲載されていた。また、12 日には授業中の緊急地震速報があり、生徒たちは防災について自分ごととして深く考えるきっかけとなった。

今回は、新聞を活用した授業を行うことをご理解いただき、生徒数分の新聞を地域の販売店さんにご提供いただいた。

新聞をあまり目にする機会のない生徒たちは新聞記事および広告に興味を示していた。生徒たちが想像していたよりもはるかに多くの情報が載っており「新聞って、意外とおもしろい」と感じたようである。

日頃スマートフォンから情報を得る機会が多いため情報が偏っていたり、一面的である可能性がある。新聞はインターネット検索とは異なり、“一見自分に関係なさそうな情報”を視野に入れることができる。

物事を多角的な視点で捉え、授業での学びと実生活を関連付けて考える力を養うためにも、今後も無理のない範囲で新聞を活用していきたい。

（２）時事問題研究（３年）での取組

【探究の土台作り ―「知識」から「自分事」へ】

３年次の学校設定科目「時事問題研究」における実践は、まず生徒自身が社会に対する関心の「核」を形成することから始まった。

導入には、桐原書店の『知識から思考へ』を活用した。生徒は「国際」「政治・経済」な

ど本書の九つの章立てから、自身の進路や興味に基づいてメインテーマを設定し、それを基に「自作ノート」を作成した。これは単なる要約ではなく、Chromebook や図書館の蔵書を用いて調査し、自身の知識として再構築する作業である。文字だけでなく、イラストや信頼できる統計データを貼り付けるなど、アナログとデジタルのハイブリッドな編集作業を認めた。

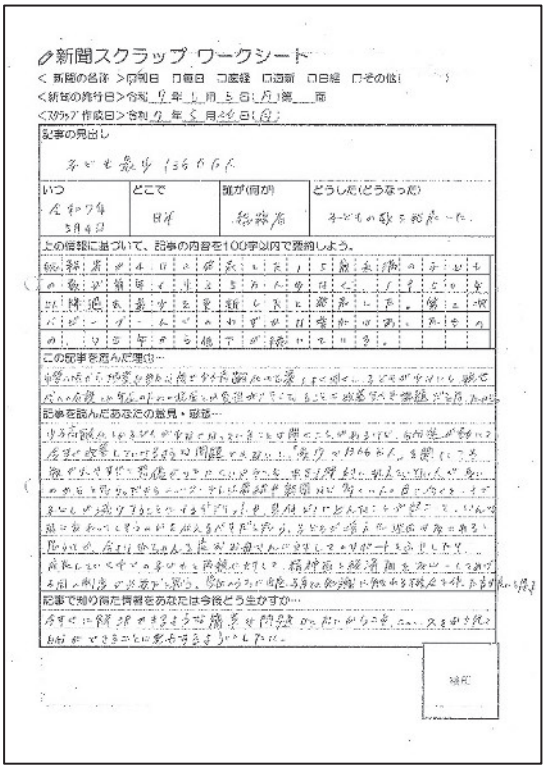
このノート作りにより、同じ「国際」分野でも「ウクライナ侵攻」と「観光立国」に関心が分かれるなど、個々の探究の方向性が明確化された。この自作ノートが、後の新聞記事選びにおける確かな「羅針盤」となったのである。

【実践① 定点観測と中間発表 ―スクラップからプレゼンへ】

自作ノートで「羅針盤」を得た生徒たちは、五月と六月の計二回、実際の新聞を用いたスクラップ活動へ移行した。自身のテーマに合致する記事を選定し、要約と意見を記述する課題である。

ここでは、二回目の記事選定時に「一回目と関連するもの」を選ぶ制約を設けた。一ヶ月の経過による事象の変化や、異なる側面からの視点を意識させ、ニュースを「点」ではなく文脈のある「線」として捉えさせるためである。

以下、「少子化」に関心を持った生徒のスクラップ２回分を示す。



新聞スクラップ ワークシート

＜新聞の名称＞ □朝日 □毎日 □読売 □産経 □日経 □その他（　　）

＜新聞の発行日＞令和 9 年 4 月 5 日（月）第__面

＜スクラップ作成日＞令和 9 年 5 月 26 日（日）

記事の見出し：子ども最少 16万人台

| いつ | どこで | 誰が(何が) | どうした(どうなった) |
|---|---|---|---|
| 令和7年3月4日 | 日本 | 総務省 | 子どもの数が減った。 |

上の情報に基づいて、記事の内容を100字以内で要約しよう。

総務省が4日、日本の子どもの数が前年度から15万人減の16万人台となったと発表した。過去最少を更新し、45年連続で減少した。少子化の傾向が続いている。

この記事を選んだ理由…

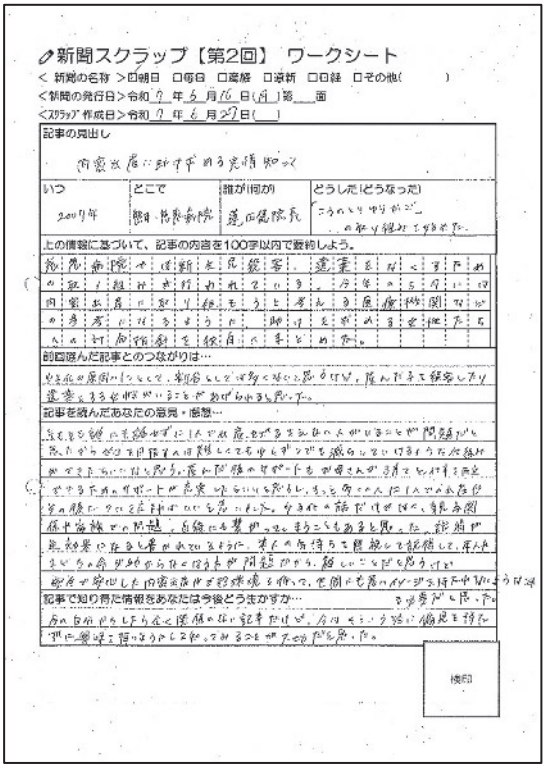
中学の時から少子化や高齢化に関心があり、将来の仕事にも深く関わってくる課題だと思ったから。子どもが少ないと、税収が減ったり、介護や医療の人手が足りなくなったりと、社会全体に影響が出ると思ったから。

記事を読んだあなたの意見・感想…

少子化は、ゆるやかに進んでいるように見えるけど、実は国の存続にかかわる深刻な問題だと思う。「数字が減った」と聞くと、単純に人が少ないだけ、と思ってしまうけど、実際は税収が減ったり、介護や医療の人手が足りなくなったりと、社会全体に影響が出ると思う。子どもが減ったら、将来の税収や労働力が減り、高齢者を支える仕組みが成り立たなくなる。だから、今の政策だけでは足りないと思う。保育の無償化や、子育て世帯への支援、働き方の見直しなど、国全体で取り組むべきだと思う。

記事で知り得た情報をあなたは今後どう生かすか…

将来は、経済や社会を支える仕事を目指したいから、少子化の影響を考えながら、人口減少に強い仕組みや、子どもが安心して暮らせる社会づくりに貢献できるような人になりたい。



新聞スクラップ【第2回】 ワークシート

＜新聞の名称＞ □朝日 □毎日 □読売 □産経 □日経 □その他（　　）

＜新聞の発行日＞令和 9 年 6 月 16 日（月）第__面

＜スクラップ作成日＞令和 9 年 6 月 27 日（__）

記事の見出し：内閣府 産に新すがめる実情 知って

| いつ | どこで | 誰が(何が) | どうした(どうなった) |
|---|---|---|---|
| 2009年 | 愛媛・松山新聞 | 第四管区長 | こうのとりが[illegible]の年ぶり観測されました。 |

上の情報に基づいて、記事の内容を100字以内で要約しよう。

第四管区長が新潟県佐渡市で、コウノトリの巣作りが行われていると、今年の5月に国交省に報告した。コウノトリは、もうとっくに絶滅したと考えられていたが、今年の3月に佐渡で観測された。

前回選んだ記事とのつながりは…

少子化の原因にもなって、結婚もしにくくなっていると思うけど、産んだ子を育てる環境を整えることが大切だと思ったから。

記事を読んだあなたの意見・感想…

生物を守る仕事は、すぐに成果が出るものではなく、数十年単位で続けられる仕事だと思った。人間の生活と自然環境のバランスを考えることは、将来の社会を支える大切な視点だと思った。

記事で知り得た情報をあなたは今後どう生かすか…

将来、自然や生物を守る仕事に関わってみたいと思った。人間の生活と自然環境のバランスを考える仕事に興味を持った。

一学期の総括として実施した前期プレゼンテーションでは、自作ノートの基礎知識とスクラップの知見を統合して発表した。他者の発表を聞くことで、同じ新聞から多様な情報が得られることを再認識し、生徒の意識は「情報の受信」から「発信のための根拠収集」

へと変容し始めた。

【実践② 新聞という「異文化」との遭遇 ―メディア・リテラシーの萌芽】

ここで、生徒の実態と新聞への反応について触れておきたい。日頃から新聞を読む生徒は三分の一以下であり、大半にとって新聞は「見たことはあるが読まない」存在であった。

しかし、この「新聞離れ」した世代ゆえの反応が授業を活性化した。彼らは記事のみならず紙面の隅々にまで注目し、「おくやみ欄は個人情報の観点から問題ないのか」「モノクロ広告は宣伝効果が薄いのではないか」といった鋭い疑問を投げかけたのである。

教員側はこれを単なる知識不足とせず、デジタル世代の「メディアに対する批判的視点」の萌芽として肯定的に受け止めた。こうした発見を許容する場を作ることで、生徒は次第に夢中になって紙面をめくり、自身のテーマに沿った記事や琴線に触れる情報を主体的に選択し、新聞という「異文化」を柔軟に取り込んでいった。

【実践③ 協働と多角化 ―まわし読み新聞と二紙読み比べ】

二学期以降は、協働的な学びと高度な読み解きへとステップアップを図った。

七月には北海道新聞社の出前講義を実施し、その知見を活かしてグループで「まわし読み新聞」を作成した。授業時数の制約により完成には至らなかったが、これは決して失敗ではない。どの記事をトップに据えるか、レイアウトはどうあるべきか。白熱した議論が交わされた「プロセス」そのものが、主権者教育として質の高い対話の場となったからである。

十月には、論調の異なる二紙の記事読み比べを行った。同じ事実でも見出しやリード文、主張が異なる事実に直面し、生徒たちはメディアの意図を客観的に読み解くトレーニングを積んだ。これは小論文に求められる多面的な視野を養う、極めて実践的な訓練となった。

【総括と展望 ―大学入試、そしてその先へ】

活動の集大成として後期プレゼンテーションを実施した。生徒たちは、ノート作成、スクラップ、協働学習を経て深めた研究成果を、説得力のある言葉で語った。

本校のような高校において、NIE は入試対策としての即効性が期待される。実際、習慣的な新聞閲覧と発表を経た生徒たちは、小論文や面接において、単なる知識の披露にとどまらず、自分の言葉で社会問題を論じる力を着実に身につけた。

当初「おくやみ欄」に戸惑っていた生徒たちが、一年を通じて新聞を「社会を知るための生きたツール」として使いこなすまでに成長した。彼らが身につけた力は、大学合格のみならず、十八歳選挙権を持つ主権者として社会を生き抜く基盤となるはずである。今後は限られた時数の中で、いかに「書く」活動へ接続していくかが課題となるだろう。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 実践テーマ　「新聞ノート」の進化を目指して

## ～ラーニングコモンズでの挑戦～

旭川志峯高等学校　教頭　井上　陽介

### １．はじめに

本校は、旭川市内にある開校 127 周年を迎える私立高校です。前身は旭川大学高等学校で旭川大学の市立化に伴って法人分離し、2023 年 4 月に旭川志峯高等学校として再出発しました。従前はオリンピック選手やプロ野球選手を多数輩出するスポーツや吹奏楽で有名な高校でしたが、旭川志峯高等学校と校名変更すると同時に学びを再度見直し、2024 年度よりコースも再設定（選抜・グローバル・進学・ライセンス・スポーツ教育）することで「学び×〇〇」（〇〇は部活動や資格取得、ボランティア活動や生徒会活動など）を目指せる二刀流、三刀流を目指すことのできる高校として再出発しました。進路においても国公立大学や難関私大を目指す生徒が増加傾向にあり、進路指導の更なる充実を図っています。

### ２.生徒の様子

本校は、多様な意欲をもった生徒が集まる活気あふれる高校です。学習・進路・探究・部活動（体育系・文化系）・グローバルなど意欲的に自身の峯（目標）を志しながら日々の高校生活を生き生きとして過ごしています。

また、すべてのことを前向きに捉えることができることも本校生徒の特徴であり、「自省・努力・創造」の校訓のもとで、高校３年間を通して、教員の手厚い関わりや高校生活を通じて着実な成長が見られます。

### ３．実践の内容

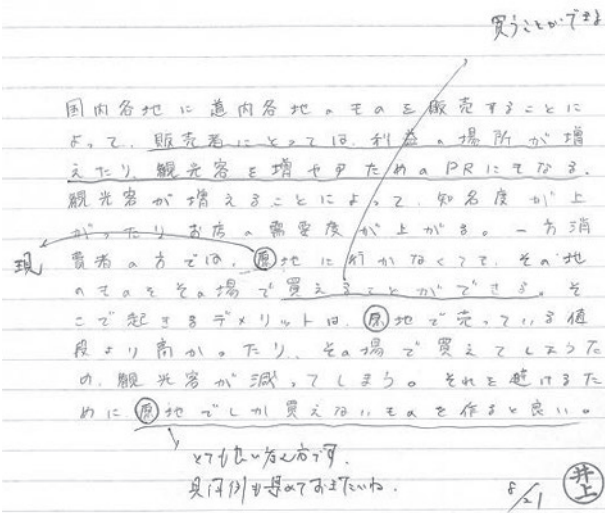
#### ①　進路指導における新聞活用の背景

本校における進路指導の新聞活用の背景としては 2023 年度「NIE 第 22 回上川地区セミナーin 旭川」において実践発表（タイトル「進路指導における新聞活用」）の機会をいただき、「年内入試（総合型選抜・学校推薦型選抜）の増加」に伴う「小論文指導の増加」として発表させていただきました。受験期を迎えて小論文練習を開始した際に生徒は以下の３つの課題（①文章や題意を読めない②適切な表現ができない（漢字・話し言葉・・・）③主張の根拠となる社会的事実といった知識の不足）に直面することになります。その課題の解消を図る目的で開始したのが「新聞ノート」です。本校では高校３年生の各教室において、北海道新聞様の『高校の教室に新聞を』の活動によって新聞を各教室に設置することができています。提供いただいている新聞を活用させていただき、生徒が小論文練習を開始する際に直面する課題を解決すべく「新聞ノート」を開始しました。

#### ②　新聞ノートの取り組み

「新聞ノート」はノートの左ページに１日１記事を取り上げて貼付し、右ページに知らない用語の調べ学習と自身の意見や考えを小論文形式で記載して提出してもらいます。その内容を確認して添削、返却することを繰り返していきます。指導を継続していくと、３つの課題に挙げた「①文章や題意を読めな

い」に関しては自身の関心を中心に記事を選択して読むことで、文章（長文）が苦手であった生徒が徐々に読みことに慣れることで、小論文の題意や提示される本文を理解することができるようになります。「②適切な表現ができない」に関しては小論文指導と併行して取り組むため、添削の機会を増やすことができます。以下が添削をした新聞ノートの例となります。表現や漢字間違いの指摘を繰り返すことで着実に適切な表現ができるようになります。

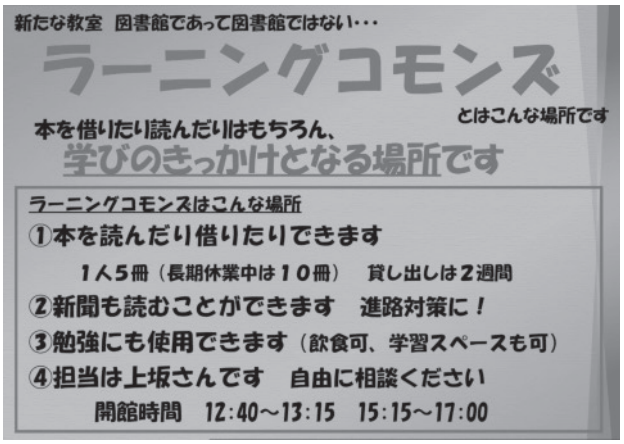

買うことができる
国内各地に道内各地のものを販売することによって、販売者にとっては、利益の場所が増えたり、観光客を増やすためのPRにもなる。観光客が増えることによって、知名度が上がったりお店の需要度が上がる。一方消費者の方では、原地に行かなくても、その地のものをその場で買えることができる。そこで起きるデメリットは、原地で売っている値段より高かったり、その場で買えてしまうため、観光客が減ってしまう。それを避けるために原地でしか買えないものを作ると良い。
現
とても良い考え方です。
見出しも選んでおきたいね。
8/21
井上

「③適切な表現ができない」については日々新聞を継続して読むことで社会的事実を多く知ることで「主張の根拠や理由」の説得力が向上し自信をもって小論文を書けるようになってきます。

この指導を繰り返していくことで嬉しい副作用も２点ありました。１つ目は「自身の目指す業界の社会的課題を把握できる」という点です。このことで高校および進学する上級学校に向けた学びの意欲が向上しました。２つ目は「自身の目指す業界と出会う機会が得られる」という点です。生徒は業界に関心を強くもつことで新聞紙面に掲載されたイベントに参加する生徒が出てくるようになりました。

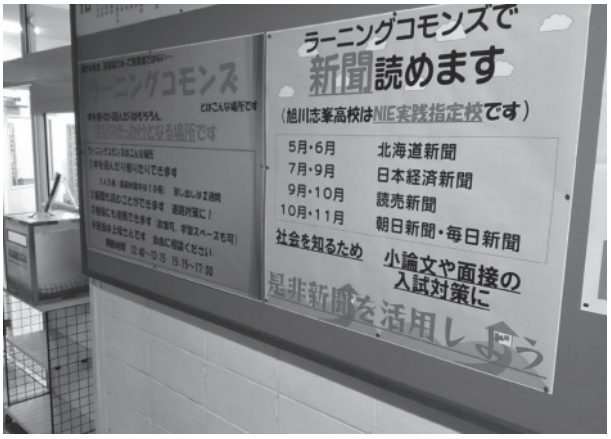
③　ＮＩＥ実践指定校の選定とラーニングコモンズでの設置

「新聞ノート」の取り組みに関する実践発表の機会をいただくことで、ＮＩＥ実践指定校に関するお話をいただき、新聞をより積極的に活用したいと考え、今年度設置の新教室「ラーニングコモンズ」に新聞を設置することとしました（以下、教室前掲示物）。




ラーニングコモンズは図書室としての機能を備えつつ、昼休みや放課後に勉強したり、「総合的な探究の時間」にも活用できる自由度の高い教室です。提供いただいている新聞を全校生徒に自由に閲覧できる環境をつくることを目的に設置しました。

以下の写真がラーニングコモンズ前の様子で、新聞を読むことができることをアピールする掲示物も準備しました。

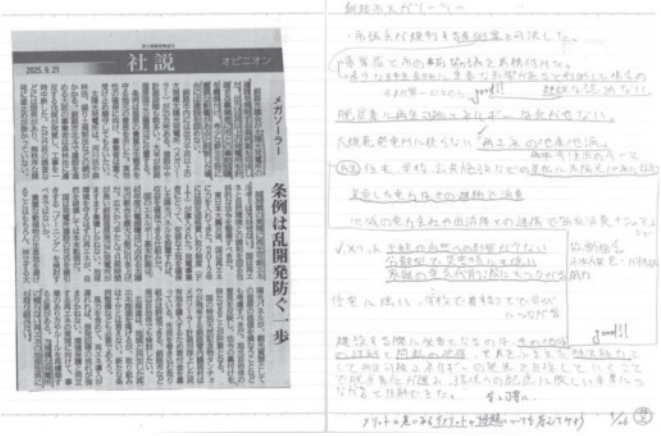


④　今年度の挑戦

今年度「新聞ノート」に取り組むことで受験に挑んだ生徒を紹介いたします。

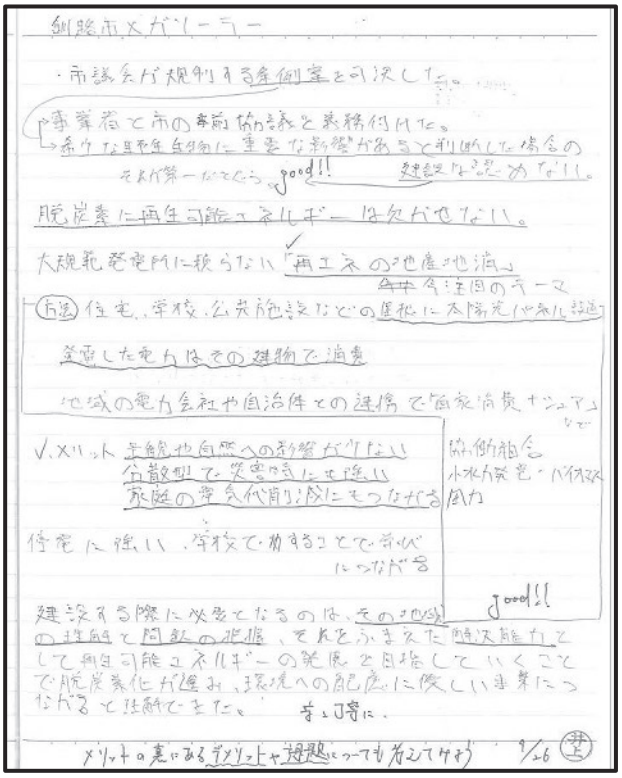
・受験分野　私立大学工学部建築学科
・入試方式　総合型選抜
・倍率　　2.4倍
・入試内容
　１次選考（書類選考）
　　事前提出小論文・学修計画書
　２次選考（講義型試験・面接）
　　講義を受講した上でのグループディスカッション・口頭試問
・受験生徒の特徴
　硬式野球部で甲子園に出場
　明るく前向きでコミュニケーション力が高い
　部活動が忙しく勉強や進路の対策が充分ではない

総合型選抜において、受験生は多くの力や能力を求められます。上記試験における下線箇所の内容として「新聞ノート」が有効であると判断し、生徒と相談をして作成を開始ししました（以下、新聞ノートの１ページ）。




北海道新聞　2025年9月21日社説

目指す学部学科が「工学部建築学科」であるため、工学に関わる記事をラーニングコモンズ内の新聞を活用して選定して取り上げていくことで着実に「工学および建築」に係る知識を身につけていきました。




上記が新聞ノートの右ページを拡大したものです。このように着実に知識を積み重ね、添削を繰り返すことで１次選考に向けた書類作成を円滑に行うことができました。また、２次選考に向けては講義を受講してのグループディスカッションや口頭試問への対策を目指す必要があり、新聞ノートの作成を受験前日まで継続することで知識の獲得に取り組みました。

また、講義を受けた上でのグループディスカッションに向けた対策も必要であり、提供いただいている新聞をもとに題材を作成して教員の協力も得ながらグループディスカッションの練習にも取り組みました。鮮度の高い新聞の情報をもとに練習に取り組むことができたため、集団討論を入試に取り入れる大学が多くなる中で、新聞を活用した進路指導の新たな可能性を見出すことができました。

## ４．成果と課題

### （１）成果

①　生徒は目標大学に無事に合格！

対策する時間が短い中でも新聞ノートや新聞記事を活用してのグループディスカッション対策を経て、2.4 倍と高い倍率の中でも無事に合格を勝ち取ってくれました。

受験終了後には「全体的に準備しすぎなくらいできたのでとても成果感じました」というメッセージをくれたので、十分な準備のもとで入試に臨むことができたようでした。

②　新聞ノートは多彩な新聞を提供いただくことで進化！

今までは『高校の教室に新聞を』で提供いただいた北海道新聞様の記事を中心に活用させていただいておりましたが、ＮＩＥ実践指定校に認定いただくことで多彩な新聞を読むことができることで、同じ事象でも「記事の比較」ができることで新たな試みに取り組むことができたため、今後も更なる進化を目指して実践に取り組んでいきます。

③　集団討論対策での活用について

今までは「新聞ノート」での活用をしておりましたが、今年度は集団討論練習のテーマとして新たな活用をすることができました。現在、大学受験で増加しつつある「総合型選抜」においては多様な選抜方法で受験生を選抜します。その中の１つの選抜方法が「集団討論（グループディスカッション）」になります。大学により集団討論の実施方法は異なりますが、大学の分野に関係した文章を読んだ上で、もしくは大学の講義を受けた上で集団討論を行うことが一般的です。この文章や講義に代わるものとして、新聞の記事を活用させていただくことで集団討論練習を円滑に実施することができました。

### （２）課題

進路指導における新聞活用を始めて長くなり、着実に進化は実感しておりますが、以下の２点の課題を感じています。

①　新聞活用の全体化

ここまで新聞活動を個別の進路指導に活用させていただいて一定の成果を修めておりますが、ラーニングコモンズに提供いただいた新聞を設置しているため、個別に併せてより全体指導に活用する方策を模索したいと考えております。

②　早期からの取り組み

今回取り上げた生徒は部活動で忙しく、３年生になって準備を進めることになりました。今後はより早期に進路希望や選抜方式を見定めて、より充実した新聞ノートを作成し「目標達成」と「学力や意欲の向上」を達成できる新聞ノートづくりと指導を目指していきたいです。

## ５．おわりに

もともと「新聞ノート」は「総合型選抜」や「学校推薦型選抜」の受験生が受験する小論文指導をより効果的かつ効率的に行うことを目指して取り組み始めました。

そこから 2023 年度「NIE 第 22 回上川地区セミナーin 旭川」において実践発表の機会をいただき「新聞ノート」の意義や取り組み方を再考する機会をもつことで、新たな取り組み方を考えるきっかけとできました。

世の流れとして「総合型選抜」や「学校推薦型選抜」が増加傾向にあるため、より望ましい小論文指導をすることはどの高校においても求められています。今後も研究と実践を重ね、より望ましい小論文指導を目指して参りますので、本報告を読んでいただいた方々の忌憚のない意見をお願いいたします。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 実践テーマ　本校における新聞活用

市立札幌大通高等学校　教諭　石山　俊央、教諭　内田　大資

## １．はじめに

本校は、平成 20 年４月に定時制単位制普通科として札幌市中央区に開校した。生徒自らが授業を選択して時間割を作成する「単位制」のカリキュラムを採用する、「普通科」・「定時制」課程の高等学校である。生徒は午前部・午後部・夜間部のいずれかの部に所属する「三部制」を特徴としている。

本校の重点目標の一つに、「社会人として自立していける生徒を育てる」という目標があり、年齢や生い立ちなどさまざまな背景を持つ生徒が学ぶ本校は、すべての生徒が、自立という目標に向かって充実した学校生活を送ることを目指している。札幌市をはじめとする「地域社会」で活動されている人材や団体にも協力していただきながら、教育環境づくりに取り組んでいる。

## ２.児童（生徒）の様子

今年度４月時点の生徒数は１年次 287 名、２年次 307 名、３年次 298 名、４年次 241 名、合計 1,133 名である。令和６年度の進路状況では大学・短大 38%、専門学校 22%、就職 41%、その他 22%であった。生徒は生成ＡＩを活用する場面が増えたり、日頃の情報収集がＳＮＳに偏っていたりするなどの状況を鑑み、得た情報が正しいものなのか見極める力を身に付ける必要がある。そのため、ＮＩＥ実践指定校に申請し、日々の教育活動の中に情報を収集するメディアとして新聞を取り入れ、情報を多面的多角的に捉える機会を増やしたいとのねらいがあった。

## ３．実践の内容

### （１）総合的な探究の時間での取組

４年次の総合的な探究の時間では２０２４年度のＮＩＥ実践報告書に記載した「じぶん新聞」の取り組みを実践した。この取り組みの目的や作成手順、生徒の様子などについては２０２４年度のＮＩＥ実践報告書をお読みいただきたい。

２年次の総合的な探究の時間では宿泊研修と横断し『観光公害（オーバーツーリズム）でもたらされた小樽市（宿泊研修先）の人たちの変化とは？』という探究学習に取り組んだ。課題設定と情報収集の学習段階において①概念理解②物事の多面的多角的考察③新聞記事情報収集という３つを目標に、『各地ではどのような観光公害がなぜ起きている？どのような影響を与えている？』という課題に取り組んだ。（学習順に）①イタリア・ベネチア市②山梨県富士山、京都市祇園、鎌倉市江ノ島③美瑛町、札幌市④小樽市の観光公害の現状と対策をグローカル（グローバルとローカル）の視点で多面的多角的に捉え、思考ツールのＸチャートに整理分析してまとめ、課題に対する答えを共通点相違点・気づき疑問・第一次情報の可能性と共に発表した。

### （２）総合実践（商業）での取組

①取り組みの概要

教科・科目：商業・総合実践

テーマ：「新聞記事」と「外部講師」を活用し、食品ロスの現状について学ぶ

目的：食品ロスの実態や社会問題に対する

企業の取り組みを知る。社会課題をビジネスの力で解決する方策を学び、自分たちに取り組めることはないか考える。

目標：経済社会の健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力を育成する。

実施時間：９０分授業×２回（前編・後編）

②取り組みについて

総合実践の授業では新聞記事と食品卸の会社を経営している外部講師に協力してもらい食品ロスの現状について学んだ。

取り組みの目的は、卸売業・小売業の食品ロスの実態や食品ロスに対する企業の対策について話を聞き、社会問題に対する企業の取り組みを知る。さらに、社会課題をビジネスの力で解決する方策を学び、自分たちに取り組めることはないかについて考えることである。

SDGs 持続可能な未来へ

食べられるのに…「食品ロス」

消費の仕組み 量から質に

北海道新聞 2023 年 11 月 4 日

取り組みは前編（90 分）と後編（90 分）に実施日を分けて展開した。

前編の授業では新聞記事から食品ロスの現状を学んだ。新聞記事からは食品ロスの定義や食品ロス発生量の推移、食品ロスの内訳、食品ロスを減らすための取り組みなどについて情報を得た。中でも札幌市が食品ロスの現状を調査するために、各家庭から出されたごみ袋を開封し、捨てられたごみの中からどれくらいの量の食品ロスがあるか調査している記事には生徒も衝撃を受けていた。

袋に入ったままのホウレン草や白菜、プリンにヨーグルト…。
家庭ごみを仕分けた調査＝１０月２６日、札幌市白石清掃工場（畠中直樹撮影）

北海道新聞 2023 年 11 月 4 日

記事から情報を得た後は、食品ロスについて生徒個々が情報収集し、調べたことを整理・分析した。各自で整理した内容をもとにグループで話し合い情報を共有し、各グループの代表は話し合った内容を報告した。新聞記事は家庭系の食品ロスが主な内容として取り上げられており、事業系の食品ロスがどのようなものなのか疑問を抱く生徒もいた。

後編の授業（90 分）では、札幌市内で食品卸の会社を経営する外部講師から講話を受けた。講話では事業系から発生する食品ロスの現状や課題点、民間と行政が連携し食品ロス削減に向けて取り組んでいる状況を聴くことができた。講話後はグループごとに食品ロス解消に向けた案を考え、その考えを共有した。外部講師からは、コロナ禍による消費の縮小に伴う、生産物超過により食品ロスが発生し、それを減少させるためにスイーツ店の運営を始めたことを聞き、企業による食品ロス削減に向けた具体的な取り組みを知ることができた。

③取り組みの振り返り・生徒の変容

取組後の生徒の感想には「企業が食品ロスを減らすために取り組んで商品を売っていても、買った人が捨ててしまえば結局食品ロスにつながってしまうので、消費者もどうす

るべきか考えなくてはならない」「お店で色々な工夫をしつつ食品ロスを減らす取り組みをしているが現状ではただの延命にしかなっておらず、加工したものを捨ててしまうことになっている。この現状を打破するためには一人一人が自覚をもって行動することが大事」「講師の話を聞いてみて、真剣にフードロスの問題について考えて、フードロス対策をするために自分で積極的に小売業やスイーツ店を開いていてとても良いことだと思いました。フードロスの実態を知り、まだフードロスの量が多いと感じたので、今後は着実にフードロスの取り組みを実践したいと思いました」といった感想があった。生徒は食品ロスに対する知識や理解を深め、食品ロスを削減するという課題に対して企業と共に消費者としても意識や行動を改善させる必要があることに気付くことができた。

（３）地理歴史科「地理総合」・公民科「政治・経済」での取組

ご理解していただきたい点が２点ある。

１．目的・目標のための手段として活用

持続可能な社会の創り手、自律的学習者に向けた目指すべき資質能力の育成のための主体的・対話的で深い学びの視点に立った「社会的事象の地理的な見方・考え方、社会の在り方についての見方・考え方を働かせ、現代の日本と世界の諸課題・諸事象の探究」の手段の１つとして新聞を活用している。また、新学期に新聞の見方や特徴、事実と意見の区別やメディアとの関係を学習し、教科書では対応しきれない現代社会の急速変化にも新聞を通して対応できるようにしている。

２．複数（6社以上）の新聞を活用

同一課題でも新聞社によって見出しや本文などの内容や情報量、写真やデータを含めたレイアウト、視点・スタンス・書き方が異なる。そのため、朝日新聞、産経新聞、日本経済新聞、北海道新聞、毎日新聞、読売新聞（五十音順）計６社の新聞を活用している（インターネット検索や、旅行先での購入による全国各紙の新聞も活用する。前任校では沖縄県や日高などの地方紙も活用）

①取り組みの概要（地理総合、政治・経済）

共通目標は「現代の諸課題・諸事象（の探究）を通して、概念や理論の理解深化・習得」「諸資料から社会の在り方や課題の解決に向けて探究する際に必要な情報を適切かつ効果的に収集し読み取る（整理分析・取捨選択）技能習得」「諸課題・諸事象について（の解決に向けて）多面的・多角的に追究・探究し、よりよい社会の在り方について自分の考えを自分の言葉で効果的に説明・論述できるようになる」である。

（３－１）地理歴史科：地理総合

①統計地図（主題図）（３時間）

諸課題の概念理解、多面的・多角的な探究、新聞社が扱う地図の違いを理解するために、授業で身に付けた地図に関する役割・有用性や収集・読取・まとめなどの基礎的基本的技能を活かし、新聞記事の地図を読み取った。

②EEZ・気候変動・各国の生活（各２時間）

授業で身に付けた概念や理論が現実社会で起こっていることの理解、諸課題の多面的多角的探究を目標に、上記に関する新聞記事を見通しと情報収集の段階で活用した。

③青森沖地震（１時間）

2025年12月８日に発生した青森県東北沖地震に対する新聞各社の視点の共通点と相違点を理解するために新聞６社（前述）の一面と社説の読み比べを行なった。6W２Hに着目し事実と意見を見分け、各新聞社が何（誰）に対して何を主張しているのか思考ツールを活用して個人でまとめて発表した。また、

大地形と防災減災の学習において、メカニズムの習得や防災減災探究に向けて過去の国内外の地震に関する記事や社説（読み比べ）を題材に取り入れた。

（３－２）公民科：政治・経済

①第 27 回参議院選挙、独占禁止法と公正取引委員会、消費者問題、M&A、株主総会、所得税・宿泊税、補正予算、国内外 GDP 速報、国内外消費者物価、高市内閣の経済政策など多数（内容に応じて時数は異なる）

地理総合同様、先述の目標達成に向けて、6 社の新聞記事の読み比べを通して、概念や理論の理解深化と活用、必要な情報を適切かつ効果的に収集し読取、諸課題の多面的多角的な考察探究のための思考ツール活用などを個別学習や協働学習で行なった。

③取り組みの振り返り・生徒の変容

「今の時代だけでは得られない考え方や視点がある」「SNS に頼らずに活字に触れ自分の目で考える」「授業で世の中の出来事を理解できるようになり、新聞にも興味を持つことができた」「物事を客観的に見たいときやメディアごとの視点の違いを理解するために活用したい」「確実な情報を獲得するために活用したい」「原因や背景が表や図と一緒に整理されていて理解できる」という声が寄せられた。

## ４．成果と課題

（１）成果

各実践内容の成果については、３．実践内容中に記載させていただいた。２．生徒の様子にも記載したが、日常の生活の中で新聞を手にする機会が少ない生徒にとって、気軽に新聞を手に取ることが出来る環境は望ましい。生徒は日常生活の中でスマートフォンから情報を得ることが多いため、取得している情報が偏っていたり、必ずしも正しい情報ではない可能性もある。新聞から得られる情報は信憑性が高く、幅広い分野について掲載されているため、新聞から情報を得ることは生徒の情報リテラシーの向上につながったと考えている。

（２）課題

課題として２点あげる。

１点目、新聞を手にする生徒の数を増やしたい。卒業を控え、進路活動が盛んな生徒は新聞を手にする機会が比較的多いが、新聞を手にする機会が多いとは言えない。図書室や進路相談スペースに行けば新聞があることを生徒に周知し、新聞が置かれていることの認知度を高めていきたい。

２点目、新聞を活用する機会を増やすためにも教職員に新聞の活用を進めていきたい。授業や特別活動、進路相談など様々な場面で新聞を活用してもらい、生徒とともに指導する教員側も新聞を活用する場面を増やしていきたい。

## ５．おわりに

ＮＩＥ実践指定校として二年間の活動し、２０２５年度のＮＩＥ北海道セミナーにおいては実践表彰校として取り組みを評価していただいた。実践指定校として取り組むことにより他校種・他地域の取り組みを知れたことは本校の教育活動の発展につながった。また、実践報告を通して、本校の取り組みが他校の取り組みに少しでも参考になることがあれば幸いである。

今後も各教科における授業や進路活動、生徒の探究学習に新聞記事を活用し、日々学んでいる内容と世の中がどのようにつながっているのか、生徒が認識できるように新聞を教育活動に取り入れていきたい。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 新聞ことはじめ

北海道札幌白陵高等学校　教諭　土永　敬子

## １．はじめに

本校は、平成８年に１０間口の全日制普通科高校として開校し、平成２３年に単位制を導入した。その後の生徒数の減少に伴い、昨年度より学年制を導入している。現在、２間口となり当初よりずいぶん規模は縮小した。その変化に伴い、部活動加入率も減り以前のような活気があまり見られなくなり、だいぶ学校も静かになった。

実践指定校としては２年目となり、昨年同様３年次の選択教科において実施した。

## ２.生徒の様子

どちらかと言えば人懐っこい、素直な生徒が多い。自分が面白いと思ったこと、できると思ったことにはとことん向き合う様子が随所でみられる。

ただ、学習の習慣がついていない生徒は多く、学習すること自体をまず身に付けるところからの生徒も少なからずいる。

３年は単位制で、自分の好きな科目を選ぶことができる。また、昨今の少子化による生徒減少もあいまって全体に少人数の科目も多い。このため、生徒の学力に見合った授業展開もしやすい。その年度によって生徒の興味関心も違い、どういった生徒がその授業を選択するのかは開講してみないとわからない。そのため、その時々の生徒の興味関心等に見合った授業展開が必要ともなる。

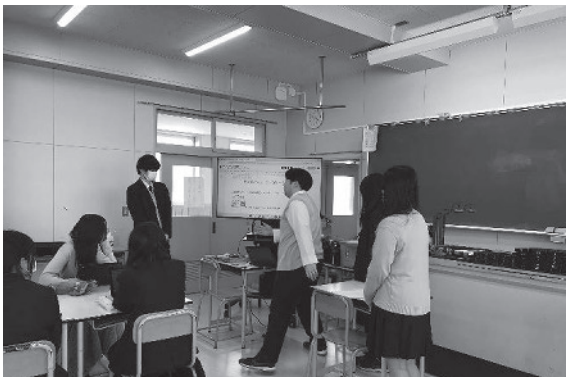
今回の NIE 実践には学校設定科目の「実用国語」で行った。

## ３.実践の内容

昨年度は別の科目で行い継続して、とも思ったが、前述のように選択する生徒の状況が昨年度とあまりにも違いすぎ、同じように授業を展開することは難しく、こちらでの実践となった。

実用国語は基本的に問題演習をやりつつ国語に関わる知識を深めるもので、国語、特に言葉そのものに興味を持つ生徒が多い。

しかしながら、新聞で使われる言葉となると勝手は違い、言葉よりそれを取り巻く社会の状況などの説明が必要で、問題演習のように興味を持つのは難しかった。



そこで、何度かまわし読み新聞の作成を行い、まずは新聞にふれる経験を積み重ねた。

①まわし読み新聞

昨年度もまずは導入として行った。同じ新聞を共有すると、自然と話題にも共通する部分ができ、話し合いもより進みやすい。

しかし、今年度はまず、新聞を読む、ということが難しく、見出しだけを眺める、写真ばかり見る、といったことが散見され、コメントとしての言葉もなかなかでてこなかった。

見出しだけではなく、リードや本文も読むこと、身近な話題、知っていることなどを抜き出していくことなどを続けることで少しずつでもコメントなどは増えていった。

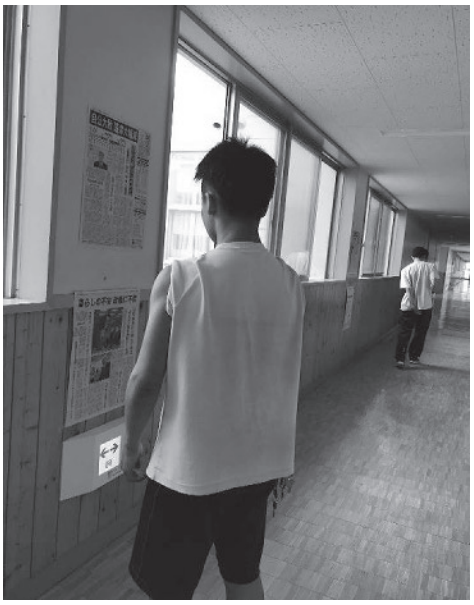
できれば、ここから切り抜きに進みたかったのではあるが、そもそも予定していなかった科目でもあり、時間をとるのがなかなか難しく、そこまでの活動にはいたらなかった。

②　参議院選挙

参議院選挙に向けて、日本新聞協会から投票権を持つ３年生向けて選挙前の３週間４紙が届けられた。

いろいろな方法が考えられたが、できれば、一度に多くの生徒に、とも思い、各紙の１面を３年生フロアに掲示。それ以外を見たい場合は実践者のところへ、と生徒に話した。

実際、あまり投票権を持つ生徒もおらず、投票行動に影響があったのかは定かではないが、それなりに世間の話題が大見出しになっているのを活字で見るのはそれなりの印象があったようだった。



投票日までの間、掲示されている壁にかなりの生徒がなんとなく注目する。選挙がある、ということについての周知にはとても効果があった。

新聞の配布は投票日の翌日などに行われ、おかげで結果を生徒なりに総括していた。さすがに、選挙結果はいろいろな形で情報として知っており、各紙がいろいろな工夫をして報じているところは、感じたようである。詳細な理解があったかはさておき、生徒がそれぞれ新聞を見つつコメントをしているところをみると、効果は大きかったと思われる。

## ４．成果と課題

### （１）成果

①　とにかく「新聞」

情報はスマホからネットで、に「新聞からも」をいれていくこと。１面の大見出しに知っていることがかかれていると、ま、気になる。手に取る。その行動に結びつく生徒がでてきた。何気に置かれている新聞を手に取る生徒がとにかく増えた。

②　新聞を「読む」こと

手に取ってもなかなか本文まで読み進めるのは時間がかかる。そういった時間の提供はやはり必要だった。

日本語が読めればよい、という話ではなく、ただ、そのようなこともあって、夏の参院選の時配布された４紙の１面を３年次の教室前に毎日掲示したところ、興味をもつ生徒も増えた。選挙権のある生徒は少なかったが、まだ選挙権のない生徒が「選挙権があるなら投票に行けよ」と他の生徒に促していた場面もあり、少し身近なものに感じたと思う。

### （２）課題

①

とにかく「昨年度を発展させて」も「新しいことを何か」も全くできなかった。

本来予定していなかった科目でもあり、時間に限りもあったが、準備にもう一工夫も二工夫も必要であった気がする。

②

実践指定校２年目で、新聞の取り方にもっと工夫が必要だった。今まで１年目を２回やっていて、２紙くるのが当たり前になっていた。もっと状況に応じた取り方を考えるべきだった。

参院選の時を考えても、複数紙あるほうが生徒の目もひきやすい。興味もひきやすかったかもしれない。

## ５．おわりに

今年度はかなり未消化の部分が多く、なかなかうまく取り組めなかったことが悔やまれる。ただ、NIE ではないが夏の参院選の祭などを見ると、新聞への関心はある程度持たせられたと思う。できれば今後もっと活用した取り組みをやっていきたい。

２０２５年度　NIE 実践報告

# 新聞を読む、活かす（５年目の取組）

北海道富良野高等学校　教諭　北村　智裕（地理歴史・公民科）
教諭　坂　　大祐（地理歴史・公民科）
教諭　小森　　猛（国語科）

## １．はじめに

本校は、富良野市内に２校あった富良野高校（普通科単位制）と富良野緑峰高校（職業学科）が今年度４月に統合し、「北海道富良野高等学校（単位制）」として新設された。

《全校生徒数：４６３名》

〇１年次：普通科３学級
園芸観光デザイン科１学級
電気情報システム科１学級

〇２年次：普通科４学級
園芸科学科１学級
電気システム科１学級
総合ビジネス科１学級

〇３年次：普通科３学級
園芸科学科１学級
電気システム科１学級
総合ビジネス科１学級

【本校の実践】

ＮＩＥ実践指定は、旧富良野高校から継続して５年目となる。１年目からのテーマ「新聞を読む、活かす」を継続、発展させ、学校全体や複数の教科でさまざまな取組を実践した。

《学校全体の取組》

〇新聞コラムを使った朝学習（小論文対策、時事問題対策）

〇「いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募

《各教科の取組》

〇国語科の取組
・実践者：小森　猛
・科　目：『論理国語』
・対　象：２年次普通科
・内　容：「統計資料の読み取り」を目的とした単元での実践例

〇地歴公民科の取組
・実践者：坂　大祐
・科　目：『時事問題研究』
・対　象：３年次選択者
・内　容：「社会への関心を高め、問題解決に向けて考える力を身につける」ことをねらいとする実践例

以下、この２教科の実践を紹介する。

## ２．実践の内容

### （１）国語科の取組：『論理国語』

**【授業の計画と展開】**

**〈計画〉**

『論理国語』の統計資料の読み取りを目的とした単元として計８時間の計画での授業である。学習指導要領「読むこと」オの「関連する文章や資料を基に、書き手の立場や目的を考えながら、内容の解釈を深めること。」の達成を目標とした。

**〈展開〉**

１次　教科書の教材では本文の内容を補足した資料としてわかりやすいもの

で、資料であるグラフ単体の読み取りと、本文中におけるそのグラフの役割を考えるという基本的な読解の仕方を学習した。

２次　グラフなどの資料とは視覚的にわかりやすいというメリットがある反面、視覚情報に偏るため、差がないのに大きな差があるように思わせたりするような詐欺的な資料の使い方もよく見られる。そういったことも授業の中で考える時間を取りながら進める。

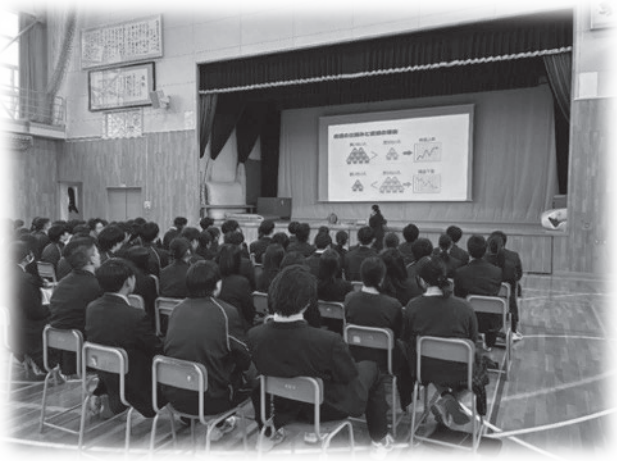
３次　さらに発展させて新聞社の考えや意見の違いを読み取り、スライドにまとめて発表する。

**【今回の実践について】**

展開の３次が今回の実践報告となる。

①　授業では統計資料を活用した文章ということで身近にある新聞を教材とした。同様の出来事を扱っており、かつ資料が使われている記事を複数の新聞から探す。

②　その記事を熟読し、さらに資料の出典元を調べ、特徴や数字を見てわかったことなどをメモしていく。そこから記事と照らし合わせて読み取れることと、記事になっていないことをそれぞれまとめる。



③　新聞社ごとの考えを推測しながら自分の考えを明確にして、それをスライドにまとめる。

今回の指導目標ではないが全体で発表する機会（左下写真）を設けた。

**〈成果〉**

グラフを意識しながらまとめた生徒については、そのグラフを用いた意図まで読み取りながら記事とその出来事について考察することができていた。あわせて新聞社がどのような立場・目線で記事を書いているのかを考えてまとめることができた生徒も見られた。読者を意識している新聞を活用することで、グラフや資料が文章に与える効果を感じ取っていたように思う。

**〈課題〉**

グラフの話はしたが、どうしても文字に引っ張られてしまう生徒がいたことも事実である。特に見出しにとらわれ、さらにリード文や本文だけを注視する生徒が多く、グラフについてもわかりやすいため字面の通りの読み取りにとどまってしまう傾向が見られた。今後は資料を使う側の視点で考える時間を設けて、資料の読み取りと活用について考えさせていきたい。

### （２）地歴公民科の取組：『時事問題研究』

『時事問題研究』は、地歴公民科の学校設定科目である。３年次対象の選択科目で今年度は 35 名の履修者がいる。社会への関心を高めること、自らテーマを設定して調査活動を行う中で、問題解決に向けて前向きに考える力を身につけることをねらいとしている。新聞を利用した授業を行う場合は、読むことへの抵抗感・負担感を和らげるため、生徒達が考えやすい身近な話題や、賛否が分かれる問題などを扱うことも必要と考えている。

以下、これらを意識した授業内容を紹介する。

**Ⅰ　「問い」を設定する**

**〈手順〉**

①　個人での活動

・外国人をめぐる問題の背景を読み取り、自分なりの疑問点をワークシートに記入。

・問いの解決に向けて、各自で調査。

②　班内交流

・４～５名で班を構成し、意見交流を行い、班としての意見をまとめる。

③　全体交流

・発表時間は３分。

・各班代表者が発表。

④　まとめ

・関連のニュース動画を視聴し、具体的な対策を丁寧に議論する必要性を説明する。

岐路の多様性

「治安 悪くなってますよね」

排斥助長する動画 日常覆う

2025年10月27日　北海道新聞

**〈留意点〉**

①　意見交流の際は、他人の意見を否定しないこと、自分の考えと異なる考えを知ることが大切であると伝える。

②　記事の内容は、地元の富良野でも起こりうる（起きている）問題として捉えることを指摘する。

**Ⅱ　「見出し」を考案する**

７月の参議院選挙で初めての投票を行った生徒がおり、既得知識の復習も兼ねて実施した。

**〈手順・留意点〉**

①　「主見出し」と「袖見出し」について解説する。

②　記事を読ませた後、「主見出し」と「袖見出し」を考えさせる。

③　実際の見出しを確認し、自分の案と比較することで、記事の核心部分への理解を深められると考える。

（3年　組　番　氏名　　）

THE YOMIURI SHIMBUN

讀賣新聞

10月11日

公明 連立離脱へ

①【主見出し】

②【袖見出し】

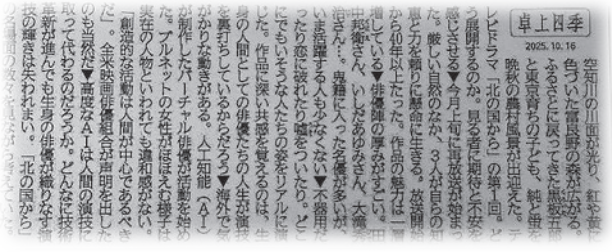
〈前文〉

高市氏 一方的不満

2025年10月11日　読売新聞

**Ⅲ－１　コラム欄の活用～その１**

北海道新聞「卓上四季」を利用。以下のコラムは、地元である富良野を舞台にしたテレビドラマ「北の国から」第１話の場面を紹介することから始まる内容だった。本ドラマは「富良野」の名を全国区にした作品ではあるが、放送開始から40年以上が経過しており、ドラマのタイトル程度しか知らない生徒が多いのが実状である。記事を通して地元の魅力を再認識する機会になればと考えた。


卓上四季

2025. 10. 16

2025年10月16日　北海道新聞

〈手順・留意点〉

① 記事を音読。1行読んだら次の生徒が再び1行読むという作業を繰り返す。

② 文章で表現されている富良野の風景や登場人物の様子を想像、発表させて、生徒達の発言は板書し、その内容を全員で共有する。

③ 記事で紹介されている場面を実際のドラマの映像で10分程度視聴する。

④ 文字で表現された情景と実際の映像との共通点や、自分たちがイメージした内容との違いについて感想を交流

⑤ このコラムとほぼ同時期に発表された、「市区町村魅力度ランキング」において、富良野市が毎年上位であることも伝えている。

**Ⅲ－２ コラム欄の活用～その２**

**（過去の「朝学習」での取組）**

〈手順〉

① コピーした記事を配布（前日に配布しておくことも可能)、1行読んだら次の生徒が読むという作業を繰り返す。

② 読めない漢字や読み間違いは、その都度教員が訂正・指摘する。

〈留意点など〉

① 席が離れている生徒にも聞こえるように、大きな声で、ゆっくり読むことを心懸けるよう伝える。

② 漢字を読めないなどは恥ずかしいことではなく、わからないままの方が恥ずかしいと声をかけることに努める。

③ 年間を通して実施することで、多くの慣用句、ことわざ、漢字に触れることができる。

④ 最新の時事を話題としており、面接試験や小論文対策にも有効である。

⑤ 配布から音読終了まで5分弱で、教員生徒共に負担感なく継続することが可能である。

⑥ 新聞を切り取り、コピーして配布するだけで、ストックも容易である。

〈今後の課題〉

① 一定期間（10～15回）経過の度に、漢字の読み取りテストを行い、定着度確認の機会を設定する。

② 音読後に、その記事にふさわしいタイトルを考案する。

③ 国語科や地歴公民科と連携し、長期休業の課題として、印象に残った記事について調べ、まとめる。

## ３．おわりに

今年度、夏休みの課題として全校生徒で取り組んだ「第 16 回いっしょに読もう！新聞コンクール」（日本新聞協会主催）では、３年連続で優秀学校賞に選ばれた。

このコンクールの目的にある、新聞を読むことで

○社会への関心の広がりを促す

○社会の課題への「気付き」を促す

○家族･友だちとのコミュニケーションを促す

○考えを深める姿勢を促す

○考えをまとめて表現する力を培う

ことは、将来を担う高校生にとって必要な要素である。

さらに、生徒には、新聞等の諸資料からさまざまな情報を適切かつ効果的に調べまとめる技能を身に付けるとともに、地域や社会に目を向け、そこからさまざまな課題を見つけ、それを解決するために行動をする力を育んでもらいたい。

本校のＮＩＥ実践のテーマである「新聞を読む、活かす」を今後も継続・発展させていきたい。

２０２５年度　ＮＩＥ実践報告

# 「新聞を活用した学びの実践」

～ＳＨＲでの新聞記事の活用と新聞コーナーの設置を通した生徒の日常に新聞を取り入れた実践報告～

北海道科学大学高等学校　教頭　山下　卓

## １．はじめに

本校は系列に北海道科学大学（工学部・保健医療学部・薬学部・未来デザイン学部）を有する私立高校である。3年前の2023年4月から大学所在地である手稲前田キャンパスへ移転し、大学と同じキャンパスの強みを活かし、日常的に大学教育や大学生に出会うことができる「高大一体教育」がスタートした。昨年度から、系列校推薦で系列大学に進学する生徒は3年後期で大学の授業を先取りする「コンカレントプログラム」がスタートした。また、3年目の今年はこれまで以上に大学との交流が充実し、高校だけではできない放課後の「ものづくり」やプログラミング教室、部活動の連携など、生徒の成長を促す取り組みが充実しつつある。また、地域の子どもたち向けの高校生、大学生が協力して行う取り組みなども検討されており、地域をキャンパスにした学びの充実が今後も予定されている。

今年度はNIE実践6年目となり、昨年度に引き続き、朝のＳＨＲにおける新聞活用を実践した。また、3階の職員室と進路室の間のスペースにNIEの新聞を含め、常時3紙を閲覧できるラックとスペースを常設した。また、図書局員の協力を得て、【社会総合】、【教育/環境】、【医療/技術/スポーツ】の3カテゴリーに分けた新聞スクラップファイルを作成し、常設している。

今回は2学年の朝のＳＨＲにおける新聞活用の実践事例と今年から新設した、新聞コーナーの取り組みについて報告する。

## ２．朝のＳＨＲにおける新聞活用実践

※本校生徒は全員、学校指定iPad保有

（1）内　容

朝の授業前の時間（8：30～8：45）に教員が選んだ新聞記事を毎日生徒に配信している。新聞はできる限り、生徒の興味を引くように、身近な話題やスポーツ、政治・経済など、堅い内容ばかりにならないように、工夫してセレクトしている。時折、芸能記事や4コマ漫画なども取り入れ、「今日はどんな記事が出ているだろう？」と関心を持ってくれることが一番大切だと考えている。また、朝のスタートの際に新聞記事に触れることにより、落ち着いた雰囲気で1時間目に入れることも魅力である。本校では2年次に1年間を通した探究活動を行っており、その探究テーマのヒントや手助けになる記事もセレクトしている。

生徒のiPadに毎朝配信

（2）目　的

この取り組みの主な目的は①読む力を向上させる。 ②新聞を通し世の中の動きについて知り、様々な立場からの物の見方について考える。③1年間を通して行っている探究活動のヒントを見つける。この3点である。また、生徒によっては、何気ない記事をきっかけに、更にその記事を掘り下げて、探究活動に還元したり、進路選択のきっかけになった記事に出会ったりという様々なプラスの面や副次的な効果が見られている。特に今年度は某大学の公募推薦の課題として、「自分の進む学部に関する新聞記事を１つ取り上げ、要約し、自分の意見を述べる」というものが課せられた。該当生徒は日頃から新聞を目にし、注目した記事は保存していたため、課題に対して余裕をもって向き合えたという事案もあった。

（3）生徒の様子・効果など

入学後から継続的にこの取り組みを始めているため、「新聞を読む」ことに多くの生徒が慣れ、学校で新聞記事を読むことがあたり前となっている生徒が増えている。また、（2）でも触れているが、記事をきっかけに単純に「知らないことを知ることができた」から一歩踏み込み、「このニュースの背景を知りたい」「このニュースの将来への影響を考えたい」というレベルで新聞記事を読むことができる生徒も増えてきている。学校が読むことを押し付けるのではなく、新聞記事に触れる「時間」や「場」を提供することにより、自然と読むことがあたり前になり、この場だけの機会に限らず、自宅等でも興味を持って新聞記事に注目してほしいと考えている。今後も、情報を入手する媒体として、気軽な(真偽不明な怪しい記事も多いが)インターネットやSNSからの情報だけに頼るのではなく、新聞など様々な媒体から情報を入手し、正しく知り、正しい判断につなげていくことが重要だと考える。また、新聞各社が「自然災害」や「戦争」などをテーマに、振り返るべきタイミングで適切な記事を取り上げているため、生徒にとって非常に参考になる記事を各新聞社から入手できることも魅力である。

（朝新聞一例）

以下のような新聞切り抜きを担当者が毎日 2～3 枚程度配信している。生徒は印象に残った記事を選び、感想やコメント、記事の要約などを毎日提出している。担任は簡単なコメントや感想を個別に返信している。

※アプリ（ロイロノート）で配信

2学年事例①

北海道新聞 2025年5月20日

(配信切り抜き一部抜粋)

陸自大雪像1基に減
2基から 訓練重視 27年以降
さっぽろ雪まつり
5基維持 市長「厳しい」
買ったことない、売るほどある
江藤農水相 コメ巡り発言
首相注意受け撤回・謝罪
代表格となるキャラクター

生徒からの感想・コメント（一部抜粋）

「国民の感覚とずれている不適切な政治家の発言に悲しくなった。苦しい状況の消費者の立場を考えるとあり得ない発言である。選挙で信頼できる政治家を選ぶことが大事である。」

「雪まつりはイベントとして楽しみでもあり、観光面でも大きな存在である。これまで関わってくれた自衛隊が訓練重視で削減されるということは、それだけ日本を取り巻く環境が悪化していると考えさせられた。」

北海道新聞 2025年10月7日
(配信切り抜き一部抜粋)

坂口氏 ノーベル賞
大阪
生理学・医学賞
免疫抑える「制御性T細胞」発見
がん治療・臓器移植に光
秋サケ漁獲 10年で最低
北海道産 47%減 主力魚少なく
私立高進学 関心高まる
来年度から授業料無償化
経済的負担、中堅後進路を考慮

生徒からの感想・コメント（一部抜粋）
「研究の成果がノーベル賞という結果となり感動です。ここからより一層、医学の発展につながっていくと思います。私のようなアレルギー疾患の治療や臓器移植の進歩などに新たな道が開かれると思うので期待しています。」

「私立高校の無償化は賛成です。自分の行きたい学校を経済的な面で諦めることもあったと思うので選択肢が広がると思います。勉強すればするほど選択肢が広がると考えれば、努力する人が報われていいなと思いました。」

北海道新聞 2025年10月14日 配信
(配信切り抜き一部抜粋)
※修学旅行前は沖縄での平和学習に向けて、戦争に関わる記事を集中的に掲載

被爆80年 もう一度原点に
北海道出身 沖縄で果て

生徒からの感想・コメント（一部抜粋）
「戦後 80 年の節目が過ぎても、戦争を忘れないために、過去の戦争報道を続けていってほしい。修学旅行の沖縄では戦争について現地でしっかりと学び、深く考えたい。」

「広島が被曝してから 80 年を迎える今、私たちはもう一度戦争について考えるべきだと思う。時代が進むにつれ、戦争を知らない人が増え、戦争への恐怖心が薄れていくことが非常に怖いと思った。」

## ３．新聞コーナー（ラック・スクラップファイル・閲覧スペース）の新設

今年度から新聞記事の配信以外にも、新聞に目を触れる機会を増やそうと考え、生徒の出入りの多い職員室前に新聞ラックと閲覧スペースを常設し、いつでも３日分の３紙を閲覧することが可能である。まだまだ閲覧者は少ないが、今後は新聞を活用したイベントを企画し、「新聞がある日常」を定着させたいと考えている。また、図書局員が協力して記事を３カテゴリーに分け、スクラップを作成しファイリングしている。好きなジャンルの記事を気軽に読むことや探究活動の情報収集の一助となっている。

新聞用ラック（3紙3日分/スクラップファイル）

スクラップファイル記事例
ジャンル【社会総合】
読売新聞 2025年4月7日
（ファイルから抜粋）

留学生 バス運転手に
人手不足解消へ育成モデル事業
免許取得■日本語教育■生活費支援
札幌市など3者

ジャンル【教育/環境】
朝日新聞 2025年10月1日
（ファイルから抜粋）

スポーツの楽しみ 療養続ける子たちへ
大学イベント招待 やりたいことサポート
「誰もに権利」学びを実践 競技への意欲に

## ４．終わりに

本校では総合的な探究の時間を中心に、主体的な学びに積極的に取り組んでおり、ICT や新聞など様々なツールを活用することにより、様々な学びの可能性があることを感じることができた。今後も学校として、生徒の主体的な学びを促す活動の場づくりを継続的・計画的に行っていきたい。また、新聞の配信を通し、「読んで理解する」力を育むことはもちろん、真偽不明な様々な情報が溢れる現代において、これから社会に巣立つ高校生においては、正しい情報から正しい行動につなげる入り口として「新聞」は欠かせないものであることを実感した。今後も生徒の成長を促す大切なツールとして、より良い取り組みを継続し、新聞を活用した教育活動を更に模索していきたい。

２０２５年度　ＮＩＥ実践報告

# 「日常的・継続的」な新聞活用の取り組み

北海道札幌手稲高等学校　教諭　嶋崎俊樹（野﨑大三　倉部英利子）

## １　はじめに

本校は１～３年次各８学級（計２４学級）、全校生徒９３０名の全日制普通科単位制高校である。昨年、本校は創立５０年目を迎えた。５０周年を節目に、生徒はあらためて学校の歩みを認識するとともに、校訓の「継続は力なり」の伝統を受け継ぎ、「文武両道」の学校生活に邁進し、これから進む実社会の現実に立ち向かう決意を新たにした。

本校のほとんどの生徒は大学進学を目指している。そのため、進路実現のための講習が放課後や休日、長期休業中に実施されている。また、キャリア教育にも力を入れており、１年次では６０を超える事業所へ訪問するインターンシップミッション、２年次では各大学から講師を招き１０を超える講座を４週にわたりひらく「学び探究ゼミ」が行われている。さらに、部活動も活発で加入率は８割を超え、これまでに全国大会出場の経験がある部活動も数多くある。このように授業以外での活動も盛んな学校の中で、生徒は忙しくも充実した毎日を過ごしている。

## ２　実践の経緯

本校は１１年前からＮＩＥの実践指定を受け、当初は「情報」担当の教諭が単独で新聞を活用した授業実践を行っていた。実践指定２年目からは社会科（本校では地理歴史科と公民科が社会科として教科を運営）も加わり、社会科では１０年目の取り組みとなる。

新聞を活用するねらいとしては、①新聞に触れる機会を提供して社会の出来事への関心を高め、これから生きていく社会に対するイメージを持たせること、②新聞記事を題材とした言語活動を通して、資料活用の技能や思考力・判断力・表現力を身につけさせることである。

このねらいを実現する上で最も心がけていることは、今回の実践報告の表題にもなっている「日常的・継続的」な新聞活用という視点である。本校ではこれを可能とするために、日ごろからできるだけ時間や労力をかけずに、無理せず実施できる内容で実践を行ってきた。従って、報告する実践は例年とほぼ同じ内容であり、取組としては不十分な点もあろうかと思うが、継続できる実践として紹介したい。

## ３　実践の概要

### （１）「３分間スピーチ」

「３分間スピーチ」は、２年次「公共」の授業において実施している。

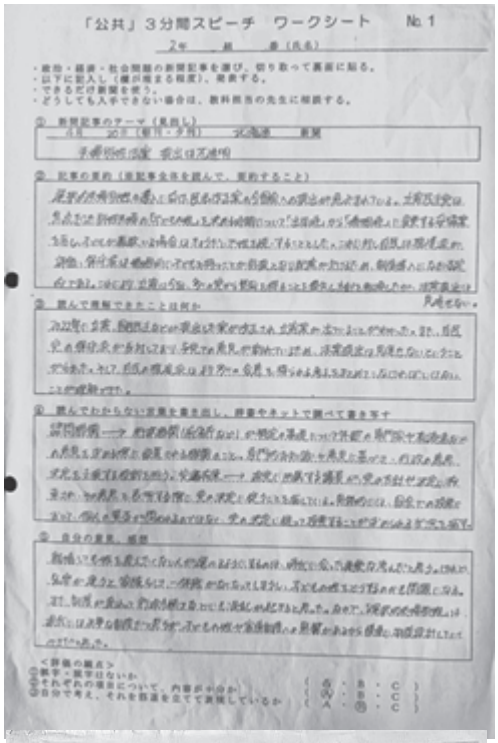
実施は、①あらかじめ生徒全員にワークシート（Ａ４、１枚）を配布しておく、②生徒は各自、気になった新聞記事を一つ選びワークシートの各項目に記入する、③ワークシートのウラ面に選んだ新聞記事を切り抜いて貼る、④１時間で１人ずつ、クラスメートの前で発表する、という手順で行われている。

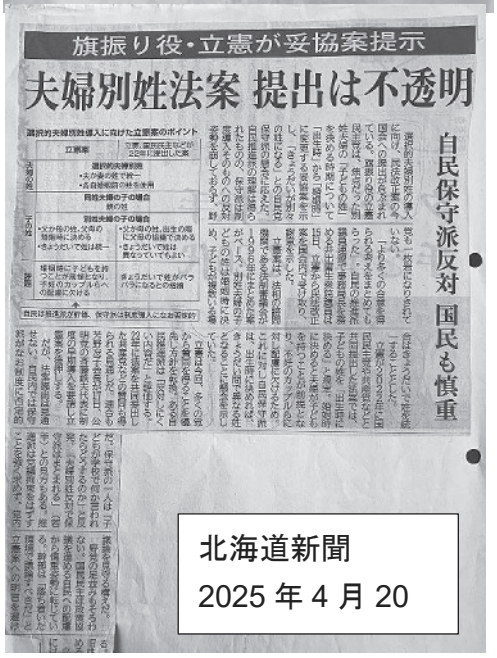
ワークシートに記入する内容は「新聞記事のテーマ（見出し）」「記事の要約」「読んで理解できたこと」「読んでわからない言葉」（調べた結果を書き込む）「自分の意見、感想」であり、生徒はこれらを、読み上げる形で発表する。

取り上げる記事は政治、経済、社会問題から選ぶように伝え、芸能やスポーツの記事は避けることとしている。新聞を購読していない家庭の場合にはコンビニエンスストアなどで買う

か、担当教師の下、学校で購入している新聞、あるいはインターネットで配信される記事などを利用することとしている。ただし、インターネットの記事を利用する場合は新聞社や通信社で発信している信用度の高いものを利用するよう指導している。

授業者は、生徒の発表が終わると簡単な解説やコメントを加える。授業者のコメントを含めて授業のはじめの１０分程度を使い、その後、通常の授業に入っていく。


「公共」３分間スピーチ　ワークシート　No.1


旗振り役・立憲が妥協案提示

夫婦別姓法案 提出は不透明

自民保守派反対 国民も慎重

北海道新聞
2025 年 4 月 20

かつては１年次の「現代社会」の授業で行っていたが、現在の本校の教育課程では１年次において公民科の授業が無いため、２年次の必履修科目「公共」において実践することになった。

最近は新聞を購読している家庭が減り、新聞を手にする機会が少なくなった。しかし、この１回の発表のために新聞を買ったり探したりしなければならなくなったために、むしろ質の高い記事を選ぶようになり、発表までの取り組みが丁寧になったように思われる。

言うまでも無く、「３分間スピーチ」はスピーチやワークシートの記入を通して探究的な活動が行われることになる。読解力や表現力を養うことができるだけではなく、他の生徒や教師の意見を聞くことで思考を深めることができ、本校の新聞活用の中心となる大切な取り組みであると言える。なお、副次的ではあるが、教師は当日までわからないスピーチ内容にコメントすることになるので、教師自身の指導力向上にも役立っている。

（２）「新聞コンクール」への応募

１年次での新聞活用の機会を得るため、日本新聞協会主催の「いっしょに読もう！新聞コンクール」への応募を行っている。地理歴史科の授業の中で、今年度も１年次の夏休みの宿題として参加させた。１年次の生徒全員による応募が５年目となり、今年も本校は学校奨励賞をはじめ個人の賞をいただいた。日常の学習の取り組みが外部に評価されることは、生徒にとって学習への大きな励みとなっている。

「新聞コンクール」の特徴は、家族や友達に記事の意見を聞いて記入する欄があることである。それは、家族や友人とのコミュニケーションの場面や、新聞に触れる機会を増やすことができるだけでなく、多様な意見を知り、思考を多面的に広げる機会をもたらしている。家族や友達という親しい相手が議論をする相手であり、記載する文章量もさほど多くないことから、生徒には取り組みやすい企画となっている。

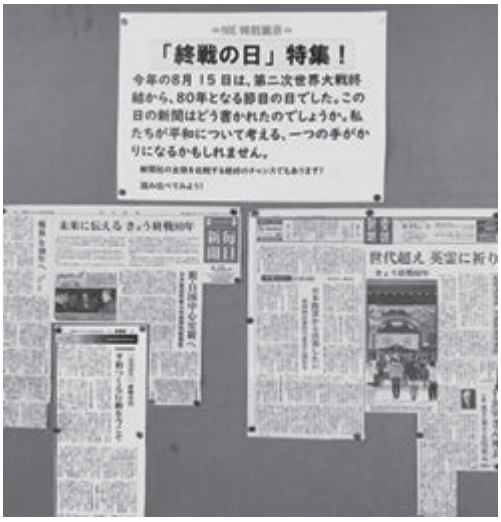
〈表彰状授与 記念撮影〉

〈取組内容の報告および校長との面談〉

（３）「ＮＩＥコーナー」

新聞そのものに触れる機会を日常的に提供するため、例年どおり１年次の階の水飲み場に「ＮＩＥコーナー」と題して配達された新聞の閲覧スペースを設けた。毎日、複数紙の記事を比較できるように、必ず月２紙購読し、掲示にも「〇〇新聞と□□新聞　二紙読み比べ」という言葉を入れて情報を比較検討するリテラシーを意識させている。

今年度も引き続き憲法記念日の社説や世論調査を比較する特別展示を実施した。また、終戦の日には、新聞各社の特集とともに現在でも続く戦争や紛争の実際を取材した記事を掲示し、日本の戦争に対する意識と世界の現実を対比できるように工夫した。今年は特に「北海道新聞」が 1945 年 8 月 15 日の状況を、現代の新聞に再現した特集があり、当時の状況や日本国民の意識を推察させることができる掲示ができた。



（４）その他の新聞の活用

国語科が１・２年次の朝学習の一環として、社説やコラムを両面に印刷したプリントを作成し、生徒に配布している。また、新聞への投稿を学習指導に利用している実践もある。読解力や記述力が一層重視される大学受験においてもその力が試されることが多く、実践的な場面でも培われた力が役立っている。

## ４　成果と課題

（１）日常的・継続的な活動と授業実践

本校公民科でのＮＩＥの実践は、年間を通して無理なく取り組める内容のものを意識して実施してきた。新教育課程になり、本校の教育課程の関係上、社会科の１科目を数人で担当することが多くなったが、「３分間スピーチ」「新聞コンクール」については、教員間の合意と協力により継続して実施することができた。新聞が身近にあり、生徒が手に取って読み込んだ経験が、授業展開における新聞の活用の垣根を低くし、授業においてリアルタイムな話題を新聞を使ってコンパクトに伝えられたという利点も感じられた。

（２）課題

①社会参加のための継続的な新聞活用

「３分間スピーチ」や「新聞コンクール」などは、一時的な機会に過ぎない。「ＮＩＥコーナー」に毎日その日の新聞を並べているが、残念ながら開かれた形跡のない日もある。

新聞の持つ情報の信頼性や多様性、継続性を利用して、まもなく成人する高校生に幅広く社会に関心を持ち続け、社会を形成する個人として、いかに情報を得続けようとする意志を定着させるかがこれからも課題となる。

②メディア情報リテラシー教育のあり方

ＳＮＳの発達による情報の氾濫や、むきだしの個人の意見表出が世論の形成や人間関係の構築に大きな影響を及ぼし、市民社会のあり方に変革をもたらしている。これらは、身近な国内の選挙結果への影響や、国際紛争や戦争にも関係していることは、今日明らかである。

これからの社会を形成する生徒たちに、単なる情報獲得技術やモラルとしての情報教育だけではなく、情報の信頼性の見極めや、どのように情報を活用して自身の生活や社会を向上させていくかを、具体的に教育することが重要となる。そのために、既存のメディアの利点をいかに活用していくかが、今後の課題といえる。

## ５　おわりに

本校におけるＮＩＥの実践は、日常的・継続的な取り組みであることを基本としてきた。これからも課題に取り組んで工夫を続けていきたいが、その際にも本校教員や生徒の現状をよく理解して、どの教員や生徒にとっても継続できる実践であることが重要だと考える。

一方で、同様の取り組みはこれまでの指導の域を出ていないという側面もある。課題にもあるように、メディアと教育のあり方は今後重要なテーマとなる。次年度以降、本校では、これまでの指導の目的やねらいを振り返りつつ、新聞活用だけにとらわれない新しい持続可能で有効な学習方法も探っていきたいと考えている。

２０２５年度　ＮＩＥ実践報告

# 新聞記事を利用した授業づくり

星槎国際高等学校帯広学習センター　教諭　高橋知行

## １．はじめに

本校は、広域通信制、単位制の普通科高等学校であり、帯広学習センターは全国にある学習拠点の１つとして２０１０年に帯広経済センタービル内に開設、２０１６年に現在地に移転した。

今年度、選択授業の「宇宙」（１～３年生混成）の時間で「新聞記事を利用した学習」に取り組んだ。

## ２.生徒の様子

生徒は帯広市内のほか十勝管内町村や日高、釧根地域、道外からも入学し、約３００名が在籍している。

登校型通信制として「街全体が学びの場」を掲げて、生徒たちは帯広神社祭や重要文化財施設の活用、街おこし活動、氷まつりなど、地域のさまざまな場面にそれぞれの関心や特技を活かして参加している。

また本校では高等学校卒業に必要な科目、単位を修得する「必修授業」に加えて生徒の興味、関心に応じた「選択授業」を設けることで「卒業要件を満たす最低時間、単位」の取得にとどまらず、毎日登校してさまざまな学習や相互の交流を通じた豊かな人間性の涵養、幅広い知識、技能を身につけられるようにしている。

今回、実践した選択授業「宇宙」もその１つで、宇宙に関心をもつ生徒が集まり、それぞれの視点から広く宇宙に関することを自分たちで「調べ、まとめ、発表する」活動を８～１０時限のサイクルで行っている。これまでに取り上げられたテーマは「ブラックホール、ホワイトホール」、「宇宙の歴史」、「占星術」、「謎の天体」、「宇宙食」など多岐にわたっている。

## ３．実践の内容

（１）学習のテーマ　十勝と「宇宙」

（２）学習のねらい　①「宇宙」は遠く、広大な世界をイメージしがちだが、身近なところで行われている取り組みを知り、地域の将来を考える。②科学技術の展開は社会的な背景、環境と関連することを身近な例から考える。

（３）学習時間　５０分、１コマ

１５分:「宇宙」に関して十勝ではどのような取り組みがあるか調べる。

３５分：新聞記事を読んで「宇宙」に関する地域の取り組みと将来について考える。

（４）学習展開　①十勝管内市町村にある施設や内容、地域の取り組みを調べる。

②地域紙の十勝毎日新聞が２０２５年１０月１３日から１８日まで連載した「大樹町の宇宙のまちづくり」を読み、科学技術と地域社会の関係を考える。

## ４．成果と課題

（１）生徒たちがスマートフォンなどで市町村広報誌や新聞記事、関連団体のホームペー

ジなどから次のような事柄を調べだした。

帯広市：○児童会館にプラネタリウムがあり、季節の星座などが上映されている。児童会館屋上のドームに天体望遠鏡があり、時々星の観察会が催されている。児童会館では小学生の宿泊学習も行われているので多くの子どもたちが利用している。○宇宙サミットを開催した。（とかち航空宇宙産業基地誘致期成会）○川西地区の長芋を使った食品が宇宙食に採用された。

大樹町：○多目的航空公園に宇宙航空研究開発機構（ＪＡＸＡ）の施設があり、気球の実験などが行われている。○インターステラテクノロジズ（ＩＳＴ）の施設があり、ロケットの製作や打ち上げをしている。○北海道スペースポート（ＨＯＳＰＯ）には大学や外国からもロケットの打ち上げに来ている。○今までに打ち上げたロケットの模型や固形燃料などの展示施設がある。

陸別町:○銀河の森天文台で天体観測が行われ、時々天体望遠鏡を使った観察会が催されている。○名古屋大学が電離層やオーロラの観測をしている。低緯度オーロラが話題になっている。○電離層の変化が激しいと GPS などに影響するので宇宙天気予報がある。

清水町：○牛肉やミニトマトを使った宇宙食の製造施設がある。

浦幌町：○約６，０００万年前に巨大隕石が地球に落下したときに飛散した物が堆積してできたイリジウムを多く含む地層を観察できる。

「宇宙」というキーワードから改めて管内市町村を見直して身近にある施設やそこで行われている事業や研究を知ることができた。児童会館はなじみのある施設だが、宇宙食の製造施設が近隣の小さな会社であったり、教科書に出てくる巨大隕石由来の地層が近くの町で露出していることなどは新鮮な知見

十勝毎日新聞（昭和27年8月1日第3種郵便物認可）©十勝毎日新聞社

2025年間キャンペーン 第4部『大樹町の宇宙のまちづくり』編

SYLO 宇宙新時代

# 誘致40年「開かれた港」に

## ① 初の外資ロケット打ち上げ

大樹町が宇宙基地誘致に乗り出して40年の節目を迎えた今年の7月12日、町内の商業宇宙港（北海道スペースポート（HOSPO））から、一機のロケットが打ち上げられた。打ち上げ自体は「成功」だったが、関係者に緊張の色はない。むしろ節目の年に、国内初の外資ロケット打ち上げという新局面を迎えられたことに、感慨深げだった。

北海道東北開発公庫（現在の日本政策投資銀行）は1984年、将来の宇宙利用の拡大を見据え、「北海道規模航空宇宙開発基地構想」を発表。これを進めた大樹町は85年に誘致運動をスタートした。

人口5,000人余りのまちが目標としてきたのは、「宇宙版シリコンバレーをつくる」というものその核として、例えば特定の企業が集まる「HOSPOの新射場」や「ロケット」からは、人工衛星や、打ち上げ場所（大樹町）を借りるなどについて、自治体とのやりとりがスムーズで、サポートが手厚い」と評価。7月の打ち上げにつながった。

同社がHOSPOから打ち上げたサブオービタルロケット「VP01」は、発射直後に異常が発生したため飛行を断念。第1段ロケットは海に、第2段は射点の北側約600メートルの町有地に落下した。

町とHOSPO運営会社スペースコタンが実施した安全監視に対する施設検査によると、事前に決めた期間内に飛行を断念（中止）したことや、機体がいずれも警戒区域内に落下したことから、「打ち上げは安全に実施されていた」と結論付けた。

### 宇宙開かすも意義

「宇宙版シリコンバレー」の目標は未達成に終わったものの、スペースコタンの小田切義憲社長は、前を見据えながらこう強調した。「成功とか失敗とか、明確にする必要はない。一歩一歩進めていく。成功したところは続けていく。要望があるならば、また改め直せばいいだけ。それがロケットではないのか」

黒川町長もまた、今回の打ち上げの結果には「ただわからない」と、「しっかり海に、第2段は射点の北に良かった」と結果として失敗だったと評価される点でも意義があるとする。大きな前進」と言んだ。その解中には、町職員派遣に応じて開かれて宇宙のまちづくり」の歩みが去来したとも、機体がいずれも警戒区域内に落下したことから、「打ち上げは安全に実施されていた」と結論付けた。

大樹町が「宇宙のまちづくり」を掲げて40年。町は何をなしたのか、これまでの動きを、町民の思いなどをリポートする。

◇

SYLO 宇宙新時代

# 「夢」を形につなぐバトン

## ② 歴代町政と宇宙

「宇宙のまちづくり」を掲げてから40年。先輩たちと歩み、ここまで来たが、という思いで、国内初の外資ロケット打ち上げ完了の前日を迎えた7月1日、大樹町の黒川豊町長は、町議時代から聞いた「宇宙のまちづくり」を振り返った。

### 壮大な発想

1979年入植の黒川氏、宇宙に向けた大樹の歩みが始まった85年、企画課の一職員として「宇宙」に携わり始める。「資料集めや、（数部職員や現役の人らを乗せる）運転手からの雑用係だった。本当に（宇宙基地が大樹に）できるのかと思いながら…」と笑う。

当時の町長は野口武雄氏（2000年死去）。「大樹は宇宙基地を」と言う壮大な発想に夢物語と思われる中、太平洋に面した広大な立地条件をアピール。そして、野口町政を引き継ぎ、1987年に町長に就任した植原敏氏（2021年死去）の3期12年間で、現在の宇宙産業の基盤が構築される。

この間、文部省宇宙科学研究所（当時）のヘリコプター実験（1989年）を皮切りに、大樹町の小型ロケット打ち上げ実験、ジェットエンジン、大気球など、数多くの航空・宇宙関連の実験も行われ、1,000人が滞在弱も完成した。

2000年には企画課長となった黒川氏、当時の町長は、町議員時代から宇宙基地建設の現場に関わり、宇宙開発をまちづくりの柱で、強力に推し進めた」と述懐する。

その代表町政で企画課長を11年間務め、宇宙関連の取り組みを最前線で担当した黒川氏は「ただ見ぬ夢の一つくらいなければ駄目だ」との思いで、強力に推し進めた」と述懐する。

基地建設の現場に関わり、宇宙開発をまちづくりの柱で、強力に推し進めた」と述懐する。

その代表町政で企画課長を11年間務め、宇宙関連の取り組みを最前線で担当した黒川氏は「ただ見ぬ夢の一つくらいなければ駄目だ」との思いで、強力に推し進めた」と述懐する。

HOSPOを視察に訪れた海経連の藤井裕会長（左）らを案内する黒川町長（右）。一つの町から始まった宇宙の取り組みも、今では北海道の新産業の柱として期待が膨かる（8月）

AXA）との連携協力協定を締結（98年）をはじめ、ジェットエンジン試験やＭＡＸＵＳ（カムイ）ロケットを打ち上げるなど大きな実験にも関わってきた。

その後、一時的に「宇宙」から離れたが、16年には企画課長に就任した黒川氏は、「宇宙版シリコンバレー」の実現を目指した、インターステラテクノロジズ（ＩＳＴ）の観測ロケット「ＭＯＭＯ（モモ）」初号機打ち上げ（17年）、高度100キロの宇宙空間に到達した観測ロケット「ＭＯＭＯ３号機打ち上げ（19年）」などにも携わった。

副町長を経て、23年に町長に就任した黒川氏。過去を長に就任した黒川氏。過去を振り返って、「成功とか失敗とか、明確にする必要はない。一歩一歩進めていく。成功したところは続けていく。要望があるならば、また改め直せばいいだけ。それがロケットではないのか」

黒川町長もまた、今回の打ち上げの結果には「ただわからない」と、「しっかり海に、第2段は射点の北に良かった」と結果として失敗だったと評価される点でも意義があるとする。大きな前進」と言んだ。その解中には、町職員派遣に応じて開かれて宇宙のまちづくり」の歩みが去来したとも、機体がいずれも警戒区域内に落下したことから、「打ち上げは安全に実施されていた」と結論付けた。

大樹町が「宇宙のまちづくり」を掲げて40年。町は何をなしたのか、これまでの動きを、町民の思いなどをリポートする。

◇

まちづくりは、「大樹・広尾地域を始めとし、町民の皆さまのご協力で、ここまで来られた」と感謝する。

黒川氏「競争勝つ」

この40年で宇宙開発の主役は官から民へ移り、宇宙ビジネスはロケットや衛星などの宇宙機に加え、衛星データや衛星を使った様々な分野へ広がる。ベンチャー企業や大企業など多様なプレーヤーが参入し、その動きも加速する。

町長就任後、町内のロケット実験も軌道が描かる。最終目標は多くのプレーヤーと同じ産業、地域コミュニティーが共存を図る「宇宙版シリコンバレー」の実現だ。「ＰＲと実績を重ねて、北海道スペースポート（ＨＯＳＰＯ）を運営する（スペースコタンン）を合わせ、国・道も連携し、競争に打ち勝ちたい」（松岡秀宮）

十勝毎日新聞　2025.10.13

十勝毎日新聞　2025.10.14

となった。

（２）十勝毎日新聞の記事を読んだ生徒たちからは、

・大樹町がロケット打ち上げを目指して40年前から取り組んでいたことに驚いた。

・歴代町長が継続して取り組めたのは町民の活動が続いたからではないか。

・太平洋に面して開けている地理的条件が良かった。

・漁業協同組合など地域団体が協力している。

・ロケット打ち上げには失敗がつきものだが、「目的をもった挑戦に失敗はない」という言葉が良かった。

・ロケット製造には部品を作る工場なども必要なので関連企業が増えるのではないか。

・企業が増えれば就職先も増えるかもしれない、地元で働けるところがあると嬉しい。

・本州の高校生が修学旅行で来ている。

・見学者への記念品を住民が手作りしているのは素朴でいい。

・モデルロケットを打ち上げてみたい。

・町長の「町に夢の一つぐらいなければ」という言葉は過疎化が進むなかで大切なことを言っている気がした。

・企業が来て、人口減少が鈍っている。

・発射場がロケットの打ち上げだけでなく子どもの教育や企業誘致など町全体の活動につながっている。

・火薬を使うモデルロケットを飛ばすのは資格などの条件があるのだろうか。

・大樹町は牛が多いけれどロケットの打ち上げは影響しないのだろうか。

・十勝では人口が減っているが、他の町はどんなことをしているのだろうか。

などの感想が寄せられた。

大樹町の取り組みは時流にあわせたものではなく、４０年の長い時間をかけて地道に積み重ねてきた活動がロケット打ち上げという目に見える形になって注目されるよう

十勝毎日新聞 (昭和27年8月1日第3種郵便物認可) ©十勝毎日新聞

2025年間キャンペーン 第4部「大樹町の宇宙のまちづくり」編

SX1.0 宇宙新時代

# 「探究学習」に最適の教材

大樹町が進める「宇宙のまちづくり」は注目、教育現場での素材としても注目を集めている。

## 人気のスクール

8月5～8日に、大樹町で開かれた「大樹エアロスペーススクール2025」。全国から集まった高校生20人が、宇宙航空研究開発機構（JAXA）による宇宙科学研究、民間企業のロケット開発、人工衛星を利用した未来の農業などに理解を深めた。

エアロスペーススクールはJAXAのプログラムで、「高校生に最新の航空宇宙分野を体感してもらう」ことが狙い。研究拠点がある長野県角田市、東京都調布市、茨城県つくば市、大樹町の全国4カ所で開催。大樹では2015年にスタートし、17年からは町との共催で開かれている。

大樹町のスクールは、宇宙のまちづくりを最前線でけん引する専門家らが全面的に協力することなどから、「高校生から非常に人気が高い」（JAXA）という。

今回も、JAXA大樹航空宇宙実験場、宇宙開発企業インターステラテクノロジズ（IST）、北海道スペースポート（宇宙港、HOSPO）の見学や専門家の解説に加え、火薬を使用するモデルロケットの打ち上げにも挑戦した。

こうした「ホンモノ体験」が高校生にとっては貴重（JAXA）。参加した山崎六花さん（奈良西大和学園高校3年）も、「関係者の講義を聴き、将来のビジョンが明確になった」と充実感をにじませた。

## 旅行商品にも活用

宇宙港を「教育現場向け

## ③ 教育現場も注目

の新しい旅行商品」として活用し、旅行需要の呼び水とする動きも、この数年で一気に加速した。

町と、HOSPOを運営するスペースコタンは22年7月、日本旅行（東京）と「宇宙による観光振興・宇宙のまちづくりに関する パートナーシップ協定」を締結した。24年5月には、初の修学旅行生となる第十高校（東京）の高校2年生70人が、町内で宇宙のまちづくりや1次産業の現状などについて学んだ。

この数年の教育旅行は、観光地を巡る「見学中心型」から、生徒自らが課題を設定して解決する「探究学習型」へと進化している。「宇宙港を中心に航空宇宙産業の集積を図り、道内の一大産業に発展させる」とする大樹町の構想は、探究学習型への最適の教材で、関係者はまだまだ伸びる余地があるとみている。

「地球環境にも通じる格好の素材」（スペースコタンの小田切義憲社長）となる宇宙に、1次産業のつながりなどが学べる内容。町も自負するプログラムで、

になったものであり、科学技術と地域課題に対する先見性、事業の持続性の大切さを学んだ。また、今後の発展には一つの町の事業から脱皮して多くの研究機関や企業などとの連携が必要となることを学んだ。

（３）課題　選択授業「宇宙」のなかで地域の関連施設などを調べ、大樹町の取り組みを取り上げた新聞記事を通じて地域の社会課題への視点のひとつを考えることを試みた。記事が４０年間の取り組みをわかりやすく要約していたので１時限に設定したが、将来像、他の地域への波及まで進めるには時間不足であった。また、余裕のある時間設定にして大樹町で事業に取り組んでいる当事者の話を聴く機会を設けることができれば、より充実した内容になったのではないかと考えている。

５．まとめ

科学技術と地域社会の関係性を考える素材として、大樹町の「宇宙」に関する取り組みを取り上げた。科学技術の発展は人間社会に多大な貢献をしてきたが、一方で武器にもなりうるという負の側面もある。近年、地球温暖化防止への取り組みとして二酸化炭素の排出削減、地中埋設、あるいは風力、太陽光などの自然エネルギーを利用する動きが活発になり、多くの企業が参画して各地で発電施設が設けられている。なかには、釧路湿原国立公園隣接地域でのメガソーラー発電所建設のように地域社会との合意形成が十分とは言い難い例もある。

自然科学の分野では知的探求や利便性の追求など新知見、新技術に関する研究、開発は一段と加速すると考えられるが、社会的に有効活用するには、社会の現在のニーズや流行だけでなく、それを使った後はどうするのか（廃棄の問題）、それを使う社会はどんな社会になるのか（将来像）なども考えることが大切な要素になる。

そのような観点で大樹町の取り組みを考えると、人口減少・産業の衰退などの地域課題に対して「夢」のような「宇宙」をキーワードに４０年の長期にわたって住民との合意に基づいて事業を継続してきたことは科学技術と社会との関係を示唆していると考えられる。

2025年間キャンペーン　第4部「大樹町の宇宙のまちづくり」編

SALO 宇宙新時代

町民の関わり　次代へ模索

⑥ 地元有志の取り組み

「大樹来訪の記念品！」として、大樹スペースが始めた「宇宙学記念缶バッジ」の制作作業（3月）

十勝毎日新聞　2025.10.17

2025年間キャンペーン　第4部「大樹町の宇宙のまちづくり」編

SALO 宇宙新時代

人口減が鈍化　企業進出も

⑦ 町内に「発射場効果」

十勝毎日新聞　2025.10.18

2025年度　札幌新陽高等学校 NIE実践報告

# NIEワークシートを活用した小論文作成

札幌新陽高等学校　教諭　櫻庭　彩寧

## １．はじめに

本校は札幌市南区にある私立学校である。現在、全校生徒は668名。2022年度より単位制に移行し、これまでのコース制「特進コース」「進学コース」「総合コース」「探究コース」の学びの良さを生かした「コンパス制度」を導入した。

それぞれのコンパスの授業の中では、演習に力を入れたり、知識の定着を目指したり、探究的に学びに向かったりなど、それぞれで学習の場が設定されている。

単位制に移行すると同時に、「縦割り」が意識された「ハウス制度」も導入された。全校生徒が「Blue・Green・Red・Yellow」の４ハウスに分かれ、学校祭や体育祭はハウスごとに競い合う。日常のHRも、混合で行われる瞬間があり、３年生の進路活動の様子を下級生が聞いていたり、１年生の初めての学校行事に上級生がアドバイスしたり、思い出を語ったりなど、学年を超えた交流の場がある。また、2・3年次の一部授業は学年をまたいで合同で行われているため、相互で学び合う瞬間がある。他にも、学校行事ではハウス内の他学年・他年齢と交流することがある。それらを通じ、多様な人との出会いを経験させる狙いがある。

新陽高校は2030ビジョン「人物多様性」を掲げ、多様な生徒一人ひとりに合った「学び方」を選択できるようになり、それを実現できるような環境の整備を図った。

▲画像　校舎の入り口にはスローガンが掲げられている

## ２．コンパス制について

2022年４月から単位制が始まり、自身の学び方を示す「コンパス制度」を導入した。

「アカデミア（アドバンス/ジェネリック）：大学の授業や研究などで高度な専門性の高い学習に必要な能力が身に付く学び方※アドバンスがより高度」

「クエスト：探究的な活動を通して新しい価値を創造する力が身に付く学び方」

「パイオニア：基礎学力の定着を目指すとともに自分の得意分野が見つかる学び方」

の３つのコンパスを設定。

本校入学時に決めたコンパスで1年間学び、2年次以降は自身で自由に時間割を設計することが可能となっている。

今回の授業実践については、本校の3年生対象の学校設定科目「実践国語」にて行った。

## ３．実践の背景

2022年度より新教育課程となり、共通テストの出題については現代文が一つ追加されることが示されていた。受験対策で言えば、知識と日常を繋げる仕掛けが必要となり、また、受験突破の技術として時間配分や解き方の指導が必要となる。

共通テストで追加された現代文の問題について、「実用的な文章」が加わったことで図表の読み取りが求められていた。今年度の共通テストからは、文章の構成を意識する問題であったため、それらを思考することが必要となる。

そしてその礎となる基礎学力の定着や、「考えること（思考すること）」「書くこと」への抵抗感を減らすために、ワークでの学習を検討した。

本校は定期テストを廃止し、単元ごとのテストの実施や小テストを行って知識の定着を確認しているが、意図的に教員が記述問題やその解き方を指導しなければ、解くこと自体を諦めてしまう生徒がいることも事実である。

そのような、学びを諦めてしまった生徒、諦めそうな生徒を支援しながらも、受験や進学を考えている生徒たちの成長をも促したいと考えた。

## ４．対象生徒

先にも述べたように、今回の授業実践については、本校の3年生対象の学校設定科目「実践国語」にて行った。

学校設定科目「実践国語」については、法定科目「文学国語」「論理国語」「古典探究」「国語表現」とあわせて設定されており、それぞれを受講するか否かを2年次秋時点で選択している。よって、希望者がこの実践国語の授業を選択することとなる。

選択した者の中には、総合型選抜や推薦入試（公募・指定校）に向けて志望理由書や自己推薦文、面接の対策を行いたいと目的が明確な生徒がいる一方で、「国語が好きだから」「他の授業を選ぶならこれかな」（消去法での選択）、「空きコマ」を埋めるためという正直な理由から受講選択を行なっていた者もいた。

国語の学力に差があることはもちろんのこと、加えて学習に向き合う意欲が多様となり、動機づけが必要な生徒も所属していた。

しかし、他のクラスと比較すると、受講人数については少なく、学びに向き合う体力の少ない生徒も、机間巡視の際に支援しやすいのがこの授業の特徴である。発展的な課題に対しても、班員同士で確認や教えあいがされていたり、不明点は教員に確認しようとする姿勢が見られるため、クラス全体として、意欲的に取り組む姿勢が見られる。

## ５.実践内容

ワークについては、北海道新聞社が提供している「道新でワークシート」を活用しながら、課題を提供した。

「道新でワークシート」は、北海道新聞で掲載された記事を元に作成されており、10分間程度で取り組ませることができる。また、記事に関連する問題が設けられている。模範解答も準備されているため、それと自身の回答を照らし合わせることで、正しく読めているかの確認を行うことができる。

この学習を行う際に、使用記事をテーマに則って選択し、ワークシートに取り組んでから小論文の作成を進めることに取り組んだ。

①（教員）テーマの設定

文章作成の抵抗感を減らすために、身近な話題の「熊」をヒントに「安全・安心を確保したうえで人とヒグマの共生を目指すために必要なこと」と設定。

②（教員）記事の選択

「道新でワークシート」のHPにてキーワード検索を行い、４記事を選択、印刷して配布

▼選択したもの

・*「ヒグマの生態・注意点学ぶ」2024年10月22日（火）朝刊　旭川上川版　18ページ*

・*「室蘭でクマ目撃」2023年5月14日（日）朝刊　全道版　26ページ*

・*「狩猟免許交付増加」2023年5月12日（金）朝刊　全道版　1ページ*

・*「人慣れクマ札幌にも」2025年9月28日（日）朝刊　全道版　1ページ*

（今後いつでも生徒が見直せるように、classroomを通じて、PDFデータの配信も行った）

このワークシートはhttps://nie.hokkaido-np.co.jp/でダウンロードできます

NIE

道新でワークシート

年　組　名前

ヒグマの毛皮を見せながら、生態について解説する浦田さん

ヒグマの生態・注意点学ぶ

点呂中小 鳥獣専門員が出前授業

【占冠】村の野生鳥獣専門員浦田明さん（41）による、ヒグマの出前授業が、占冠中央小で開かれ、1、2年生計8人が生態や遭遇した際の注意点について理解を深めた。

生活の授業の一環として、18日に実施。浦田さんは、ヒグマがアリやクルミなどを食べることや、姿が見えなくてもふんや足跡などの痕跡が残っている場合があることを説明した。

クマを引き寄せないための注意点を尋ねられて、「ごみの処理をしないで放置があった場合に引き寄せる」などの注意点を挙げ、「ヒグマがいることに気づく。自分がいることを気づかせることが大事」と呼び掛けた。

浦田さんはクマの毛皮や骨、ふんを持参。子どもたちは「すごい」などと興味津々だった。2年のAさん（7）は「食べるものによってふんの色が違うことにびっくりした」。同じく2年のBさん（7）は「背を初めて触ったけど、（感触は）ツルツルしてすごい」と話した。（千葉信彦）

2024年10月22日（火）朝刊 旭川・上川版 18ページ（記事は再編集しています）

① ヒグマはどんなものを食べるでしょう。

② クマを引き寄せないための注意点を二つ書きましょう。

③ クマに注意を呼び掛ける（よびかける）ためのメッセージを、5・7・5で書きましょう。

▲画像「道新でワークシート」A4～A3サイズで印刷し、生徒に配布する

③（授業）ワークへの取り組み

一人ひとりが個人でワークシートに取り組む。解答欄にも記載をするように指示する。

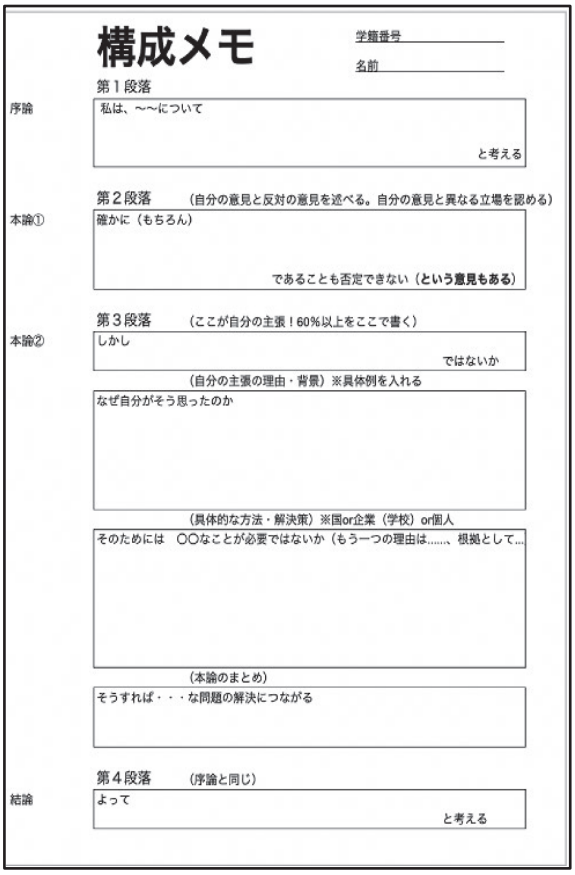
取り組みの中盤、手のとまる生徒への支援とともに、周辺の生徒と相談しながら取り組んで良いことを指示する。

教室全体の取り組みの終わりが見えてきたら、新聞記事の音読とともに解答の確認を行い、記事のどこに答えの根拠となる情報があったかを確認させる。

④（授業）小論文の骨子作り

今回、テーマは「安全・安心を確保したうえで人とヒグマの共生を目指すために必要なこと」と示した。抽象度が高いため、「個人で取り組めること」「市町村等の行政が行えること」など、生徒に、どのような文章を作るか想像させる。

新聞記事の情報を根拠にして良いと伝え、小論文の「型」として書く練習を行う。受験を考えている生徒については、解決策や意見文の作成に向け、「主張」と「根拠・例示」を複数取り上げる練習を行なった。


構成メモ

学籍番号＿＿＿＿＿＿

名前＿＿＿＿＿＿

序論　第１段落

私は、～～について

と考える

本論①　第２段落　（自分の意見と反対の意見を述べる。自分の意見と異なる立場を認める）

確かに（もちろん）

であることも否定できない（という意見もある）

本論②　第３段落　（ここが自分の主張！60％以上をここで書く）

しかし

ではないか

（自分の主張の理由・背景）※具体例を入れる

なぜ自分がそう思ったのか

（具体的な方法・解決策）※国or企業（学校）or個人

そのためには　〇〇なことが必要ではないか（もう一つの理由は……、根拠として…

（本論のまとめ）

そうすれば・・・な問題の解決につながる

結論　第４段落　（序論と同じ）

よって

と考える

▲画像　小論文の骨子を作成する際に配布

⑤原稿用紙に書き上げる

実際の小論文を想定し、構成したものを元に原稿用紙に書き、提出。骨子の作成の中で根拠等の情報をまとめることで、原稿用紙へ書き上げることへの抵抗を極力減らす工夫をした。

## ６．最後に

普段はインターネット（授業時はChromebookを使用）を用いて、情報の収集やレポートの作成を行っている生徒たちだが、今回の学習で自身で情報を読み、整理し、表現することができた。既知の情報と結びつけながら、新しい情報を得て、視野を広げるきっかけにできたと考える。

また、これを基礎として、小論文や長文の意見文の作成に繋げられる。読みの題材を、ワークシートから新聞に変更し、自身で新聞の記事の中から関連する記事を取り上げ、それについて同様の取り組みを行う。その活動の中でグループでの情報交換や、自身でまとめた文章と新聞記事をセットで他者に見せ、相互に評価することも可能であると感じた。

参考

「道新でワークシート」
（北海道新聞社）
https://nie.hokkaido-np.co.jp/worksheet

２０２５年度　NIE 実践報告

# 離島・小規模校の課題を基に読解力を伸ばす NIE

礼文町立礼文小学校　教諭　加藤　育海

## １ はじめに

本校は、日本最北の離島・礼文島の南部に位置する香深地区にあり、目の前に広がる日本海と雄大な利尻富士を望む、自然豊かな環境に恵まれている。本校は全校児童３８名で、３・４年、５・６年の複式編成を伴う小規模校である。

離島における情報の入手は、かつては物理的な距離が大きな壁であった。ICT 機器の普及によりデジタル情報のスピードは本土と変わらなくなった一方、紙媒体としての新聞は今なお離島ならではの制約下にある。本島からフェリーで運ばれる新聞は、ダイヤの関係で到着が正午前後となり、いわゆる「朝刊」が届くのは昼休みや午後の授業時間である。また、時化（しけ）によるフェリー欠航の際には、新聞が１日以上届かない事態も珍しくない。ただ本町のような地方・離島部では、新聞は今なお地域の冠婚葬祭や産業ニュースを知るための重要な情報源として高齢層を中心に支えられている。

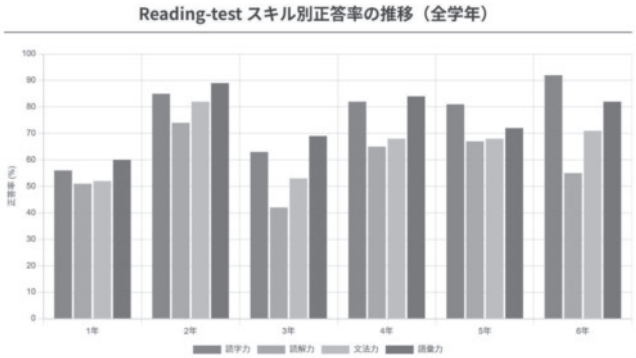
このような「情報の空白」を日常的に経験する地域だからこそ、届いた新聞が伝える社会の動きを「待ちわびて読む」ことの価値を再発見し、地域や小規模校の課題を社会と結びつけて考える NIE の実践には大きな教育的意義があると考え、本実践に取り組んだ。

## 2 児童の様子

まず初めに、小規模校における教育的課題と「言語環境」について述べる。

本校のような離島の小規模校においては、一人ひとりに寄り添ったきめ細かな指導が可能である一方、児童間の人間関係が固定化されやすく、日常の会話が「あ・うんの呼吸」で成立してしまう傾向がある。このため、初見の相手や社会に対して、自分の考えを客観的・論理的に説明する「言語的な必要感」が育ちにくいという課題がある。この言語環境の固定化が、複雑な社会情勢を読み解く際の粘り強い思考の持続を妨げる一因となっている。

また、本校の研究仮説に対する PDCA サイクルに基づいて本年度実施した Reading-test の結果を精査すると、本校児童の読解力の特性が以下の数値として顕著に表れた。




(1)「語彙力・読解力」における土台形成の必要性

学年が上がるにつれ、指示語や省略された主語を特定する「文法力」において、複雑な文構造になると正答率が乖離していく傾向が見られる。

(2)「読字力」および「読解力」の課題（高学年）

文章から直接的に読み取れる「読字力」の正答率に対し、書かれていない背景や意図を読み取

る「読解力」の正答率との乖離が見られる。

(3)「語彙力」と情報の処理速度

全体の傾向として、短い文の処理は可能だが、複数の条件を含む文章や、社会的な専門語彙を含む文章の読解において、正しく認識できない児童が一定数存在している。

これらの数値的課題を解決するため、本校では学校研究主題である「新しい時代を生き抜く力をもった子どもの育成 ～読解力と言語力を伸ばし、対話的で深い学びの実践を通して～」の実現に向け、NIE を全教科における言語活動の基盤として位置づけている。

## ３ 実践の内容

（１）主体的に手に取る「読書 SNS」の活用

８月に行われた NIE 北海道夏季セミナーでも他の実践校の教諭と情報交換を行ったが、図書館等に新聞コーナーを設置し、児童が自由に読めるようにしたとしても、実践指定校のような習慣付いていない学校で新聞を手に取る児童は一定数に限られることが実情であろう。そもそも家庭で新聞などを読む習慣のない児童が大半を占めるため、あるいは漁業従事者などで朝の始業が早い、新聞の地理的な問題（先述の通り）などが複合的に絡んでいると考えた。

そのため、段階を設定し徐々に新聞に親しむしくみを整えた。不可欠な要素は「保護者との連携」と「他者とのピアレビュー的視点」である。

**レベル1**
**★担任による新聞記事のピックアップ配信**
**（Microsoft TEAMS を活用した SNS 発信）**
**レベル2**
**★放課後に新聞を持ち帰り、保護者と読む。**
**気になった記事を自宅からピックアップ配信**
**（Microsoft TEAMS を活用した SNS 配信）**
**レベル3**
**★朝読書（10分間）での記事の要約配信**
**記事に対するピアレビューをコメント機能で実施**
**（Microsoft TEAMS を活用。他学年や本校教職員とのシームレス・タイムレスなやりとりを実現）**

体が小さくてもプロになれる　広島が3位指名　勝田成選手

10月23日にプロ野球のドラフト会議が開かれ、指名を受けた高校生や大学生らがプロ野球選手になる夢をかなえました。「その体では、プロにはなれない」広島東洋カープから3位指名を受けた近畿大の勝田成選手は、そんな言葉を聞き続けてきたと言います。163センチ　70キロ。入団すれば、12球団の支配下選手の中では、最も小さい身長の選手となります。11月12日の記事です。

低利用魚って？（朝日小学生新聞）9月13日

おいしいのに、あまり利用されていない魚　理由は様々
ウツボ、カガミダイ、ギンガメアジ、
シイラ・・・。低利用魚は、おいしいのにあまりりようされていない魚。理由は様々です。とれる量が少なくて出回りにくい魚、傷みやすくて鮮魚として運びにくい魚、骨のとげがあって注意が必要な魚などが含まれます。よく知られた魚でも、サイズが小さすぎる、傷ついているなどの理由で出回りにくかったり値段が下がったりすることがあります。肥料などに使われたりもしますが、そのまま捨てられてしまうものもあります。ほとんど利用されない魚のことを「未利用魚」といいます。こうした魚を私達が食べれば、資源を守り、漁師さんなど魚を届けてくれる人たちの暮らしを守ることにつながります。だから、おいしいのに使われなかったりされがちな低利用魚をたくさん食べてください！

やなぎや　あさひ、さの　たくろう、ふうや　のの、その他 1 人から 5 件の返信を開く
ふうや　のの　2025/12/03 14:28
はい！魚は美味しいから、もっと食べれるように、頑張ろう。
さの　たくろう　2025/12/03 14:29
魚を大切にして健康にしようね。
やなぎや　あさひ　2025/12/03 14:30

Teams を活用したクローズドな SNS 環境で他者に発信させることで、相手意識を持った主体性を引き出した。特筆すべきは児童が気付いた記事の多様性だ。「A 君の記事を B さんが要約したら違う感想を持った」という発言は、新聞の持つ多面性に気付いた指導要領解説の目標を達成する好事例となった。

（２）Reading-test の分析に基づく新聞ワーク活用

先述の通り、礼文小学校におけるアセスメント（Reading-test）の分析結果からは、児童の学習状況について二つの顕著な課題が浮かび上がった。一つは、文構造が複雑になるほど正答率が低下するという「文法力」の課題であり、もう一つは、初見の長文を読み解く際、自分が既に持っている知識と提示された情報を結びつけ、論理的に考察する力が弱いという傾向である。

これらの課題を解決し、必要な資質・能力を確実に向上させるための具体的な手立てとして、本校では新聞社発行のワークシートと自校作成のワークシートを織り交ぜながら導入・活用している。

A3 判両面印刷で毎週配布し、土日の家庭学習課題として保護者にも参加を呼び掛けた。表面は「事実関係の精読」、裏面は「根拠を引用した論理的記述」を中心に構成し、情報の断片を既有知識と統合するトレーニングを意図した。 回収後は添削を経て廊下に掲示し、成長の足跡を可視化した。保護者懇談会では「親子の会話が増えた」「二人三脚で取り組もうという気持ちになった」等の声が上がり、学校に留まらない「家庭と一体となった学びのサイクル」へと昇華され、こうした学校と家庭が連携した継続的な取り組みは、保護者意識の変容という面でも大きな成果を上げている。

（３）思考を深め、交流を広げる「シンブリオバトル」の展開 ―ICT を活用した協働的な知の創造―

Reading-test の結果から明らかになった「複数の情報を結びつけ、論理的に考察する力」の育成を加速させるため、本校では今年度の NIE 全国大会で提案された「シンブリオバトル」を導入し、独自の実践的追試を展開した。

本実践の最大の特徴は、単なる書評ゲームとしての「ビブリオバトル」の枠組みを越え、文部科学省が学習指導要領解説（総則編）で提唱する「主体的・対話的で深い学び」を ICT によって具現化した点にある。具体的には、ロイロノートを用いて記事の構成要素をカード化・構造化し、自らの思考プロセスを可視化させ、TEAMS でも動画データをもとにピアレビューにつなげた。これは、国語科解説において重視される「情報の関係付け」や「構造的・精査的な理解」を、デジタルツールの活用によって個別最適化させたプロセスと言える。

さらに、評価の在り方についても、従来の勝敗を目的とした投票ではなく、互いの推薦に対する「ピアレビュー（相互評価）」へ転換した。児童は記事の価値を「根拠」とともに提示し、他者からの多角的なフィードバックを受ける。この過程は、同解説が求める「自分の考えを形成し、共有する言語活動」そのものであり、感覚的な「面白い」を、論理的な裏付けを持った「説得力のある意見」へと昇華させる重要な質的変容を促している。

（４）小規模校の課題を克服する「新しい考えの表出」に向けた新聞活用

――身近な「転売」問題を題材とした多角的思考の形成――

小規模校や複式学級において、学習集団の固定化による「意見の同質化」は、思考の深化を阻む構造的な課題である。本校では、この課題を打破するために新聞記事を「教室外の多様な価値観」として導入し、児童の思考を揺さぶる実践を展開した。題材としたのは、2025 年 9 月 1 1 日付朝日小学生新聞の「『転売』悪いこと？」という記事である。この記事は、児童に馴染みの深い「マックのハッピーセット」や、「Nintendo Switch 2」といった、児童が当事者意識を持ちやすい具体的な事例を扱ったものである。

朝日小学生新聞　2025/9/11

ここで大切なのは教科横断的視点である。文部科学省の『小学校学習指導要領解説 社会編』では、「社会的事象を多角的に考える際、消費者の視点や事業者の視点など、異なる立場から考察すること」の重要性が示されている。また、道徳科の解説においても、「社会のきまりの意義を理解し、多角的な視点から物事を考え、判断する力の育成」が求められている。本実践は、新聞記事という「生きた教材」を媒介に、これら複数の教科のねらいを横断的に達成することを目指したものである。「ハッピーセットの付録が本当に欲しい人に届かないのはなぜか」「法的に禁止されていなければ何をしても良いのか」といった問いに対し、児童は記事内の事実を根拠に論理を組み立てた。これは、アセスメントで課題となった「既有の知識と情報を結びつけて論理的に考察する力」を、高度に活用する場となった。

（5）地域メディアを介した「表現の社会化」 ―日刊宗谷への投書と自己有用感の向上―

小規模校における言語活動の課題として、校内でのピアレビュー（相互評価）を繰り返すうちに、読み手が固定化され、評価や反応が予見可能なものとなってしまう「評価の物理的限界」が挙げられる。本校では、この限界を突破し、児童の表現意欲をさらに高めるための出口戦略として、地域紙「日刊宗谷」の俳句・川柳コーナーへの投書活動を展開した。特筆すべきは、この投書活動が児童自身のアイデアから生まれた点である。校内でのピアレビューに留まらず、「自分たちの作品をより多くの人に届けたい」という児童の主体的な願いは、まさに「主体的・対話的で深い学び」が実社会へと拡張した姿と言える。限られた学級人数の中での交流から、地域住民という広大な「読み手」へと対象を広げることで、児童は「どうすれば地域の人に情景が伝わるか」という推敲の視点をより鋭く研ぎ澄ませた学習となった。

## 4 おわりに

本実践は、礼文小学校における児童の資質・能力を、データに基づく客観的な分析から出発し、新聞という多面的なメディアを手段としていかに高めていくかを探究した一つの軌跡である。

振り返れば、本取り組みの起点はReading-testというエビデンスに基づいた「課題の把握」にあった。文法力や論理的考察力という具体的な課題に対し、家庭と連携した「新聞ワークシート」によって「基礎の構築」を図り、日常的な精読と根拠ある記述の習慣を根付かせた。

さらに、ICTを活用した「シンブリオバトル」では、ロイロノートによる思考の可視化とTeamsによる異学年交流を組み合わせることで、少人数という物理的制約を越えた「思考の深化」を実現した。また、最新の時事問題を題材としたパネルディスカッションは、小規模校特有の「意見の同質化」という壁を突き崩し、多角的かつ新しい考えを表出させる「視点の多角化」を可能にした。

そして、本実践の到達点となったのが、児童自らのアイデアから始まった「日刊宗谷」への投書活動である。校内のピアレビューという限定的な評価の場から、地域社会という広大な発信の場へと飛び出したことは、表現することの喜びを実感させ、確かな「社会との接続」と自己有用感をもたらした。

本実践が示したのは、新聞という「社会を映す鏡」を、受け取る（受信）だけでなく、発信する（発信）プラットフォームとして機能させることで、小規模校の「少人数ゆえの限界」を、むしろ「地域に支えられた豊かな学び」という強みへと転換できるという可能性である。本校は今後も、新聞を教科横断的な資質能力を向上する手段として効果的に活用し、児童一人ひとりの資質・能力を最大限に引き出す個別最適な学びと協働的な学びを追求していきたい。

日刊宗谷新聞　2025/10/30

２０２５年度　NIE 実践報告

# 社会的な事象に対する関心と課題意識の醸成

釧路市立清明小学校　主幹教諭　橋本　雄介

## １．はじめに

本校は、北海道釧路市にある、全校児童 335 名の中規模校である。【子どもの「考えを紡ぐ力」「絆を紡ぐ力」「未来を紡ぐ力」「命を紡ぐ力」の育成】を令和 7 年度の重点とし、教育活動を進めている。また、今年度は、「自己を調整し、自律的に自ら学ぶ子どもの育成」を校内研究の研究主題とした。課題解決型の研修スタイルをとり、自らの課題意識に基づいた部会に所属して、授業改善のポイントを明確にし、単元の構成や授業実践を互いに参観・協議し合うことを軸に研修を重ね、教師一人一人の授業力向上を目指している。

情報化が急速に進展し、多様な情報が氾濫する現代社会において、子どもたちが主体的に情報を取捨選択し、多角的に物事を考察し、自らの考えを形成・表現する力は、ますます重要となっている。新聞は、信頼性の高い情報源であると同時に、社会の多様な出来事を体系的に伝達する優れた教材である。本校では、この新聞を教育活動に積極的に取り入れる NIE（Newspaper in Education）実践を通して、児童が社会的な事象に関心を持ち、自らの課題として捉える意識を醸成することを目指した。

## ２.本校の実態と実践の目的

本校では、これまでも新聞記事を授業や朝の会で取り扱うなどの取り組みが行われてきた。しかし、その実践には温度差があり、学校全体としての体系的な取り組みには至っていなかった。そこで、本年度は「社会的な事象に対する関心と課題意識の醸成」を全校共通のテーマとして設定し、NIE の実践を学校運営の柱の一つに据えることとした。

実践の目的は、以下の通りである。

１．新聞を活用することを通して、児童が世の中の出来事を知り、知識を増やすと共に、多様な事象への興味・関心を高め、自らの見識を広げること。

２．新聞記事という良質なテキストに触れることを通して、「読む・書く・話す・聞く」といった言語能力の総合的な向上を図ること。

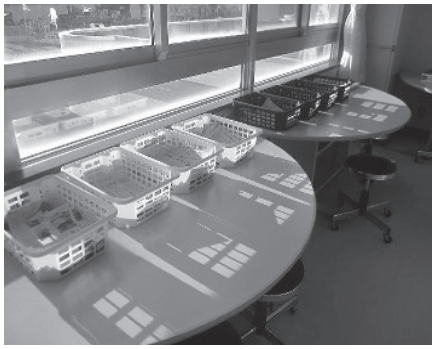
３．社会の出来事を「自分ごと」として捉え、背景にある課題を多角的に考える態度を育成すること。

## ３．実践の内容

### ①　新聞環境の整備

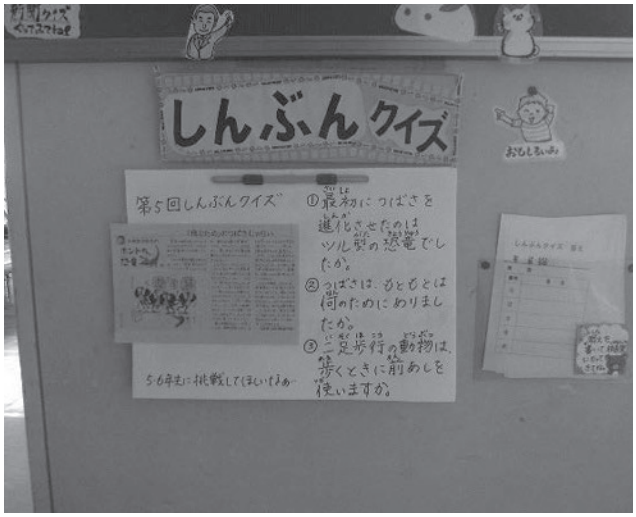
児童が日常的に新聞に触れられる環境づくりが、社会への関心を持つ第一歩であると考え、ハード面の整備から着手した。休み時間に自然と新聞が目に入るよう、児童の動線を考慮して、図書室ギャラリーに手作りの新聞閲覧台を設置した。そこには、高学年向けの一般紙、低・中学年向けの「子ども新聞」を配備し、学年の発達段階に応じたニーズに応えられるよう工夫した。

また、教職員が分担し、教育的価値の高い記事（例：SDGs に関連する記事、地域の課題を扱った記事）を継続的にスクラップした。これらは「環境」「科学」「スポーツ」「地域の話題」などのカテゴリー別に分類して、各学年の授業や自主学習の貴重な素材として活用している。

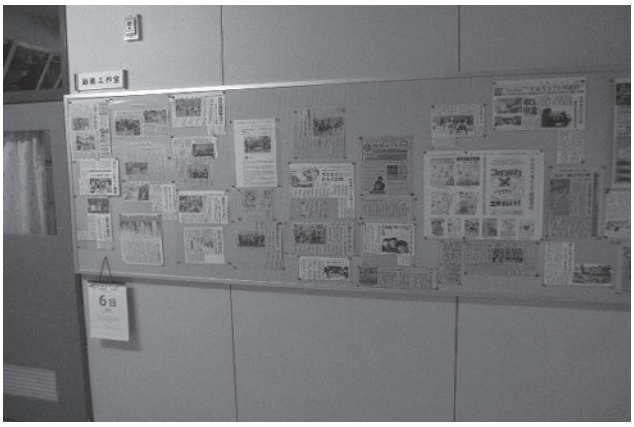


### ②　新聞クイズ・清明の子の活躍

新聞への関心を高めるための能動的な「仕掛け」として、校内に専用コーナーを常設した。ここでは、「〇〇国で開かれた国際会議の名前は？」「最近発見された新種の昆虫の名前は？」といった具体的なクイズを出題した。休み時間には多くの児童が集まり、答えを探して記事を読み込む姿が見られた。




また、スポーツや文化活動で活躍した本校児童の記事を大きく掲示することで、児童の自己肯定感を高めると共に、新聞情報が自分たちの生活と密接に関連していることを実感させ、社会の出来事をより身近なものとして捉えられるよう工夫している。



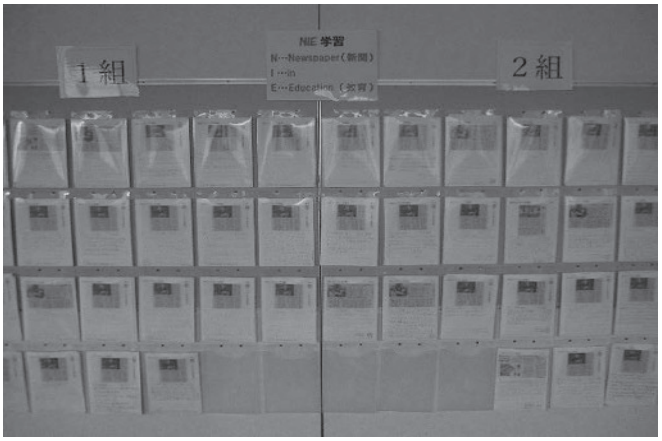
### ③　参観日でのNIEの取組

本年度、参観日において4年生のNIEの授業を公開した。この時間は、本校が全校で進めるNIEの取り組みの「キックオフ」として、児童と保護者の双方に「NIEとは何か」「なぜ今、新聞を読む力が必要なのか」を知ってもらう機会として明確に位置づけた。単なる授業公開ではなく、新聞記事を教材として読み、そこに何が書かれているか（事実）をマーカーで色分けして捉え、それに対する自分の考え（感想・意見）をワークシートに書き出すという、一連の基本的な活動を具体的に紹介した。

これにより、本校のNIEの取り組みの全体像を保護者に理解してもらうと共に、「家庭でもぜひ新聞を話題にしてほしい」というメッセージを伝える、重要なオリエンテーションの時間となった。

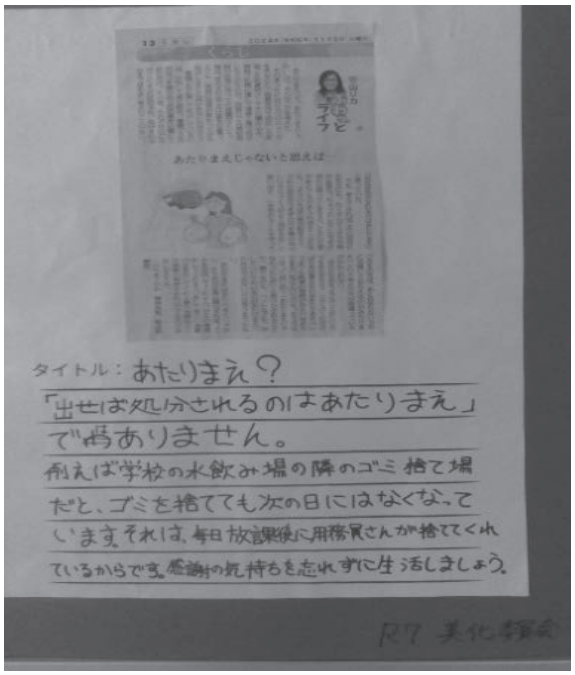
### ④スクラップ記事から事実と感想をまとめる、家庭学習の継続実践

新聞記事を読み解き、自らの考えを論理的に構築する力を養うため、スクラップ記事を活用したワークシート学習を導入した。この活動で最も重視したのは、児童が記事を読み、「記事に書かれている事実（5W1H)」と、「それに対する自分の感想・意見」を明確に区別して記述することである。これは、社会的な事象を客観的に把握し、感情論ではない論理的な意見形成を行う上で不可欠なスキルである。専用のワークシートには「事実を書き出す欄」と「どう思ったか、なぜそう思ったかを自由に書く欄」を設け、思考のプロセスを可視化した。この活動は家庭学習（自主学習）の一環としても推奨し、家庭での児童と保護者との対話のきっかけとなることも期待した。




### ⑤新聞を活用した委員会活動

児童の主体的な活動である委員会活動において、新聞の活用を意図的に推進した。特に文化委員会がその中心的役割を担い、委員会活動の時間に、配備された新聞各紙から注目記事を選定する話し合い活動を取り入れた。選定した記事は、コーナーの企画・運営に活用し、クイズ形式にしたり、低学年にも分かりやすく伝える工夫をしたりした。児童が単なる情報の受け手としてのみならず、発信者側として新聞に関わる機会を創出することで、記事内容への理解を深めると同時に、社会的な事象に対する興味関心を育むことをねらった。




## ４．成果と課題

### ①成果

成果として、まず全教職員が「社会的な事象に対する関心と課題意識の醸成」というNIEの目的を共通理解し、各学年の発達段階や児童の実態に基づいた計画のもと、体系的かつ継続的に実践できたことが挙げられる。

また、日常的に新聞に触れる環境が整備されたことで、「ニュースで見た」と社会の出来事を話題にする児童が増加し、事実と感想を分けて記述する訓練を通して、物事を客観的に捉える視点や論理的に記述する力が育まれつつある。こうした取り組みが、授業参観での実践公開や委員会活動との連携により、学校全体の文化として定着し始めた点も大きな成果である。

### ②課題

一方で、いくつかの課題も明らかになった。最も重要な課題は、新聞を「読む」活動から一歩進め、児童の思考力、判断力、表現力をより一層高めるための「新聞を活用した効果的な授業実践」を、今後さらに深化させていくことである。また、日々更新される膨大な情報の中から教育的価値の高い記事を選定・教材化するには時間を要するため、多忙な業務の中で教員が継続的に教材研究を行える校内体制の工夫も求められる。加えて、特に高学年において、一つの事象に対して多様な視点や意見が存在することに気づかせ、多角的に考察させる指導を一層充実させる必要性がある。

## ５おわりに

本校のNIE実践は、児童が社会とつながる「窓」として、新聞の価値を再認識する機会となった。環境整備から始まり、授業実践、家庭学習、委員会活動へと取り組みを広げる中で、児童の社会への関心は着実に高まりつつある。今後は、明らかになった課題、特に「効果的な授業実践」の深化に向け、教員間の授業研究や研修を一層充実させていく所存である。新聞という生きた教材を最大限に活用し、未来の創り手である子どもたちの「社会的な事象に対する関心と課題意識」を育むため、今後も組織的・継続的な実践を推進していく。

# 編集を終えて

2025年12月初旬、NIE実践指定校である函館市立南茅部中学校において、新潟県上越市立中郷中学校とのオンライン交流学習の授業が公開されました。本授業は、両校が総合的な学習の時間に位置付ける地域学習として、地域の福祉施設・公共施設の見学や仕事体験等を通して地域の課題や将来像について考察し、交流を通じて生徒の思考をさらに深めることを目的に実施されたものです。

生徒たちは、道新「まなベル」の新聞作成機能を活用し、自分の気付きや考えを紙面にまとめ上げました。事前に両校で記事を読み合ったことで、当日の交流では、相手の記事を踏まえた問いや意見が自然と生まれ、思考が深まっていく様子が印象的でした。体験を“書く”というプロセスを挟むことで、単なる記録としてではなく、考察や自己表現へと学びが豊かに広がっていく「新聞」という媒体の力を改めて感じる機会ともなりました。今後は、ICTの効果的な活用により、限られた時間の中でも新聞作成の教育的効果を最大限に生かす授業のさらなる充実が期待されます。

また、2026年1月に開催された、「2025全道NIEアドバイザー研修会」では、教育現場における生成AI活用の課題が中心的な議題となりました。全道から参加したNIEアドバイザーからは、「学生・生徒が自分の文章にこだわりをもたず、すぐに生成AIによる文章に頼ってしまう」ことへの危機感や、「義務教育では、まず児童・生徒が自ら文章を書く力を身につけることが重要であり、安易なAI依存には慎重であるべきでは」といった意見などが交わされました。次期学習指導要領でも生成AIの活用が位置付けられており、すでに全国の小中学校には生成AI活用モデル校が設置され、先進的な取り組みが進められています。教師がAIとどう向き合い、どのように子どもたちへ学びとして位置付けていくのか、いよいよ本格的に問われる時代が到来しています。

2025年度NIE実践報告書では、記事データベースの活用、図書館資料として新聞を位置付けた取組など、多様な実践が紹介されています。どの実践からも、先生方が子どもたちの学びを支えるために試行錯誤を重ねてきた熱意が伝わってきます。

本報告書が各学校での授業実践の一助となり、児童生徒の資質・能力の育成に寄与することを願っています。

北海道NIE推進協議会
NIEコーディネーター　上村　尚生

**2025年度　NIE実践報告書**

2026年5月発行
北海道NIE推進協議会　編

事務局　北海道新聞社みらい教育推進室
〒060-8711　札幌市中央区大通東４丁目１
TEL 011-210-5802

NIE

Newspaper in Education